胎児、その他

u_

胎児

　やっと、独りきりだ。しかし、どうも私には、私の死体が見えないようなのだ。死んでしまえば、もうそれっきり、自分の死体を見られないのだろうか。死体ばかりが見えないのではない。どうやら何一つ、見えないようではないか。どうしてだろう。死んでしまえば、何も見えなくなるに決まってる。いや、それなら、何も見えないと、どうして分かるのか。何も見えないように見えるなら、やはり何か、見えているのではないか。そうだ。ここにある限りのものは全て、その見える通りに見えている。地面の色も肌理も凹凸も、その上を吹く風の色までも、手に取るように見えるようだ。そしてやはり、肝腎の死体だけが、何処にも見当たらない。それなら、その見えているものが、私の新しい体なのだろうか。

　ずっと前から、死ぬ場所を決めておいた。もう、他にする事もなくなってからは、毎日、やって来ては、近くから遠くから、あらゆる方向から、少しの見落としもないように、ここを眺め回した。それから、その場に立って、体を少

しずつ回しては、ここから眺められるものを、隅から隅まで、撫でるように、目の中に映し込んでいった。そうして私はよく、私が死んで居なくなった世界に紛れ込んだ錯覚に捕らわれては、その錯覚の中に、わざと自らを置き去りにした。出来る事なら、その錯覚に、何時までも浸っていたかった。その錯覚に捕らわれている自らもを、きれいに忘れ去る事まで出来れば、そのままずっと、その永久に私の居なくなっている世界へと、溶け込んでさえ行けそうで、とても心地良かった。

別に、期日を定めていた訳ではないが、近い将来、自ら命を絶つとはっきり決める前から、実は、ここの景色は、何度か、頭に浮かんではいたのだ。一度きり、ただ通り過ぎただけの、全く私にゆかりのない土地だった。その通り過ぎた事も、夢のようにしか、思い出せなかった。長い時を経て、再び、ここに来た時、その見えてくるものが、一つ一つ、目新しい鮮やかな色形をしているのに驚かされながらも、昔、掠め見た時のままであるとも感じられて、それにまた、驚かされた。それ以来、来る度に、その前の時の記憶を裏切って、様々に変化して見えながらも、その決して変わらない有り様が、目の中で、磨き上げられて行くようだった。

さて、そうして、死ぬと決めてからは、ただ死ぬ準備のために生きていたに過ぎない。私に係わった人間達が、一切係われないような、私だけの死が欲し

かった。それには色々、細工が必要だ。それから死ぬまでの間は、生きていたと言っても、そのような死を手に入れるために、ただ下働きをして回っていたようなものだ。もしその仕事を、金だけで頼める人が見付かったなら、その人に、代わりが務まったような事柄ばかりだ。私はもう、死んでいなくても、死人んでいたも同然で、だから、この場所ももう、死骸の置き捨てられた場所同然だったのだ。私としては、すっかりその積もりだった。死んでもいないのに、もう死んだ場所があるのは、おかしな事ではある。順序が逆だ。

　まだ生きていた時に私が見たのは、まだ、私が死ねば、私の死んだ場所になる筈の、ただの、なだらかに傾いただけの地面でしかなかった。そして、私が死ぬのと入れ替わりに、れっきとした私の死んだ場所として、いわば、この世に生まれて来る訳だ。だから、生きていた私が見ていたものは、私の目によって、私の死んだ場所としての有り様だけ整えられた、まだこの世に産まれていない胎児のようなものだったのだ。それはもう、準備が整い次第、何時でもこの世に産まれ出られる姿をしていた。その微かに息づくのを、そっと撫でたりしていた私は、その我が子の産まれ出る瞬間を、生きて見られずに死んでゆく、その産みの親である訳だ。我が胎児は、私がここを訪れた度に、静かに息を潜めて、ただひたすら、親の死を待ち望んでいたに違いない。

　しかし、死んだ私が、なぜこんな事を考えていられるのだろう。死んでしま

えば、ものを考えたりする事など出来ないとばかり思っていた。それとも、ひょっとして、私は、まだ生きているのだろうか。私が生きているなら、私の死んだ場所は、まだ胎児のままだ。私は、生きたまま、その胎児のままの我が子のお腹の中に籠もって、産まれたばかりの我が子について、色々想像を巡らしているのだろうか。

　そんな筈はない。私は確かに私にケリを付けた。抜かりはなかった。私は、私が死んだ瞬間の、私の死体を見た。その色も恰好も、我ながら傑作な程に実にキテレツで、忘れようがない。そして、それを見た私自身を、すんなりとこの場所に置き去りにしたのを、はっきり憶えている。しかし、死んでしまって、そんな事を憶えていられるものだろうか。

　それを憶えていられるなら、私はまだ、どのようにか生きていて、この私の死んだ場所にいるのは、他の誰かなのではないだろうか。もちろん、他の誰かと言っても、それは、何処からどう見ても私であるような死者だ。

　それとも、そのような事をあれこれ考えている他の誰かを、この私の死んだ場所にいる私が、じっと観察でもしているのだろうか。そして、その観察しているのも、事によると、私そっくりの他の誰かなのではないか。では、私は何処に行ってしまうのか。私は何処にもいないのか。死んだのなら、何処にもいなくても、それ程おかしな事でもなさそうだ。それなら、死んだ場所など、何

処でも構わなかったのだ。しかし、私の他に誰が、このような事を考えられるだろうか。それとも、ここで死ねて、こうして私の死んだ場所にいられるからこそ、やはりこのように、色々と考えたり出来るのだろうか。

誰かが、歩み寄ってくる。誰かは立ち止まり、しばらくじっと動かずに、ここを眺めてから、地面の砂を優しく撫でる。その人の姿は、紛れもなく、生きている私自身だ。他に誰が、そんな事をするだろうか。それを、私は、死んで見ている。それとも、ここで死んでからなら、ここからは、ここに立つ人の姿はどれも、私自身に見えてしまうのだろうか。

しかし、私にそう見えてしまうからには、私にとってそれはやはり、私の姿でしかない。それとももう、人の姿に、私も他人もないのだろうか。死んだ者から見れば、人の姿はどれも、同じでしかないのかも知れない。ただ、死んで間もないばかりに、人の姿が、私にはどれも、私の姿に見えてしまうのだろうか。

たとえそうであったにしても、私には、ここに立っているのはやはり、まだ生きていて、まだ私が死ぬ場所と決めただけの地面の砂を、撫でている私でしかなさそうだ。そして、その生きた姿の私が、もう私がここで死んでいるのを、確かな事として分かっていても、少しもおかしな事でないように思えてくる。生きている事と死んでいる事の間に、どれ程の違いがあるのか。

昨日と同じように今日もまた、私は生きた人の姿をして、ここに立つ。そして、その生きた私が、確かにここで死んで、ここにいる私を見ている。だから、その死んで生きている私には、我が子は、何時まで経っても、私のお腹の中の胎児でもあり、また、私をそのお腹の中に収めた、私の死んだ場所として生まれ出たものでもあるようなのだ。(二〇〇一年一月一日)

*　*　*

塵

スナップを利かした鋼鉄の拳か何かで、激しくガラス板を打つような音がする。暫くして、もっと近くで同じ音がする。また暫くして、今度はずっと遠くで、そしてまた別の所から、音は夜空の頂までも巻き込むような、鋭い唸りを上げる。更に何度か、あちらこちらを移ろって、確かにまた、始めの所に戻ったのが分かる。

しかし今度は、そこから音は動かない。その震動は、動き回っていた時とは比べられない程、遠く深くまで伝わっているに違いなかった。そしてその震動は、その伝わった広い範囲の全てから、塵という塵を震わせ、その震えたまま、

それを音の側へと寄せ集めてゆく。そうして遂に、塵は拳の真下に集結したのだ。その塵の塊を叩くしかなくなって、音は鈍く籠もった。
それで直に、音が鳴りやんだ訳ではない。たゆまずに音は規則正しく鳴り続け、次第に粘りのような感じを響かせた。しかしその粘りもまた籠もり始め、音は少しずつ勢いを失って、遂に聞き取れなくなった。
何故なら、他ならぬこの私が、その鋼鉄の拳を、両腕を交叉させて受け止めたからだ。打たれ打たれて、粉々にされた塵芥から練り上げられて出来たのが、私だった。
私はその拳をちぎって投げ捨て、塵一つ落ちていないガラスの地表の上を進んでいった。
傷を見付けた。鋼で打った跡だ。そこを私は、私の拳で、打ちに打った。半端な気持ちでは駄目だ。ここを打つ事こそが、私を生かしているただ一つの私の本当の気持ちであると固く信じて、打ち続けなければならないのだ。そうして、見渡す限りガラスの地表は塵一つなく透明に輝いている更にその遠くまでガラスを震わせて、その遠くに散らばっている塵を震わせて、私の拳の真下まで、寄せ集めなければならないのだ。そしてその集まった塵を、打って打って練り上げて、私は私の伴侶を得るのだ。
しかし塵は何時まで経っても、やって来ない。ガラスの傷口だけが複雑に入

り組んで、ほんの少しずつ拡がりながら、見たこともないような、殆ど淫らでさえあるように絡み合った輝きを、その中に走らせるばかりだ。
もう打つのはやめた。打ってばかりいたところで、どうなる訳でもない。すると、細かいガラス片が、おもしろいように掌で掬い取れるのだ。そうして小さな傷口だった所は、私の丸めた体がすっぽり収まる程の窪みになっていた。
私は、そのすべすべした中を、丸くなったまままぐるぐると回り続け、一番気に入った輝き模様に頬ずりをする。
ガラスの地表は何処までも深く透き通っているのだから、私は、その入り組んだ輝きと二人きりで、宙に浮いて、何時までも抱き合っているようだ。(二〇〇一年一月三日)

*　　　　*　　　　*

十文字

空気の中に筋がある。誰かが垂直に定規を当てて、上から下へカッターナイフで切ったような。
指を入れて開くと、そこの空気は柔らかく拡げられ、中に別の空間が覗く。

体をするりと滑り込ませれば、そこからは別世界、とはならない。無理矢理片足が入るぐらいで、それより体を入れようとすると、急にその空気の裂け目は硬くなって閉まろうとする。

逆に、その裂け目を閉じ合わせれば、裂け目ごと、拳に握り取る事も出来る。上げ下げや傾けたりは出来ないが、横へは少し力を掛ければ、うまく動かせる。暫くそうして、好きに動かしては遊んでいた筈が、気がつくと、空気の筋は何処までも続く氷の上を、ただただ滑ってゆくようだ。

もう駄目か。拳を開いて放してしまえ。そうすれば助かるのだ、いや、こんな珍しいものは惜しい。却って拳に力は入るが、恐ろしいばかりに体は弱ってゆく。

行けども行けども空気ばかりで、何にも行き当たらないのはどうしてだ、と思うと、激しくぶつかった。頬がこけ、脛が血だらけのもう一人だった。

そいつの運んできた真横のやつと合わさって、空気の切れ目は綺麗な十文字になった。そして、二人の直ぐ脇を、鈍い光を受けてゆらゆらと佇んでいる。

切り口が二つになれば拡げ易い。その先の空間も、奥行きを増しているに違いない。いよいよ別世界か。

とんでもない。そこは空気の壁になってしまっている。壁にうっすら、十字の筋が引かれているだけで、爪を立てても滑るだけだ。

壁は何処まで続くのか。手探りして行くしかない。しかし、直に終わり、その向こう側へと回り込める。

いいや、先ず両の掌がくるりと返って吸い込まれ、それに続いて、体ごと回り込まされてしまったのだ。両腕は交差して、ねじ上げられたようなままだ。両脚もなぜか交差していて、斜めに浮き上がっている。全身が捩れ、先へ先へとねじ込まれてゆく。

さてそうして十字を見てみると、さも荒々しく切り裂かれた十字がびらびらと拡がる中に、その奥へ奥へと捩れてゆく窪みが、熱くなって湯気を立てていないだろうか。すると、硬いネジのようだった体が、急に背骨まで柔らかくなって、ひんやりと地べたを這う。

そこは空気の壁の真下で、首をひねると、表からも裏からも十字が見上げられる。もうそれは、ぐりぐりとした厚みを持ち、少しでもその輝きを増そうと、いきり立っているようだ。

もう一人がその遙か上を、すっかり角が削れて、ネジそっくりの体になって、やはり斜めに、まだまだ昇り続けている。一体どうやったのか。奴は明らかに、十字の裂け目からその奥に入り込んだに違いなかった。（二〇〇一年一月五日）

＊　　＊　　＊

舞台

床も壁も天井も、大小、円や角や訳の分からない変な形やら、一体この部屋には幾つ窓があるのか。よく見ると、窓の後ろに壁が回り込んで、そこにもまた捻れた窓があったりする。

それらの窓のカーテンをせっせと閉めて、私は身に着けているものを全て取り、ポーズを取った。私は絵か彫刻のモデルをしているようだ。しかし、画家も彫刻家もいない。それなら、私は、自画像でも拵えようとしているのか。

しかし私は、子供の頃から絵を描くのが大嫌いだ。絵ほど、気味の悪いものはない。ただ白いだけの紙なら、その白いままにしておけばいいではないか。なぜ、そこに、色だの形だのを投げ付けて、訳の分からない化け物を、呼び出さなければならないのか。絵の好きな奴なんて、何も見てないか、嘘つきか、変態だ。増して、彫刻など、粘土からして化け物だ。

では、私は遺書でも書こうとしているのか。死ぬ時くらい、他人が作ったものは何一つ纏わず、私本来の姿で死にたいものだ。カーテンを閉めたのも、心を穏やかに保つためか。しかし、遺書を書くには、言葉を使うしかない。言葉など借り物だ。そんなものを残せば、私は、私本来の姿に、余計なものを付け

加える事になってしまう。
　だからきっと、私は、この物言わぬ私の体そのものを、遺書にしようとしているのだ。
　それにしても、変な体をしている。この部屋の窓と同じ数だけの、首があり、胴体があり、性器があり、その倍の数の手足がこんがらがっている。まるで、がらくたを集めて縛った大きな荷物が、手に負えなくなって、置き去りにされているかのようだ。
　どうやって、こんな体の息の根を止めようというのか。いや、私はこれまで散々、この部屋で、様々にそれを試してきたのだ。そうして、死に損なう度に、その最も悶え苦しむ時の恰好の、一人分の体が、付け加わってしまったのではなかったか。そして、部屋を出るには、その新しい体専用の窓を、刳り抜くしかないのだ。
　その果てが、この体だ。今度失敗したら、果たして、この重い体を動かせるかどうか。金輪際死のうなどとするものか、と心に決めたところで、そもそも、もう新しい死に方も、思い浮かびそうにない。
　ああ、こうして、私は、生きている。もう、腹も減らなきゃ、喉も渇かない。内から、命が満ち満ちてくるようだ。これ程強い生き物が、他にあるだろうか。しかし、この先一体どうなるのだろう。誰も答えてはくれない。

それなら、自分で答えるしかない。私は何気なく、一番新しく加わった体を、ゆっくりほぐそうとしてみた。するとそれは、少しずつ浮き上がってゆくではないか。今まで一度もそうしようとしなかったので、そう出来なかっただけなのか。しかし、行き成りバラバラにしては、私は、あちらこちらに散らばって、ただ生きているより尚悪い、生きても死んでもいるような羽目に陥るに違いない。一つずつ慎重に掛からなければ。

最後に加わった体が、先ず一番に離れると、その体は後ろを向いて、或る窓に向かって進み、そこから、部屋を出て行く。その窓は、最後に私が刳り抜いたやつだ。そして、その窓は独りでに、萎んで消えた。二番目に新しい体が、切り離される。次ぎも次ぎも、同じ事の繰り返しだが、その体は出て行って、その窓も消えた。やはり、二番目に新しい窓から、それぞれ違った恰好で、違った形の窓から出て行くので、その様子は見ていて飽きない。

最後に残った体が、最後の窓から出て行って、その部屋は、誰も居ない、窓一つ、出入り口一つない、全く閉ざされたものとなった。

いや、そこは少しも閉ざされてはいない。そこは劇場の舞台なのだ。幕が降り、拍手が起こる。もう一度幕が上がると、それまで変な恰好をし続けていた役者達が、素っ裸で、並んでお辞儀をした。

しかし、客の一人が怒り出す。

「おかしいじゃないか。何で誰もいなくなるんだ！いいか、最初の自殺未遂の時、ちゃんと自分の体が一つ、なきゃいけないだろう。だったら、最後に、その体が残ってなけりゃ、数が合わんじゃないか。初めからやり直せ。」

嫌がる照明係を無理矢理裸にして、劇は、初めからやり直される事になった。一人去り、二人去り、最後の窓から一人が去ると、計算通り、一人だけが残された。

そこは、劇場などではなく、全く閉ざされた空っぽの部屋なのだ。そこに、裸で独り残された私に、死への恐れが込み上げてくる。どうやら、私は、それに堪え切れず、呆気なく死んだようだ。（二〇〇一年一月七日）

＊　　＊　　＊

息

白い薄手の生地を着重ねて天使の恰好をしようとしてし損なったような彼女は突っ立てられている木の棒にしがみついていた。彼女より少し背の高い灰色の樹皮を纏ったその棒は地面に打ち込まれている訳でもないのに微動だにしない。しがみついているようで彼女が棒をきつく真っ直ぐに押さえ付けているの

だ。ほっそりした彼女の腰に比べると棒の胴回りの方がずっとありそうだった。彼女は私を見付けて私に呼び掛けて微笑みかける。私は挨拶を交わして脚に羽根が生えてその羽根に運ばれるままに通り過ぎる。通り過ぎた筈が私は少し遠回りしてまた彼女に近付いていた。近くで見ると棒の樹皮はいかにも硬そうにゴツゴツしていた。

　彼女とは暫く会っていなかった。どれ程かは思い出せない。私は彼女の声が聞きたかった。顔を見たかった。少しでも言葉を交わしたかった。その動く全身の姿をたとえ遠くからでも眺めたかった。私が咄嗟に思い浮かんだ事をあれこれ尋ねると彼女はそれまでになく弾んだ明るい声で近況を何でもすらすらと話した。しかしそれは私の耳に滑らか過ぎた。その声の上っ面に乗せられた私の体は独りでにどんどん暗い方に運ばれて行くのだった。それで私は彼女が今何処に居るかくらいしか聞き取れなかった。

　なぜそんな事を聞いてしまったのか。彼女が何処に居るかくらい知っている。たまたま何日か見掛けなかっただけで聞くまでもないのだ。もっと聞かなければならない事が山ほどあった。私は広い駐車場の真ん中で指が千切れそうな重い荷物を両手に持って自分の車を見失っていた。それらしき車を見付けて近付くとその車の影に隠れていたような他の誰かが何喰わぬ顔でいきなり姿を現して必ず二人以上で連れ立って乗っていってしまう。車は次々に乗り去られ一番

端にたった一台残ったのが自分の車であるしかなかった。荷物の中身は林檎ばかりだった。が袋に穴が開いていて車に辿り着いた時には二三個しか袋に残っていなかった。私は一刻も早くここを離れたかった。大急ぎで車に乗り込み発進させた。

私より先に駐車場を出て行った全ての車が見渡せる道路に私は出た。一斉にライトが輝いて濡れた道路と互いの車体を照らした。私の車だけがその輝きの外を走った。音もなく闇の中を雨が落ちて来ていた。車のエンジン音と私の心臓の音が一つに溶けてどちらがどちらか分からなくなった。心臓に入り込んだエンジンが今にも心臓から飛び出て行きそうだった。しかし飛び出したのはどうやら心臓の方だった。心臓が私と林檎を乗せた鉄の塊を前進させているのだった。心臓を止める訳にはいかないので車は走り続けるしかなかったが心臓は目の前の宙に浮いて私の体より大きく見えた。なおも脹れ続ける心臓を車の震動が休みなく削ぎ落としてやっとその大きさを保っていた。しかしそうして脹れた肉を削がれるたびに心臓の中は虚ろになって愈愈宙に浮くしかなくなるようだった。それでも私は目的地に辿り着いた。また胸の中に収まった心臓は殆ど止まる寸前のようで固く強張ってまだエンジンの振動が残っていた。林檎はずっと外で待っていた林檎が欲しいという人に全て渡した。私は殆ど四つん這いで犬のように階段を駆け上りドアを開けた。

そこで彼女は横になった棒に同じように横になってその棒にしがみついていた。照明のせいか棒は先程より黒く見えてその上彼女の影に半分隠れているのに却って浮き立って見えた。棒はただじっとしていた。明らかに私は開けるべきドアを間違えたと気付いた。どうして開ける前に気付かないのか。いや何処にでもある何の変哲もないドアであれば気付ける筈もない。私は自分のためのドアを探した。しかし他のどのドアを開けても中は恐ろしく狭くどう手足を折り畳んでも体を全て中に収める事さえ出来ないのだった。結局ドアのない所が私のための場所だった。いやそこは場所とさえ呼べそうにない。しかし私はさもそこが何かの場所であるように振る舞ってそこに居なければならないのだ。全く他にどうしようもない。それは鉄の塊を走らせるよりも私の心臓を痛め付けた。私は俯せに倒れ込んだ。しかし何処に？

そこに場所はないのだ。私は私の心臓に向かって私を倒れ込ませたに違いなかった。何時までもつか分からないが心臓だけが頼りだ。誰かが私に水を飲ませてくれたようだったがその度に益益喉は渇き喉ばかりか胃の中まで干涸らびて行くようだった。

私の体は見失われていた。ただ青い画面に向き合っていた。それは私が何十年も見続けたものだった。その間それを好きになったり嫌いになったりを何度も繰り返した。しかしその青い画面は私の中に遂に何も残さなかった。今また

見直しても何十年少しも変わらずそれはただ青いだけだった。
何処からか彼女の甲高い笑い声が聞こえて来る。しかしそれは私の方にではなく彼女がしがみついている棒に向けられたものだった。しかしそれは何もしなくても彼女の吐く熱い息ですっかり暖まっているに違いなかった。物言わぬ棒は何かを心に誓わなければならないと思った。しかし今更何をどのように？　私は何のためのその場所さえもうすっかり切り取られてなくなっているではないか。私の心の（二〇〇一年一月九日）

*　　　*　　　*

悔悟の念

生まれて直ぐ、本当に捨てられたらしい。ただ親は、直ぐに心を入れ替えたので、私は、二、三時間、冷たい風に当たっただけで済んだ。
しかし、どうもおかしい。よく見るとそれは、布にくるまれた赤ん坊ではなく、落ち葉にくるまれた、青白いほっそりした小さな幼虫だった。なぜ親ともあろう者が、そんな間違いを犯すのか。
親が蛾の成虫だからだ。いや、まさかそんな筈はない。親はただ蛾の縫いぐ

るみを着込んで、蛾の振りをしているだけだ。しかし、年中そんな着ぐるみでは苦しい。全身に湿疹が出来て、胸がゼイゼイ言い出し、心臓をひどく弱らせた。

それでも幼虫は、拾われて直に、自力でペパーミントの鉢植えに辿り着き、食うにもねぐらにも、困らなかった。

そろそろ、糸を吐いて、蛹になる準備を始めなければならない。しかし親は、着ぐるみの中で、人の何倍もの速さで歳を取り、その子はもう、隣の子と同じく、幼稚園に上がる歳になっていなければならなかった。幼虫は、半分出来上がった繭から引っ張り出され、幼稚園児の縫いぐるみに入れられ、幼稚園に通う事になった。幼虫は、縫いぐるみの中で、また糸を吐き直し、繭にくるまって、何とか蛹になった。

しかし、幼稚園の先生ともあろう者が、生身の子供と縫いぐるみの区別も付かないとは。幼稚園の先生もまた、生まれて直ぐ捨てられて、何かと間違われて取り戻された、縫いぐるみだからだろうか。そんな筈はない。縫いぐるみが、あの、少しも言う事を聞かない園児どもに、お遊戯をさせられる訳がない。

さて親は、病気が幾らひどくなっても、蛾の着ぐるみのままなので、またまた人より速く歳を取って、隣の子など直ぐに追い越して、その子はもう、親戚の子と同じく、中学に上がる歳になっていなければならないのだった。幼稚園

を中退し、蛹は、中学生の縫いぐるみを着せられて、中学に転入した。
しかし、またまた親は速く歳を取り、上級生を追い越して、その子はもう、卒業間近になっていなければならないのだった。
親が老衰で死んだ。
蛹は、無事変態を果たし、縫いぐるみの中で、蛾の成虫となり、卒業を待たず、同級生より一足早く、中学校の制服を着たまま、独り社会へと飛び立って行った。
空飛ぶ十四歳が辿り着いたのは、河原の凧揚げ大会だった。自ら凧になって技を連発すれば、優勝など訳はない。トロフィーは透明人間の手に渡り（なぜなら、凧は誰かに操られていなければならず、その姿が見えないなら、それは透明人間であるしかない）、人から見えないハンディーを乗り越えた凧揚げ名人の事は、広く世間に知られた。
しかし、審査員ともあろう者が、どうして透明人間などデッチ上げたのか。それより分からないのは、どうして、誰独り、そのデッチ上げを追求しないのか。透明人間が失踪するまでは、不正を暴くのはよして、みんなで一稼ぎしようという事か。しかし、初めから透明では、凧を残して失踪する事も出来ないではないか。
半年ぐらい経った或る日、透明人間は、蛾の着ぐるみの中で、ちゃんと目に

見えるミイラになって発見された。面白がっていた連中も、やっとこの馬鹿げたまやかしから解放されて、ホッとした。

蛾にしても、何時までも人間に付き合っている暇はない。早く相手を見付けて、子孫を残さなくてはならない。やっとの事で、縫いぐるみから抜け出して、ハーブ園の方に飛んで行った。

ただの縫いぐるみでしかなくなった中学生爪は、どんな爪揚げ名人にも操れる筈はなく、直に忘れられた。

しかし、私の親は独り者で、全く誰とも、そんなような付き合いのなかったくせに、どうして子供を作れたのか。初めから、子供など居なかったのではないか。

居もしないのに、子供を捨てた積もりになって、それを直ぐ取り戻そうとして、し損なって、そのニセモノの悔悟の念を、蛾の親になる事で紛らす事にして、さも、失われた子供が居たように、思い込もうとしたのではないか。他に考えられるだろうか。しかしどうしてまた、そんな、ややこしい事をしなければならないのか。

多分、私の親は、或る人の子供の事が、どうしても頭から離れなかったのだ。そして、自分にとって子供と言えば、その人との子供しか考えられなかったのではないか。しかし、その人は離れて行ってしまった。何処かで、その人はも

う、子供を作ったかも知れない。
　その居るか居ないか分からない子供を、どうやったら忘れられるか。あれこれ延々と、考えたに違いない。そして結局、居もしない私を考えついたのだ。その人との子供を作れなかった悲しみを、居もしない私を失った悲しみにすり替えて、何とか乗り切ろうとしたようだ。どだい、無理な話だ。（二〇〇一年一月十一日）

＊　　＊　　＊

催眠術

　二本並んだ白く太い柱と柱に挟まれた、幅の狭い重いドアを、体を押し付けてやっとの事で開け、ふかふかの赤い絨毯の上を、よろけながら二、三歩進んだ。
　赤い壁を背に五人の女が、ソファーに並んで腰を下ろしているのを見て、突然、笑いが止まらなくなる。五人が五人とも、髪を赤く染めて、全く同じような目線を私に向けているからだろうか。しかし、私は誰だ。客か。六人目の女か。そのどちらかだ。ここの店長だったり、ましてや所轄の警察官でないのだ

けは確かだ。
　女達に見られていると、それに支えられるように、よろけずに進める。私は、女達と向き合って腰を下ろす。膝を揃え、両脚を横に流した。すると、私は女か。私の前にグラスが置かれ、女の一人が笑いかけながら酒を注ぐ。それなら、私は客か。
　その間もずっと、私は笑い続けていた。ただその笑い声は、うまく聞き取れない。低く微かな、さざめくような何かの響きが、部屋の中をゆっくり動き回ってはいた。そんな微かな響きに、笑い声が掻き消されるものだろうか。
　やがて五人は、私をそっちのけにして、前からそういう約束をしていたかのように、互いに、覚えたての催眠術を掛け合って、遊び出した。
　一人が、一人に。その掛けられた一人が、二人に。別の一人は、三人に。また別の一人は四人に。しかし、途中で掛ける相手を取り替えたりするので、結局、五人誰もが、他の四人に向かって、掛けながら掛けられる事になって、最後に誰がこの催眠術を解くのか、他人事ながら、やはりどうしても気になってしまう。
　五人は、蛇になって床を這いながら、馬になりながら、鳥になりながら、哀しい思い出に泣きじゃくりながら、大金を手にして万歳しながら、目を剥いて怒りながら、海に潜ったまま居眠りしながら、夏の太陽を頻りに眩しがりなが

ら、箱に入ったつもりが、そのまま箱になってしまったりして…

しかし、彼女達がこんな真似をしているのは、明らかに、私の笑いを止めようとしてなのだ。しかしそれは、どうにも逆効果でしかなく、ますます笑いはひどくなる。それで私は、何とか私の力だけで、笑いを押さえ込もうとするが、これもまた、更に逆効果でしかなかった。

思いきって、私はそこを出ようとするが、出口が見当たらない。私は押さえた腹を捩りながら、壁伝いに部屋の中をぐるぐる歩き続ける。必ず何処かにドアはあり、私はそれを見落としているだけなのだ。

しかし分かったのは、ここにはカウンターもなく、バーテンダーの姿もなく、ただ部屋の真ん中に、ソファーが三脚、向き合っているだけということだった。他には、赤い壁と床と天井以外、綺麗に何もなかった。

すると五人の女は、溶けて一つに合わさって、また全然感じの違う、瓜実顔の黒い服を着た女になっていて、私以上の高い声で、笑うのだった。それは笑うというより、何処までも垂直に尖ってゆく叫びに近かった。ただその声でさえ、周りの何かに掻き消されるようで、私の耳には、その半分くらいしか届いていないように感じられた。

私もまだ、笑っていただろうか。頬を触ると、確かに、笑顔はそのままだった。しかし、私の笑い声は、全く聞き取れないようではないか。私が、尚も笑

い声を上げようと努めながら近付いて、その女の顔を覗き込もうとすると、女は笑うのをぴたりとやめて、立ち上がったかと思うと、もう部屋を出てしまっていた。私も、もう少しも笑えなくなっていた。

　私は何処までも、彼女の後を追うのだった。ただし、一歩も部屋を出ないままで。彼女に追いついて捕まえたら、直ぐにまた、私独りでずっと待ち続けていたこの部屋に、彼女を引き戻すためだ。

　待っている私はじりじりする。追っている私は、何をのろのろやってるんだ。追っている私は、闇の中を、ひたすら女を追っていた。

　やっと女を、遠くの人混みに見付けた。そこから女は階段を下り、ビル管理の人間しか通らない地下通路を、白い小さな荷物を抱えて歩いてゆく。私は、高く靴音を響かせて、全速力で、一気に彼女を追い抜き、その先の階段を駆け上った。そして、ただの一度も振り返らなかった事に、大きな満足を覚えるのだった。

　もう、彼女を追ったり待ったりしなくて済むのだ。追い掛けた私は、確かにそれで、解き放たれた。

　しかし、待たされている私は、もう彼女を追う事も叶わず、一切の望みを絶たれ、悲しみに震え、打ち沈むしかない。どちらを向いても、ただ赤い壁に向き合うしかなく、自分の体の遠近感すら朧になって、ただ息苦しいばかりでは

ないか。そのまま息が止まってくれる訳でもなく、私はただ、もう何処にあるか定かでない自分の体を、掻き毟ってでもいるようにするのが精一杯だった。ではやはり、私は、客ではなく、女だったのか。ただ、客の相手は、まだ一度もした事はない。こんな出入りし難い所に、誰が辿り着けるだろうか。或いは、看板の一枚くらいは、よそと同じようにチカチカしているのかも知れない。しかし、それを目当てにやって来ようとしても、近付く事さえ出来ず、何処かよそへ、入り込んでしまうに違いない。

　しかし、どうして私は、私を女だと思うのか。追っていった私は、私ではなく、私のお目当ての女ではなかったか。変な話だが、私は何時もどうしても、その彼女を私自身と見間違えてしまうのだ。その女が、もう二度とここへ戻って来ないのが分かって、それで客の私は、どうにもここを出られなくなってしまったのではないか。

　ただ、それも確かではない。電話で外と連絡さえ付けば、その相手に、私の声が男か女か、尋ねる事も出来るのだが、この部屋に何もない事だけは、真っ先に確かめてしまってある。（二〇〇一年一月十三日）

＊　　＊　　＊

靴擦れ

男なのに、女の靴を履きたがる。その男の脱ぎ捨てたヨレヨレの靴を拾ってきて、履く女がいる。履くとブカブカで、彼女の握り拳がすっぽり入って、それでもまだ隙間がある。真っ直ぐに突っ張った脚を振り立てて歩くと、カポカポと靴音を響かせて、どんどん前に進める。それまで行けなかった所へも、幾らでも踏み込んで行けるようだった。そう思うと、疲れ知らずに、幾らでも歩き回れる。

直にひどい靴擦れが出来る。血が出ても、そんなの何でもない。むしろ血が流れる程に、ずっと歩いていられるのが嬉しい。皮膚の薄い膜が出来掛けて、それがまた直ぐ破れて、もっと血が出て、それが汗と埃に混じって、黒くなって固まりながら、盛り上がる。痛みは苦にならない。痛みは楽しい。痛くて、思わず喉から絞り出される、自分の悲鳴が聞けたりすれば、ゾクゾクして、天を仰いで歪んだ顔は、笑っているのだった。

そうして、歩いて歩いて、痛くて痛くて、痛みは体中に満ちて、それでもやっぱり瞼は重くなって、その瞼の裏が真っ赤に溶けるようで、そこにもまた、痛みが溢れて、意識がなくなって倒れれば、もうそのまま、眠るしかない。夢なんて、絶対見ない。眠りから覚めると、まだ目が開かないのに、もう起き上

がって、何歩か歩み出して、それからやっと目が開いて、また何歩か歩いて、真っ白な光の中に、遠い景色の断片を見て取って、その断片の方へ、自分の体をグイと投げ込む。その次ぎに来る光は、何時も同じように眩しい。その眩しさに、景色の断片が徐々に呼び寄せられて、やがて一纏まりになる遠い景色が彼女を取り囲み、それと自分の体が溶け合って、風が肌に馴染んでやっと、周りの明るさが分かる。もちろん夜なら、真っ暗闇の事もある。

　決して、歩くのを已めない生活。飲み食いも、便を垂れるのも、体を洗うのも、着替えるのも、足の爪を切るのさえ、立ち止まってする事はない。尤も、足の爪は、大体独りでに磨り減って、伸びるのは、なぜか小指の爪だけだ。ただ歩きながら眠る事はない。歩いてさえいれば、どんな睡魔も払い除けられる。前触れなく倒れるまで、決して眠らない。それから、化粧はしない。髪は切らない。櫛は通さない。ムダ毛の処理はしない。生えてくる毛に、ムダも何もない。

　ぶつかりそうになっても、もうどんな物でも、避けられるようになった。だけど、避けるばかりが能じゃない。蹴倒せるヤツは、蹴倒して行く。こっちから近寄って、蹴倒してやる事もある。ただ、先を急ぎたいので、わざわざそれを、踏ん付けたりはしない。

　近頃、ドアを蹴破る事を覚えた。ドアほど、蹴倒し甲斐のあるものはない。

その先に、それまで見えなかったものが見えるのだから。ブチ開けてみるまでは、何が出て来るか分からない。歩ける所は、大方歩き尽くしてしまって、その退屈を紛らすのに、それは大いに助かる。

だからもう、ドアばかり探してる。見付けたら、早速飛んで行って、ブチ破るまで蹴り続ける。そこでもう、歩く以上の快感がやって来る。蹴破って、ドアの奥に押し入って、その見ず知らずの場所を狂ったように歩き回れるのも、そこまた凄い快感だ。一度も歩いた事のない場所が、目の前の現われて来て、そこをグングン踏み付けてゆくのは、やはり何とも言えない。もしそこが、倉庫や物置だったりしたら、積み上げられている物を全部蹴倒し、棚だって蹴倒し、蹴倒せない棚は、中に入って、中のものを、全部蹴り出して行く。倉庫の中の景色が、どんどん変わって行く。何度やっても飽きない。今のところ、これが一番の快感だ。

さて、そんな彼女だが、或る時、自分の中に、何か自分と違うものが入り込んでいるのに気付いた。それとも、それは、自分の中に居るのだから、もう一人の自分のようでもある。彼女は、何時も前ばかり向いていて、後ろの方が少し疎かになって、その隙間に何かが紛れ込んだのか。それとも、何かが独りでに生まれたのか。それは初め、とても小さくて、ノッペラボウで、真っ白だったが、次第に大きくなって、それなりに形が出来上がって来て、漸く彼女は、

それが自分の子供だと分かった。女の子だった。そして父親も、男の靴を履いた彼女自身だったろう。歩くごとに、ドアを蹴破るごとに、子供はすくすく成長し、とうとう、母親と同じ年頃まで追い付いてしまった。

娘も、化粧はしない。髪も伸び放題で、むだ毛の処理もしない。しかし、男遊びはしたくてしょうがない。同い歳の母は、どうして男には目もくれないのか。歩きながら、何でもやってのける女だ。独りで、ただずっと歩き続けただけで、娘まで産んで育ててしまった女だ。歩きながら男を漁るくらい、何でもない筈だ。それとも、独りで子供を作ってしまったくらいだから、男の靴を履いただけで、彼女の中に、もう男を住まわせていたか。それとも、彼女の前半分はもう男だったか。その男が、彼女の後ろ半分の女を孕ませたのか。

しかし、娘はそうではない。初めから、男の靴を履いて歩いている。だから、幾ら歩いても、彼女は彼女のまま、前も後ろもない、ただ一人の女のままだ。娘はまどろっこしくなって、母親の中で母親を殺し、その体を乗っ取って、すっかり自分独りのものにすると、早速、男遊びに浸った。靴は、女物に履き替えた。後は何も変わらない。娘もまた、歩き続けた。その脚力も、母親と比べて、全く引けを取らない。違いはただ、歩きながら男漁りをする事だけだ。

それも半端でなく、ただ男を見付けるためにだけ、歩き回って、あちこちのドアを蹴破っているようだった。独りで歩いているのを、見た事がない。何時

も、男を腹に抱えて、髪を振り乱し、変な声を上げながら、右に左に忙しく体を傾けて、ジグザグに大股で歩いていた。

　男を捕まえると、先ず真っ先に靴を脱がせ、それをドブに捨てさせた。そして、別れ際に必ず、その男を抱えていた間に履いていた、自分の女物の靴を、男に与えた。

　男共の目当ては、女の体より、その女の履いていた靴ではないか。全くそうに違いない。なぜなら、その靴を履いた男共の殆どは、それまでのように、ただ女に攫われるのを待っているのでなく、早速、その女の靴を見せびらかすように、誇らしげに歩き回り始めるからだ。そうして、それまで行かなかった所へも、どんどん踏み入って、疲れ知らずに、幾らでも歩き回る。

　もちろん、靴は男の足には恐ろしく窮屈で、直ぐにひどい靴擦れが出来る。しかし、痛みは苦にならない。痛みは快感だ。痛くて、思わず喉から絞り出される、自分の呻き声を聞いては、ウキウキした気分になる。

　そのように、ひたすら歩き回る、女の靴を履いた男は、その自らをぐいぐい引っ張ってゆく先頭では、すっかり女だった。その女は、初めから男と繋がっているのだから、当たり前のように孕んで、男の子を産む。男の子は成長し、女が欲しくなって、父親を殺し、その体を乗っ取って、すっかり自分独りのものにした。しかし、女の靴は、すっかり足の肉にめり込んで、脱ぎたくても脱

ぐ事が出来ない。
　彼は、その靴のまま、女に襲い掛かった。しかし女は、嬉しそうに声を上げながら、簡単に彼の脇を擦り抜けてしまう。彼は、直に気付くのだった。女を捕まえられないのは、その女共が、自分の求めているものではないからだ。もう、脇を擦り抜けられても、大して悔しいとも思わない。逆に、もし捕まえてしまって、女の靴を履いた者同士で、一体何が出来るだろう。
　それで彼は、男の靴を履いた女を探し回るようになった。しかし、たまに見付けても、その女の方が、男の靴を履いているせいなのか、彼よりずっと足が速くて、とても追い付けなかった。（二〇〇一年一月十五日）

＊　＊　＊

娘

　やっと家に帰り着いた。部屋中が熱で溶けだしている。そんな筈はない。池には氷が張っていた。目のせいだ。帰る途中から、何か変だと思っていたが、私の目が熱で溶けだしていたのだ。どうしよう。
　私は、私にだけ似た、小学四年の娘を連れて外に出た。娘と夜の散歩をする

以外、どうしていいか思い付かなかった。

　前から人が歩いてくる。夜と同じように暗い人影。娘がそれを指さして叫ぶ。「ハー、あの人、頭のテッペンから、火、噴いてる。」しかし、その姿は暗いままで、私の目にはもう、何処かに紛れて見えなくなっている。

　別の人影とすれ違う。「アー、顔が真っ黒。鉄の仮面、被ってるみたい。」しかし、そいつの顔は脂の浮いた赤ら顔だ。

　別の人影を指さして娘は叫ぶ。「キー。ヒャー。凄ぉい。体中真っ黒でドロドロ。男か女かも分からん。」確かに暗くて性別は見分けられないが、その着ている服は白く浮き立つようで、柔らかそうに風に揺れている。

　親が親なら子も子だ。何で物事を、もうちょっと、まともに見られないんだろう。しかし私の目にも、娘の言ったとおりの人影がちらりと見えた。しかもそれは、娘の言った三人分を独りで引き受けているようにも見えた。

　私はそちらに、ぐんぐん近付く。そこは公園だった。するとその中のあちらにもこちらにも、その人影が、見え隠れしているようなのだ。その一番近くにいる奴に更に近付くと、それは湾曲した大きな鏡だった。新聞ネタの一件以来、公園には何枚も、大きな鏡が置かれることになったのだ。それらの鏡で、死角になりやすい所を映し出し、何処から見ても公園中が見て取れるようにされたのだ。

その鏡に映る、頭のテッペンから火を噴き、重そうでごつごつした、今にも頭の皮ごと引き剥がして前に落ちそうな鉄仮面を付けて、その口から黒いドロドロの涎を吐き続け、体中真っ黒でテカテカ光っているのは、私だった。

「ひどい恰好だ」と思うべきところだ。しかしそんな姿を娘に晒していてさえ、私は落ち込むどころか、ずっとこのままでいられたらとさえ思うのだった。娘もブランコに乗って、私を見て、ブランコからずり落ちそうに身を捩って、妙にウキウキしているではないか。

これで良し。周りのビルよりも、もっと高く火を噴くぞ。もっと涎を吐いて、公園中、重油を垂れ流したようにしてやるぞ。鉄仮面だって、もっとごつごつにして、もっとイガイガにして、尖んがりだらけの爆発頭にしてやれ。

しかしそうはならなかった。火はどんどん弱まり、それは火というより、ただ突っ立てた髪を橙に染めただけのようでもある。鉄仮面も、ごつごつが取れ、色褪せ、私の白くのっぺりした素顔にどんどん近付いているではないか。口からも微かに黒い滴が、ぽたぽたと零れる程度だ。

「ああ、これこそ、私の浅ましい姿だ。娘には見せられない。」娘よ、消えてなくなってくれ。するともう、娘など最初から何処にもいない。

火は弱まり続け、仮面はのっぺりし続け、滴の垂れる間隔はますます開いてゆく。それでも、火は、何処までも橙色の髪に近付いてはゆくが、ただの髪に

はならない。仮面も私の素顔に近付き続けるばかりで、私の素顔にはならない。涎ももう、滴にはならないが、口の端をうっすらと汚し続けるのをやめない。

私は振り返る。家に戻る道がない。それでもその、振り返った方へと真っ直ぐ引き返すしかない。誰も私を変だとは思わない。私より、よほど髪を振り立てた奴や、仮面を付けたような顔の奴や、口から黒っぽい痰や反吐を吐いている奴らが、私とすれ違ってゆく。

しかし私は、明らかに行き過ぎている。もう誰ともすれ違わない。すれ違う者がいないのに、歩く理由はないのだ。

私はしゃがみ込んで、そっと掌を頭に乗せ、火の熱さを確かめた。その手で、鉄仮面の冷たさを確かめた。口の端の湿り気を確かめた。（二〇〇一年一月十七日）

＊　＊　＊

無意味

二人が同時に、誰かに、気がふれるほどひどい恋をした。

愛される方も、さぞかし辛い筈だ。そう思うと、それがまた二人を苦しめる。

或る日の事、その愛される者がいなくなった。二人の共通の友人によると、前の日ずっと、思い詰めたように、たった独りで、深い川の流れを見詰めていたそうだ。二人は直ぐにも、その同じ所から後を追いたかった。しかし、友人に引き留められるまでもなく、恋する辛さに憔悴しきっていて、もう立ち上がる事も出来なかった。

時間だけが経って、やがて二人は同じように、毎日毎日、恐ろしく長い時間を眠るようになっていた。やがて落ち着いて、どうやら、どうにでも生きてゆくしかなさそうだった。

しばらくして、二人の共通の友人が疑われる事になった。二人の事を思って、二人に愛された者を、川へ突き落としたのではないか、というものだった。そして、その共通の友人は、直に姿をくらました。警察が居場所を突き止めると、二人に愛された者と、ちゃんとした夫婦になっていた。元からずっと、その二人に愛された者は、その二人の共通の友人を好きで、その人と一緒になろうと、心に決めていたのだった。

一人は、周りから御殿と呼ばれるような家に住んでいる。そのひどい恋を忘れようとして、努めて明るく人と交わり、休む事なく、人の何倍も働き続けたからだ。良き伴侶にも恵まれ、家族は栄え、多くの人に看取られ、惜しまれながら死んだ。しかし最期に彼は、何を考えていただろうか。

もう一人は、どこだか知らないが、何処かの汚い借家の裏のドブの中で、首の骨をひん曲げて、へんてこりんな恰好で死んでいたそうだ。若い日の事を、一時も忘れられなかった。それでいつも病気がちで、人と口を利きたがらなかった。歳を取るにつれ、あの人の事が淡い思い出になってしまいそうになると、激しく自らを責めて、何日も部屋に籠もって脂汗を垂らし、ありうる筈のないありとあらゆる妄想を駆り立ててでも、思い出せる限りのあの人の姿を、ありありと目に浮かべなければ気が済まなかった。それが遠い思い出にでもなってしまったら、それまで生きてきた事は、全くの無意味だった。

さて、この二人の生き方の何処がどう違うのだろう。二人は双子のようにそっくりではないか。同じ双子の相手と同じ日に結婚し、同じ一つの家に住み、同じ仕事を同じようにして、同じ趣味を持ち、同じ新聞を読み、政治に対して全く同じ意見を述べ、同じ神様を同じ程度に信じて、同じ日に同じ病気で死んだ双子のように。

いや、そっくりだからって、それでどうした。ただそれだけの事だ。そうだとして、今さら何の役に立つ。そう生きるしかなかっただけだ。

では一体、この私は誰に似ているだろうか。あの若い日、私は、あの死んだ二人が最後まで求め続けた人と、ごく当たり前に出会って、互いに惹かれ合って、何の障害もなく結ばれた。私のその人は、あの二人がその人を求めたのよ

り前から、ずっと私を求めていた。私もその人を求めていて、全く自然にそれに応えた。
そうして私は何時も、ずっと満たされてきた。その人と暮らすようになってから、生まれてきた幸せを、感謝しなかった日はなかったように思う。
私の方が、あの二人より、その人を愛した事だけは間違いない。私達はずっと一緒だったのだから。一緒に居なければ、決して得られないものがある。いや、恐らく地上の殆ど全てのものが、そのようにして得られるのだ。そして私は、間違いなくそれらを得た。
だから私は、誰とも似ていない。ただ私だけが、私のようにして今ここに居る。それは少し寂しくもある。しかしとにかく、私はそのように生きられた。
私の愛する事の出来たその人が、最後まで、私と一緒に居る事を願っていてくれたお陰だ。その人が居て、私はこうして、誰とも似ていない私になる事が出来た。
私は、あの二人のように苦しまなかった。苦しめば苦しんだ分、人は見分けが付かない程、似たものになってしまう。彼らはその最期に、自分の人生を、自分だけの掛け替えのないものと思えて死ねただろうか。恐らく、そうではあるまい。二人は、若い日以来、もう再び会う事さえなく、全く別の生き方をしたにも拘わらず、その苦しみを共有し過ぎた。だから彼らの人生は、取り替え

が利いてしまう。
　それぞれは、たった独りで苦しんだのに、いや、たった独りで苦しまなければならなかったからこそ、そうなってしまうのだ。何も、二人だけではない。あの二人と同じ苦しみを、たった独りで最後まで抱いて、死んでいった者達の人生は、どれも互いに、取り替えが利いてしまうに違いない。
　一方私は、それは生きていれば色々あって、そうして何事かを苦しんだにしても、何時も、その人と苦しみを分かち合った。その分かち合った苦しみは、後にも先にも、この世界に一つしかない。それは独りだけで苦しんだのでは、決して得られないものだ。そうして私は、私だけの私を生きられた。
　私は別に、ずっと独りで苦しまなければならなかった者達を、高みから見下ろしているのではない。ただ遠くから黙って、ぼんやり眺めるだけだ。この同じ星に生まれながら、互いに決して行き来できない、別の大地に思いを馳せるだけだ。
　そうして私はまた、あの人との、全く静かであるだけの、二人の時を過ごすのだ。決して私は独りにはならない。何時までも、二人だけの時の中に居られる。これこそが、あの二人が最後まで求め続けて、一切得られなかったものだ。
（二〇〇一年一月十九日）

*

*

*

挨拶

　彼はそこに居る限り、誰のどんな命令にも従わなければならない。見渡すと、四、五人の男達が、テーブルを囲んで何枚も紙をひっくり返しながら、何か話し合っている。別の所では若い女が二人、立ち話をしている。彼は踵を返し、狭い通路に入った。後ろに人の気配を感じて振り返ると、先ず目の小さなキビキビした動きの男が彼を睨み付け、その直ぐ後ろを酒瓶を持った女が付いてくる。もう一度振り返ると、二人とも脇の通路に逸れたらしく、いなくなっている。

　通路を抜けて、別の広間に出ると、その酒瓶を持った女は、もう先にそこに来ていて、しゃがみ込んで別の女と何か話している。彼が回り込んでも、彼女は後ろ姿しか見せない。はっきりと見覚えのある細い足。もっと肉付きのいい足の女は、沢山いる。しかしそいつらは、みんな直に何処かに行ってしまう。

　彼はそこに居るまた別の女に、彼女達の消息を尋ねる。尋ねられた女は何処か暗闇に紛れて、答えは返ってこない。酒瓶を持った女の周りに、それとなく男達が寄ってくる。直に女は、酒瓶を話し相手の女に渡し、通路を一人引き返

していった。男達はそこに居る女達の所にそれぞれ散っていった。しかしその間も、彼だけは、真っ直ぐな通路を引き返してゆく女の後ろ姿から、目を離せずにいた。ずっと長い通路。女の姿は小さくなりながらも、消える事はなかった。所々で、天井からの灯りに照らされる度に、女の髪と肩が暗い中に浮き立った。

通りすがりの男に、彼は仕事を言いつけられた。それにはまた通路を抜け、元の所に引き返さなければならない。引き返す方が、通路はずっと短く感じられる。

そこには先程と同じ者達が、同じ所で同じようにしていた。その中から彼は、言伝を言い渡す男を捜さなければならないのに、その名前を聞き忘れた。捜し回る度に、誰も座ろうとしない古びた椅子が目に付く。そこは、あの酒瓶を持ち運んだ女専用の席に違いなかった。彼はそこを何度も行き過ぎては引き返した。結局、捜している男はそこには居ないのが分かった。

そうしていると彼は、テーブルを囲む男の一人に用を言いつけられた。彼はそこと隣り合う小さな部屋に入って、用事に取りかかった。部屋には何人かの男女が机に向かっていて、調べものをしているらしかった。机を触ると妙に湿っぽい。彼は寒気を覚えた。そうして、ここは彼の用事をする所ではないと思い至った。そこを出ようとすると、一番端の机の脇に、酒瓶を運んだ女が立っ

ているのを見付けた。彼女は、そこで机に向かっている別の女の調べものを覗き込んでいた。そして女の質問に、調べものの女は丁寧に答えているようだった。二人とも笑みを浮かべているが、彼には、なぜ二人が笑みを浮かべているのかが分からず、それだけで、それを許せないのだった。

彼は裏口から外へ出た。外へ出てしまえば、もう誰も彼に命令する者はいない。しかし、すれ違う者、すれ違う者、皆、彼にしつこい程、挨拶をしてくる。しかしそれは彼には、引き返してまた持ち場に戻れと言われているようだった。しかし彼がぐんぐん進むのは、初めの用を済ませるためなのだ。しかし彼は、笑顔で挨拶を返しながら、彼らに逆らって前に進み続ける事に疲れ、自分が何処へ向かおうとしているのか分からなくなった。

取り敢えず何処でもいいから、建物の中に入らければ、自分の体がくるくると同じ所を回りだし、その場から動けなくなりそうだった。そうして入った建物の中は、足がすくむ程広く、高すぎて見えない天井からは何だか分からないものが色々吊り下がっている。人の数も数え切れない程だが、中に彼は、見覚えのある肉付きのいい足の女達を、何人も見付ける事が出来た。

彼はその一人一人に近付いては、相手が彼に気付くか気付かないかの内にその場を立ち去るよう心掛けながら、挨拶して回った。

しかしそうしながら彼は、あの酒瓶を運んだ女の後を付けていたのだった。

彼が、自分がそうしている事に気付くと、女は立ち止まった。そして直ぐ、白い石の柱の向こうに回り込んだ。彼も少し回り込めば、また女の姿を見付けられた。女は見付けられるのを分かっていた。分かっていて彼から身を隠すような振りをするのを、わざと彼に見せつけようとしているに違いないのだった。彼にはそれは意外だったが、彼が女の後を付けたのは、女のそのような振りを見たかったからかも知れなかった。

その女の態度を確かめれば、彼はもう女の後など付け回さなくてもいいし、女の方も彼の後を付けてくる事はなさそうだった。しかし彼は、それで安心できた訳ではない。

それ以来、彼はいつも女の後を付け回しては、彼からわざと身を隠してみせるような女の態度を確かめずにはいられなくなったからだ。そしてその度に、こんな事をしていて何になるのだろうと思うのだった。時には訳が分からなくなる程、そうしてしまうのを激しく呪うのだった。

別の女を追い回してみようともするのだが、そうしたところで、いつの間にか、彼の方が後を付け回される羽目になって、そうして逃げ回っている筈が、その先にまた、必ずあの細い足の女が、それとなく佇んでいて、彼はそれを最後にしようと、人目も憚らず、その女にまた近付いてしまうのだった。

彼の望むとおり、女はまた、同じ態度を取るのだから、これを最後にしよう

としている彼は、ただそこを行き過ぎるだけではないか。しかし、決して彼と目を合わせず、微かに笑みを浮かべるその女の表情を横から見て取ると、怒りに似た、怒りよりもっとずっと虚しいような感情が込み上げてくるのを押さえるのがやっとで、彼はその場を立ち去ることも出来ず、女と顔を背け合いながら、妙な睨み合いを続けるしかないのだった。（二〇〇一年一月二十一日）

＊　　＊　　＊

煙

強い朝の日差しを受けて、髪を風になびかせて、晴れやかな輝く笑顔を高く掲げている三人の若い女。何処へでも動き回れそうな軽い皿のようなものの上に乗っている。その内の一人が、私だった。

しかし、私達は何時までこうしているのだろう。恐らく私達は、多くの人達に見られるために、ここにいるのだ。私達の自然な笑顔を、ついさっきまで多くの人たちが讃えていたではないか。

私達はずっと朝の中にいたが、私達の周りは、何時しか誰もいない夜だった。三人の内の二人が、後ろから足首をつかまれて、そこから引き摺り下ろされた。

二人は夜の中を何年も過ごし、やっと夜に慣れて、夜の外にも出られるようになった。

二人は真っ先に、三人揃って朝日を受けていた場所に引き返した。すると三人はその間、ずっと何も変わらずにいたように、三人揃って並んでいた。ただ引き返した二人は、その三人より一段低い所に居て、ある距離よりは三人に近付けないのだった。そのまま何も出来ず、そこに立ち尽くしていると、その見ている二人の内の一人が、後ろから両腕をつかまれて、そこから連れ去られた。

その一人は、夜の中を何年も過ごした。そこは本当の夜だった。その夜に比べれば、前の夜はほんの黄昏に過ぎなかった。それでも何年かしてやっと、その暗さにも慣れて、そこから外に出られるようにもなると、真っ先に連れ去られた所に戻った。

するとそこには、自分も含めた二人が、それでもまだ朝日を浴びて笑顔で輝き続ける三人を、ただ立ち尽くして見上げていた。しかし、その三人を輝かせていた朝も、やっと終わるようだった。しかし朝が終わって昼が来るのではなく、朝の光がそのまま衰えて、夜の中に吸い込まれて消えてしまうのだった。

その夜こそ、全く何の光をも受け付けない、全くの闇だった。それでも三人だけは、互いに腰に手を回して前を見て、互いが輝いているのを確認し合えた。

しばらく三人は、その皿のような乗り物の上をぐらぐらしていたが、やがて

こつをつかむと、思いのままにその乗り物を滑らせて、動き回ることが出来た。その三人だけは、内から輝く光を持っていたので、その通り過ぎた後には光跡が出来た。そしてそれは、ずっと消えずに残ったので、彼女達は、その夜の地平に、思う存分、光の線を描いて楽しむのだった。そのコースは決して定まりはしないが、それでも、光の線が繰り返し繰り返し交わってしまう所が自ずと出来て、遂にそこで、彼女達とは別の新しい光が生まれ、少しずつ膨らんでゆくのだった。

　彼女達だけでは誰も寄ってこなかったのに、その光の場所へは、砂漠に泉が湧き出たように、人々が次第に群がって町を作った。すると、動き回る三人は大いに邪魔だった。取り押さえられて、焼却炉で燃やされた。その彼女達の煙が、空高くで、突然朝の光を受けて輝いたかどうかは知らない。

　しかし私はまだ、煙にはなっていないようだ。それなら私は何処に居るのか。

　引き摺り下ろされることなく、ずっと三人の中に居た一人でないのだけは確かだ。その一人は遂に、焼かれて消えてなくなるまで闇を知らなかった。その一人と私との違いは何だろう。私はまだ、朝が最後まで終わっていない所に居て、それについて思い巡らしている。そしてひょっとして、闇を知らないでいるのは私の方で、その一人だけが、ずっと本当の闇の中にいたと、思えてもくるのだった。だから彼女を引き摺り下ろそうとしても、誰にも引き摺り下ろせ

なかったのだ。
　それではせめて彼女だけは、煙となって空高くで輝いてくれるだろうか。いやそんな事になったなら、煙になってまで、彼女は闇から抜け出せないのかも知れない。
　しかしその一人が、どうして私でない事があるだろう。私はずっと一人だったのだから。（二〇〇一年一月二十三日）

＊　＊　＊

避難

　いつも空色の服を着ている女を探している。一人の男が鏡張りの箱の直ぐ脇で、それに息を吐き掛けて、鏡に映る像を色々に操っている。一人の女が、細かく砕けた鏡の破片の入った箱に、人差し指を突っ込んで、破片がちくちく指に突き刺さるのを味わいながら、ゆっくり掻き回している。そして後もう一人の女が、私の探している女だった。彼女は空色の服の上に、黒い鎧のような肩を怒らせたものを着込んでいて、いつもとだいぶ感じが違う。
　男が操る鏡像を、女二人で批評し合っていて、それを男は聞くともなしに聞

きながら、その批評に促されるかのように、刻々鏡像の形を変えている。

しかし私はその三人に加わる事はない。なぜならそこは波打ち際で、私は海水に浸かったら溶けてしまうからだ。私は、いい加減に捏ねられた紙粘土で出来た、軽い二本の脚でしかない。二本の脚が繋がる股の上に、小さくてもちゃんと頭を乗せているつもりだが、そこまで見る者は誰もいないようだ。

鏡の破片を掻き回している女は、掻き回すたびに太り続けている。元は空色だった服が、パンパンに伸びて膨れて、怒ったように赤くなってしまった。そして低い声でずっとぶつぶつ呟いている。

一方、空色の服の女は、しばらくの間黙っていては、かん高いが、ものを優しく撫でさするような声で、男に言葉をかけるのだった。

そこに居るべきでないだけで、そこに居ないことにされてしまっている私は、声を出させても貰えない。しかし私に声を出すための喉があっただろうか。声を出すどころか、私は足元から溶け始めていた。足元どころか、波しぶきを被って、全身ドロドロになり始めていた。

私はそこを立ち去り、空色の服の女が何時も立ち寄ってしばらく時を過ごす、ガラスケースの前に向かった。老人が三人通りかかり、これからラーメンを食うべきかどうか議論を始めた。その内の一人はガラスケースや鏡の箱の持ち主であり、後の二人はその客だった。

そのガラスケースの前にも私はいるべきではなかった。そこは何時も風が渦を巻いている場所で、濡れた紙粘土の私では、千切れ千切れにされて、乾いて飛ばされてしまうはずだった。

　私は無理をせず、建物の二階に避難した。そこでは黒板を前に一組の中年の男女が、その建物の上の階の増改築を巡って議論していた。そこにも私はいるべきではなかった。そこはとても湿気が強く、私はぶよぶよにふやけてしまいそうだった。私は二人に、外が雪であるのだけを辛うじて伝えて、直ぐにそこを立ち去った。

　ガラスケースの方へ戻ると、空色の服の女が寒そうに両腕を前に抱え、笑いながら、老人達の相手をしていた。私は急いでそこを行き過ぎると、また二階に上がった。中年男女の後ろから、何十人もの、てんでばらばらな歌声や歓声が混ざり合ってわき上がっていた。私はそれらの声を聞くべきではなかった。それらは耐え難い。だから私はそこに居るべきではなかった。

　また私はガラスケースの前を過ぎ、鏡の箱の置かれてある波打ち際に引き返した。初めの三人の姿は見えず、替わりに二人の男がそこの床にモップを掛けていた。もう波はすっかり引いて、それなら私はそこに居られるようであったが、私がそこへ踏み込めば、折角磨いた床を汚すのは明らかだったし、空色の服の女の居ないそこに、用はなかった。

しかし私にはもう、ガラスケースの前まで出て行くだけの気力が失せていた。私は何度も、私の股の間に埋め込まれた時計の針を見直した。何処であれ、もう私が居てはいけない時間が来ているようだった。このまま歩き回っていたら、私はぼろぼろになって崩れてしまうしかない。清掃係は直ぐ後ろに迫っている。私は諦めて、温度も湿度も調節できるジュラルミンケースの中へ、潜り込むしかなかった。（二〇〇一年一月二十五日）

＊　＊　＊

時計

今にもめくれ落ちそうに、壁に貼り付いている。右の壁の小さな窓だけが、微かに光を採っている。左の壁は暗くて見えない。正面の壁は仄かに白く浮き立つ。花瓶が掛けてあり、白い花が一輪挿してある。花瓶の水は疾っくに干上がっているし、誰もこんな所にわざわざ花など挿しに来るはずもない。

ただ花瓶を見ただけで、そこに挿された花の姿までが、ありありと見えてしまうのだ。何とか近付いて、その花の匂いも知りたいものだ。

私の体は、柔らかく壁から迫り出してゆくが、直ぐに強ばって、真後ろに縮

んで、また壁に戻ってしまう。しかしその戻った所には、どう見ても壁しかない。私は壁だった。

その壁の小さな破片が一つ、こぼれ落ちて、暗くて見えない床をサイコロのように転がってゆく。しかしコツコツコツと音までするのに、床はもう落ちてしまって、跡形もないのが分かるのだった。小さな破片の形をした白い虫が、ものが転がるような羽音を立てて、ふらふらと飛んでゆくようだったからだ。

さてそれが見失われると、私は自分が誰であるかが分かった。私はその白い花に、殆ど目に見えない程の小さな時計を埋め込もうとする職人だった。すると左右の壁は、下から吹き上がる風に飛ばされて、もうなくなっていた。そして私であるはずの壁もなかった。

振り返ると、直ぐ前は凄い絶壁がそそり立ち、ずっと高い所から落ちてきて、何処までも落ちてゆく一瞬の中に私はいた。いや、まるでロープに縛られて、宙づりにされているようではないか。そうしてゆらゆらと揺れ続けることによって、次第に私は、私の足元に地面を描き出すことが出来た。私は地に足を着けていて、縛られてもいない。

ただその地面は、決して絶壁には届いていないようだ。近付こうとすると、ゴムまりのような空白で満たされた、落ちることの出来ない落とし穴にでも足をさらわれてしまうようだ。そうして何度試みても、進もうとする私の体は突

然傾いて、くるりと後ろを向かされるばかりだ。
　すると目の前は絶壁などではなく、冷たい空気の他には何もないのだった。そこを小さな花瓶が落ちてゆく。その落ちてゆく一瞬を見て取る中に、私はいるのだ。一瞬は過ぎ去るしかない。花瓶は更にずっと落ちていって、二度と戻ってこないだろう。その花瓶にも、やはり花が挿してある。
　私は私について思い違いをしていた。私は、その花が自らの中に埋め込んだ小さな時計を、花も時計も傷付けないで、そっとそこから取り出す職人だった。確かに私はその技を身に付けているはずだ。ただ、まだ一度も試したことはないのかも知れない。
　私は先ず、まだ真新しいその部屋に入って、花瓶に花を挿すところから始めるつもりだった。しかし私はなぜか、何度試みても、その部屋に入ることさえ出来ない。それに、壁に掛かっているのも花瓶ではなく、飾り気の全くない小さなプラスチックの額縁ではないか。中は何も描かれていない。
　それならせめて私は、そこに花瓶の絵を描き、その花瓶にふさわしい花の絵を描き、その花から、生々しく時を刻む音を立てる、硬い時計を取り出すことを考えた。それもまた叶わないで、その額縁の白い紙の上に、花瓶と花をありありと見て取ることが、私のたった一つの取り柄となったようだった。
　いや、まだ取り柄はある。空中を落ちていて、次の瞬間には、影も形もなく

なるその花瓶と花を、ありありと見て取れる。そればかりではない。私がその瞬間の中にずっと居られるのは、そのありありと見えるだけで手の届かない花から、ちゃんともう、時計を取り出していて、それをしばし止める事が出来ているからに違いない。

掌を拡げて、もう一度よく見直してみろ。砂粒のような時計が一つ、汗が光る中に見えるだろう。それとも私はそれを、握り潰してしまったのだろうか。そうしてもう、この落ちてゆく花瓶を前にする瞬間から外へは、出られなくなっているのだろうか。（二〇〇一年一月二十七日）

＊　　＊　　＊

一人

彼女が空を見ると、彼女は空になる。彼女が道を見ると、彼女は道になる。彼女が自分の指先を見詰めると、彼女は自分の指先になる。彼女が人を見ると、彼女は人になる。と言っても、その誰かになってしまうのではない。たとえば空を見上げていた彼女が、振り返って私を見ると、彼女は、彼女という人になる。そんな彼女の事が分かるのは、多分私だけだ。そうしてずっと、彼女を追

って、その姿を楽しんでいた。その彼女が、暗い道に止められた白い車を見た。その時だけ、彼女は、その車にはならなかった。車が近付いて来て、ドアが開けられ、彼女は、その車の助手席に乗り込む。それっきり私は、彼女とは永久に切り離された。そこから先は分からない。分かりたくもないが、分かろうともしてしまう。そればかりは、どうしようもない。たとえば、彼女は部屋に居る。

＊　＊　＊　＊　＊

彼女は、そこに独りで四人居る。なぜなら、部屋は四角だから。三角形の部屋だったら、三人になる。しかし、二角形や一角形の部屋はないから、彼女は、二人や一人になる事はない。それなら、形があってないような、グニャグニャしていて、何処も角張っていない部屋に入れられたら、どうか。そんな部屋に入った事はないので、分からないが、多分、何人と数えようのない彼女になるのだろう。ただ、太い柱が壁から突き出したりして、複雑に入り組んではいるが、何処もかも角張った部屋に入った時には、一々その凹凸の角の数を数えたりしなくても、即座に、彼女はその数を感じ取って、その数だけの彼女になっている。

　四角い部屋に彼女が四人居たからと言って、心や体が四つずつある訳ではない。それは、部屋に入る前には一つずつだったように、一つずつのままだ。そ

の一つの心と体を、四人の彼女が、共有しているだけだ。では、外に出たらどうなるのか。外の世界は、彼女に何の影響も及ぼさない。だから、四角い部屋から出てきたなら、四人のままだ。ただ、その四人である事は、彼女にも見えなくなってしまう。自分はさっき四角い部屋から出てきたと、ちゃんと憶えていれば、四人だと分かるが、忘れてしまえば、もう何人かは分からない。尤も、それで困る事など何もない。

外に出ると直ぐに、彼女を待っていた彼の車に乗り込む。車の中は、色々と曲線が組合わさってはいるが、やはり大まかに見れば四角なのだ。そこに、彼と二人だから、四つの角を二人で分け合って、彼と彼女は、二人ずつ居る。しかし、車が走り出すと、また違ってくる。車内の四角は、絶えず、後ろへ後ろへと置き去りにされて行く。その分、彼も彼女も、二人ずつの筈が、二人未満になってしまう。そのまま、スピードを上げれば、遂には一人ずつになって、彼と彼女とで二人切りにもなれそうだか、幾ら車を暴走させようと、そこまでのスピードは出ない。しかし、二人未満とは、どういう事だろうか。その内の一人は分かるが、残りの端数の彼女とは、どんなものなのか。それはもう、彼女ではないのかも知れない。一人の彼女と、もう一つ彼女でない半端なものが、一組になって、彼女は、彼女で居るのではないか。そして車が止まると、彼女はまた、彼と同じで、二人ずつになる。

　彼と彼女は、二人ずつで、車を降りる。ドアを開けて短い廊下を歩いても、やや不安定ではあっても、ほぼ二人ずつのままだ。それからまた、ドアを開けて、部屋に入る。その部屋は複雑に入り組んでいて、しかも天井と壁のかなりの部分が、グニャグニャしている。彼女は、さて自分が何人かなどと、数えようとはしない。今の自分が何人かなどという事に拘ったりするのは、愚かな事と分かっている。替わりに彼女は、彼を見る。彼の姿は、真っ直ぐな所も少しはあったが、粗方グニャグニャして見える。もちろん、彼がそこに何人で居るかは、彼女には分からないし、また拘る事でもない。それを見て彼女は、その彼の姿の通りのものになった。いや、なりきってはいないだろう。空を見て、直ぐに空になったようにはならない。その殆ど同じ姿同士が、何処かで一人になる。もう何処からが彼で、何処からが彼女か、分からない。それでもまだ、何処かで彼女は、まだ何人の彼女ではあったし、別の何処かでは、何人とは数えようのない彼女であるしかない。

　それから暫くして、彼と彼女は、ドアを開け、廊下を抜け、またドアを開けて、外に止めてある車に乗り込み、車を走らせる。車は、家の前で止まり、玄関を開けると、中で、二人ずつになった二人が待っている。彼と彼女も、車の中からは、二人ずつの二人だった。彼らが全員、四角い部屋に入ると、彼女は、そこに一人で居る彼女になって、一人ずつになった他の三人と話を弾ませたり

もする。（二〇〇一年一月二十九日）

＊　　＊　　＊

望み

人の声ほど耳障りなものはない。そんな事も分からなかったとは。散々それに悩まされて、ずたずたにされてきたのに。たまたま奥まったガラス張りの部屋を見付けて、今は独りで居られるからいいようなものの、ここを出たら私はどうなるのだろう。誰かの声を聞いた途端、何メートルも飛び退いてぶっ倒れるだろう。それでこれから家まで辿り着けるだろうか。

人の声は、何処を向いているか。独り言でも、それは自らに向けてではなく、二人きりでもその相手に向けてではなく、大勢の前でも決してその大勢に向けてではない。何処かその辺に、ゴミのように吐き出されているだけだ。直ぐに跡形もなくなるからいいようなものの、そうでなければ、今頃、地上は人の声のゴミで覆い尽くされている。いやそれをいい事に、図に乗って、好きなだけ見えないゴミをまき散らしている奴らがいる。滑らかな舌に酔って、すっかり

いい気になってる。それとも、そうしてゴミを吐くのは排泄と同じで、本人にもどうにもならないのだろうか。しかしどうやったらそういう、人前で堂々と排泄行為をするような、哀れな人間が出来上がるのだろうか。

　ただ奴らが哀れなのは構わないが、それを聞かされる方は哀れでは済まない。もう二度と、人の声は聞きたくない。いや、どんな耳栓をしても、人が口をぱくぱくさせて、誰かに話しかける姿からして駄目だ。つまり、ただ声ではない。人が声を出す事が耐えられないのだ。何とそれは、醜い心根がそうさせるのだろう。

　そうせずにいられないのは、全くただ相手を、やっつけたいからだ。そうして自分を有利に導いて、さも相手を持ち上げるように見せ掛けて、自分一人が生き延びたいだけなのだ。声は、他人を脅し、貶め、従わせるための道具だ。独り言にしても、たまたま目の前に居ないだけの誰かに向けての脅しであって、そいつは独りで、そいつの知り合いを順々に殺しているのだ。必ず声を出す方が、相手を打ち負かす。愛を囁く振りをする奴らにしても、そうだ。そうして相手を服従させ、勝ち残って、それで何が手に入るのか。ただ相手より生き残る力を余計に稼いで、溜め込むだけだ。そんなものに埋もれて、そいつもまた、何時か余計なものになるだけだ。

　では祈りはどうか。祈りだけは違うのか。

祈りは外への攻撃ではなく、その者の心に浮かぶ神の姿を、声でなぞっているようではないか。それならその声は、神の姿を映すスクリーンのようなもので、そこに聞き取れるのはもう、人の声ではなくて、神の姿だろう。しかし人は、本当にそんな風に祈る事が出来るだろうか。所詮それは独り言の延長で、自分の心を、思い描いた通りに生き延びさせたいだけではないか。むしろ祈りこそ、人の声を駄目にしたのかも知れない。声に備わる醜い効用を、人は祈りから学んだに違いない。

まだ祈りを知らなかった頃のことを考えてみればいい。声は全て、目の前の相手に直に呼び掛けるためにしかなかった。そうしてその声は、自分を殺し、相手を生かすしかなかったのだ。声を出せば、それだけ自分を危険に晒す事になるし、それを聞いた相手に危険を知らせる事になるからだ。声を出せば、嫌でもそうなる。逆に相手を殺したいなら、そいつに声を出させるのだ。そいつに石でもぶつけて叫び声を上げさせ、危険をそちらに振り向けておいて、自分は黙って逃げるだけだ。

それが祈りを覚えると、声に人を打ち負かす力が宿り、声によって自らの危険を退けられるのを知って、声は専ら、自分だけ生き残ろうとする心の声となって、凶器のように周りへ繰り出されるだけになったのだ。

では私も祈るしかないようだ。「神様、どうか二度と人の声を聞かなくて済

みますように。」

いや、祈りなど何の役にも立たない。道で誰かが声を上げそうになったら、知らない奴でも、こっちから挨拶してやろう。機先を制するのだ。そうしてそいつを服従させてやろう。しかし、そんな気になれるのは、やはり私が祈ったからだ。しかし、私は何処に向かって歩いているのか。もう、祈りの効き目など、疾っくに切れているのではないか。そこに居るのは誰なんだろう。

＊　＊　＊　＊　＊

私は小さい頃から歌が好きで、ずっと歌ってきて、巧い。だから歌ってる。でも今は歌わない。歌う時間と場所が決められていて、歌わない時間をどう埋めようか、近頃困っている。で、結局ここに来て座ってる。

女が私の直ぐ前を、私の顔を覗き込むようにして通り過ぎた。ここは全くがらんとした、広すぎるぐらい広い通路だ。それをわざわざ私の側に寄ってきたのは、私を誰かと勘違いしたのか。女は引き返してきた。ああ見覚えがある。一月くらい前、私が歌いに行った先にいて、何か裏方をやっていた。あの時は男のように見えたけど、女だったんだ。知らん顔しよう。

私の無反応を見て、他人の空似だと思ったのだろう。階段の方に行ってしまった。しかし階段の先には何もないはずだ。だから誰もそんな方へは行かない。ここから見るだけでも寒気を覚えるような寂しい場所だ。私は、気になって立

ち上がる。いや気になったというより、何となくそこへ行ってみたくなった。一人でも人がいるなら、後ろから付いていって、その何もない所を一度見てみたくなった。自分一人なら行く気は起きない。

何もないとはどういう事か。ただ何もないだけなら、その何もない場所がどっしりとそこにある。何時でもそこは、何か物を置くための役に立つ。でも、何もないというのはそういう事じゃない。私にとってある筈のもの、それがなくてはどうにもならないものがなくて、それで初めて何もないという事になる。

私になくてはならないものとは何だろう。もちろん歌だ。歌って有名になれるって信じることだ。ぼんやりとでも今はまだ信じられる。

すると、私の足は止まった。それより進めなくなった。女はと見ると、重そうな足取りながら、決して止まらず前へ進んで行けるようだ。彼女は一体、どれ程のものをなくしたのだろう。多分、たった一人の、心底好きになれた人に裏切られたに違いない。私が何時も歌う歌だ。「…きっと信じていた人なのに、私を置いて行ってしまった。」

それなら私は、ここでそれを歌って彼女を慰めようか。他に聞く者はない。ここが歌う場所でなくても、誰にも咎められない。しかし声が出ない。もし私の歌が彼女に聞こえたら、ますます彼女を、何もない所に追いやってしまいそうな気がするから。

歌ったところで、歌は届かない。ここで通用するのは、ほんの少しでもますます何もない所へ、自分の足で進んで行ける事だけのようだ。しかし、幾ら遠ざかっても、彼女は何時か戻ってくるだろう。これも私のレパートリーだ。「…辛くなれるだけ辛くなったら、辛い昨日は忘れてしまえる」

しかし、彼女の後ろ姿はそんな風には見えない。辛いなら、それよりもっと辛くなって、その辛さに慣れたら、もっと辛くなるだけのようだ。きっとそれが本当なんだ。だけどそんなの歌っても誰も聞こうとしないだろう。

彼女の叫ぶのが聞こえる。本当にここには何もないんだ。だから彼女はただ叫ぶ事が出来るし、それは真っ直ぐ私の耳に突き刺さってくる。いや、歌をやってれば、声がどの辺まで届くかくらい分かる。幾ら彼女が大声で喚いても、ここまでは決して届かないはずだ。それなら空耳なんだ。きっと私は、叫びを聞いたのではなくて、見たんだ。この何もない隅から隅までが、彼女の叫び声のようだ。それは、私をもっと先へ引っ張り込んで、何処かへ連れ去ろうとするようでもある。しかし、私には歌があって、私の歌を楽しみにしてる人がいる。だからもうここから一歩も先へ進めないし、どんな声も出せない。

歌う時間と場所が決められている訳が分かった。歌は歌で慰められる人しか慰められない。

彼女はぐるりと一回りして、やっぱり戻って来る。あと少しで私の声も届き

そうだ。彼女がそこまで来たら、私は声が出せるだろうか。そしたら、歌ってあげよう。しかし彼女は、またゆっくり遠ざかってゆく。

たった一人の人がいなくなったのなら、この世界もまた、その人がいなくなったと同じように、全く何もない、空っぽでなければ耐えられないに違いない。しかしその人は死んだわけではない。ただ彼女の前に姿を見せないのは、他の女の所に居て、その心は満たされているのだ。残念ながらそれだけは、幾ら彼女が空っぽの世界に身を置こうとも、消せはしない。いや、他に何もない空っぽなら、ただその男の行動だけがある訳だ。今更なぜそんなひどい所に、自ら進んで身を置こうとするのか。そうまでして、その人にまだ望みを掛けるのか。

多分そうだ。全く望みがないなら、彼女は前に進んだり出来ないだろう。ところでこれなら歌になるだろうか。だって彼女は、一応まだ望みを失っていないんだから。（二〇〇一年二月一日）

＊　　＊　　＊

田舎

日が暮れかけていた。私達は同じ田舎の百人に近い集団だ。それが打ち揃っ

て、道を同じ方へ歩いてゆくのだから、皆の気分は大いに弾む。農場の出稼ぎの仕事が終わって、私達は皆歩いて、これから田舎まで長い道のりを帰ってゆくのだ。

道は真っ直ぐ、地平線まで続き、その直ぐ上に、消えかかりそうな垂直の虹が出ていた。誰の目にも入る。

私達は口々にその虹を誉めた。誰かが誉めると、次の者はもっとそれを誉めた。誉め言葉は物凄い事になって、私達は大いにそれを笑いあった。独りでいたなら、見過ごしていたその小さな虹は、私達集団の中では、まるでもうこの世のものではなく美しいのだった。

或る何人かが、もう一つ別の所に虹が出ていて、そちらの方がもっと凄いと騒ぎ立てた。集団は一瞬、ぐらりとそちらへ傾いた。彼らだけが、高く空を仰ぎ見て、繰り返し繰り返しそれを、思いっきり大声で誉めちぎるのだった。

別の何人かが、私達の行く濡れて輝く道の表面に、その虹が綺麗に映っていると言い出して、それを誉め始めた。

更に誰かが、右手に見える貯水池の直ぐ上に、大きな虹が架かっていると言い出して、その側のそう思った何人かが、先ず初めに集団から離れた。彼らは道のないぬかるみを進んでいった。後をまた何人かが続くようだった。

すると、もう、空を仰いでいた者達は、宙に浮いていて、その高い虹へと続く、

空気の中の上り坂を歩んでいた。

また、濡れた道に虹を見る者達は、その映る虹を一々確かめながら進むので、自ずと遅れてゆくのだった。

初めの虹だけを見ている、主に先頭にいた者達だけが、変わらない足取りで、ずっと同じ一本の道を進んだ。ただ誰ももう、虹についてしゃべらなかった。

貯水池に架かる虹は、近付くほど分厚く広く、まるで重すぎて無様に空から落ちて、貯水池にのし掛かるようだ。それを見て、彼らは皆押し黙ったが、それを受け入れ、どうなるか分からないまま進むしかなかった。そうして遂に、その虹をよじ登っていた。しかしその人数は妙に少ない。また一人消えた。その虹の上から、池へと落ちているのだ。

池の中で彼らは、素っ裸で息をぶくぶく吐きながら、水族館の魚のように、うろうろと泳ぎ回る。仰向けになって見上げると、水面は、全面虹で覆われている。虹は七色どころか、その十倍も二十倍も色を持っているのが、手に取るように分かる。彼らはそれぞれ、その地上では見た事のなかった色の内の、一番気に入った色の下に行って、全身をその色に染めた。

さて空を昇って行った者達だが、途中で虹を見失う者が後を絶たない。彼らはバランスを崩し、空気の上り坂から足を踏み外し、地面に叩き付けられ、ぬかるむ地中にすっぽり埋まった。

それでも残った何人かには、虹はちゃんと見えているらしかった。その連中の顔を見ると、皆大きな目で、その目と目の間が広く、耳の直ぐ側に目が付いていて、耳もまたかなり後ろの方に生えている。地上では彼らは、集団の一番後ろを、おどおどしながら歩いていた連中だ。いや、今もその態度は余り変わらない。俯いて用心深そうに上目遣いで、一歩一歩を、そっと前に差し出して進んでゆく。そうして遂に彼らは、彼らが目指した虹にしがみついた。

すると直ぐ、道に映る虹を見ていた者達が異変に気付く。上で虹にしがみつく者達の影は、地上でその何十倍もの大きさになって、虹を消し去り、もう、虹を見ているのか、ただの濡れて光る道を見ているのか、定かでなくなった。彼らは各々道を逸れ、散り散りになった。それでも皆何処かにうずくまって、濡れた黒い小石か何かに映る虹を、それぞれに見て取ったようだった。

地中深くめり込んだ者達は、逆さまのまま、やっと目を開けた。泥が目に入ってきたが、そこには地下の闇どころか、物凄い虹が迫ってくるのだった。そのままその虹を見ていると、一緒に地面に埋まった者達が、やはり同じ虹を見ていて、しかもその居場所までが、はっきりと分かり合えるのだった。そして目の玉をグリグリ動かして、その虹の見え方を変えては、互いに呼び掛け合い、その美しさを伝え合えるのだった。

そうして皆、彼らの田舎に帰っていった。

ただ真っ直ぐに進み続けた者達だけが、地平線の上の虹を失って途方に暮れていた。彼らは暫く道を引き返した。虹はなくても、彼らの田舎には辿り着けた。

いやそんな筈はない。その百人に近い彼ら皆の田舎は、地平線の向こうにあって、家族が帰りを待っているに違いない。(二〇〇一年二月三日)

*　　*　　*

四人家族

朝、ホームに列車が入ってくる。いっぱいの乗客はどう見ても泥の塊だ。だけど何食わぬ顔で乗るしかない。幾つか駅を過ぎて、乗り換えるため、私は泥だらけで列車を降りる。

泥を周りに振りまいて、散々迷惑がられながら別のホームに向かう。しかし他の連中と違って、どうして私だけが泥の撥ねを飛び散らかすのか。それは、他の連中は初めから泥で出来ているが、私だけはつるつるの紙で出来ていて、なすり付けられた泥を弾いてしまうからだ。私は多分、一人のモデルが同じ笑顔で何着も着せ替えられて写っている、紳士服の広告チラシに違いない。

列車が入ってくる。今度は乗客は、どいつもウンコの塊だ。ドアが開くと、私はその悪臭を風圧のように感じ、吹き飛ばされそうだ。とても乗れるもんじゃない。私の足は知らず反対方向の列車に向かい、もうそこに腰を下ろしている。反対方向はガラガラだ。ただなかなか動き出さない。ウンコの匂いが足の方から迫ってくる。それでも、ドアが閉まって走り出せば、快調に進む。

トンネルに入る。こんな都会にトンネルがあるとは。トンネルの中は電気が通じないので真っ暗だ。列車のエンジン音も消えた。ただ車輪とレールの隙間がぶつかる規則正しい音だけがする。静かすぎるせいで、私は変な匂いを嗅ぎ付けてしまった。闇の中で身動きも取れず、どんどん気分が悪くなる。トンネルを抜けた。するとまばらな乗客は、どいつもゲロで出来ている。酸っぱい匂いが耐えられない。天井に穴が開いているのを見付け、私はそこから屋根に上がって、猛スピードの列車から飛び降りた。

私は、土の匂いのする硬い斜面を何回転かして直ぐに立ち上がり、そのまま脇目も振らず、ドブ川の脇の草むらを全力で駆けた。灰色の小さな虫どもが、虚ろな羽音を立てて一斉にわき上がる。

私は一軒家に上がり込んだ。一家四人がちゃぶ台を囲んで食事中だった。四人とも箸で目刺しの身を突ついている。何処か芝居がかっていないだろうか。そう私が思ったのを察したのか、黙ったまま不機嫌そうに、四人は順に独りず

つ、立ってそこを出ていった。私だけが残される。外はもう真っ暗だった。
　そう言えば、同じ四人家族を私はトンネルの中で見た。人の体には電気が流れている。四人はそれを灯りに変えられるのだ。そこだけが明るく、四人は前屈みに向かい合って、じっと動かなかった。
　ちゃぶ台も何時か片付けられ、部屋の中は一本の蛍光灯に照らされる他何もない。私の座っている周りだけが、泥で汚れて金色に光っている。私の頭が少し動くだけで、泥の撥ねがドサドサと音を立てて、辺りに飛び散ってゆく。私がここに居ても、部屋を汚すだけだ。
　しかし、頭を少し動かすだけで、泥がどっさり飛び散るのだ。立ち上がりでもしたら、その何倍もの泥が出るだろう。歩き出そうものなら、この部屋はすっかり泥で埋まってしまうかも知れない。私は動くに動けない。しかし私は紙なのでゆらゆら揺れる。泥の撥ねが収まることはない。こうして居ても、ここは何時か泥で埋まるのだ。やはり立って歩き出すべきだ。
　そうすると、家は根こそぎ傾き、泥の暴発で粉々に砕けた。側で四人が、立ち尽くしたままそれを見ていた。私はとんでもないことをしてしまった。大人しくウンコ列車に乗って、ウンコにでもなるべきだったのだ。
　私は泥流となってどぶ川を溢れ、草むらを埋めた。そんな私を止めるのは、せめて一輪の花であって欲しい。春が巡って、その種が一斉に芽を吹いてほし

い。私は花々に養分を運ぶためにここまで流れてきたのだ。そんな夢を見るからいけない。地表は乾き、ひび割れで覆われた。

私は列車に揺られていた。他の乗客は干涸らびて、もう余りゲロの匂いはしない。窓が全て開け放たれて、車内を風が吹き抜けている。車掌が花を替えに来た。見ると窓枠に小さな花瓶が置かれ、一輪の白い花が力無くお辞儀をしている。車掌の手にするビニール袋の中は、蒸気で曇って、しおれた小さな花が折り重なっている。

「車掌さん、ここはトイレは付いてないんですか。」

車掌は、トイレという言葉を聞くだけで耳が穢れるというような顔をして行ってしまった。

四人家族は、額をすり合わせるようにして、何やら相談事をしていたようだったが、今は四人とも背筋をピンと伸ばし、他の乗客と同じように干涸らびている。彼らもゲロだった。この列車に終点はあるのか。窓の外は真っ白で何も分からない。(二〇〇一年二月五日)

＊　＊　＊

大喜び

エレベーターの中で、誰かに足を引っ張られた。私のせいだ。立ったまま居眠りしてしまったのだから。私はエレベーターから引き摺り下ろされ、レンズのような平べったい隙間の中に、蛙のような恰好で閉じ込められた。レンズの前には大きな紙が拡げられ、そこに大きな文字が書かれてある。一言一句までではなくても、私はそこに書かれてあることを大筋を憶え込んで、エレベーターを降りた先で待っている人物に伝えることになっていたのだった。

他にすることもなく、私はそれを長い時間を掛けて読み直すしかない。字が大きすぎて、文として繋げてゆくのは大変なのだ。

そこには何とひどいことが書かれてあるのだろう。それを聞かされた者が傷付くのではない。私自身がひどく傷付けられているのだ。

文面の中で私は、私の全てを根こそぎ奪い取られていた。そしてその奪い取られていった私が、その後に残されたただの空っぽに向かって、明るく笑いかけてくるのだった。私であった空っぽを見付け、思いがけない幸運に出会ったかのように、その根こそぎにされた姿を、その空っぽに見られることを喜んでいるのだった。

なぜその私は、そのようなことを喜んでしまえるのだろうか。

そして、恐ろしく惨めな筈の根こそぎにされた私は、いそいそと、私を根こ

そぎにした者の後を、それまで見たこともないような軽い足取りで、ぴょんぴょんと追い掛けてゆく。私であった空っぽは、とっさにそれに先回りしたつもりが、直にそれを見失った。

或いは、この日が来るのは分かっていたかも知れなかった。しかし何とも早すぎるし、余りにあっけないではないか。

私であった空っぽは、私を根こそぎにした者のことを考えてみる。何が私を根こそぎにしたか。あれやこれやであるようで、詰まるところ、それは私自身かも知れない。私自身、私がいずれ根こそぎにされるのに気付いていて、ただそれが少しでも遅れるのを願いながら、何もせずにいたのではないか。

それも仕方ない。その時は私は、そのままの私が多分好きだったし、私の好きなようにしたかった。他に何が出来ただろう。その日に備えて、私は私を縛り付けておけば良かったのか。

いや、全くそうだ。何が何でも、私はそうすべきだった。まだ遅くない。私はまだ死んだ訳でも何でもない。私であった空っぽなりに、とにかく先ず、私に追いつくのだ。しかしただ前のめりになるだけだった。

それはそうだろう。空っぽに足が付いている訳もない。それに、前のめりになるだけ、ひどく胸が苦しい。空っぽに胸などある筈もないのに。ただ空っぽは空っぽなりに、ずっと前のめりでいれば、少しずつずいざってゆけるようだ。

そしてやはり、かつて私であっただけに、私の居場所が正確に分かる。そうして遂に、私であった空っぽは、その居場所が見透かせる所まで辿り着いた。

　しかし私は居なかった。代わりに、いや代わりかどうか分からないが、背を向けた留守番の女が一人居た。しかしその女は、居ない私の留守番ではなく、そこに箱詰めにされて積み上げられた物の番をしているだけのようだった。私に係わるものは何一つ見当たらない。

　実は私も、前からそれの留守番係りで、たまたま今日は非番らしい。では私は、今どこで何をしているのか。何処かで羽目を外しているのか、私を根こそぎにした者も一緒なのか。私であった空っぽなりに、想像をぐるぐる巡らすしかない。

　そうして結局思い至るのが、また、耐え難くひどいことだった。

　私は、私を根こそぎにした者の前で、裏返しにさせられ、身を捩らされ、宙に放り投げられていた。しかも私はそれを自ら望み、大喜びして、けたたましい歓声をあげているのだった。

　私であった空っぽは、一刻も早く、そんな想像を打ち切りたいが、空っぽだけにどうにも出来ず、その私の姿は、空っぽの中を暴れ回って、やみそうにない。せめて想像を付け加えられるとしたら、その私が、私でなくなっていることだけだ。いや、それが果たしてましなことだろうか。逆だ。根こそぎにされ

たばかりか、私でさえなくなったら、もう何をどうすることも出来ないではないか。
しかしその前に、空っぽが空っぽであるのに耐えきれず、空っぽでなくなろうと身悶えするのだった。しかし空っぽだけに、そうしようとする程、それはますます大きな空っぽになって、喜びに我を忘れる私の姿を膨れ上がらせる。
（二〇〇一年二月七日）

＊　　＊　　＊

犬

私の仕事は、人々の心の中に井戸を掘ってあげる事です。そこから、その人の心の真実である井戸水を汲み上げて、それでその人が日々の心の渇きを癒し、幸せになれるなら、それこそ私の幸せです。
もちろんこれは、ものの喩えだ。で、ものの喩えなど持ち出す奴は、どいつもペテン師に決まってる。だから、そんな事を言ってるお前がペテン師だって事は、お前が一番よく知ってる。
だけど世の中、それが分からん馬鹿がわんさと居て、ころころ引っ掛かるん

だからやめられない。「それこそ私の幸せです」か。そこんとこだけは、間違ってないな。いや、お前のペテンを隅から隅まで暴いて、それを正確に説明出来る奴なんて、実は何処にでも居る。だけどそいつらが言い募ってくれる程、ペテンの効き目は増すばかりって事だ。お前にとって、奴らは全く協力者そのもので、感謝さえしてるんだろ。

　だけど、いい事なんて長く続かない。辺りはどんどん寒くなって、食い物もなくなり、お客だった奴らは、みんな腹を空かして凍え死んだ。

　お前が井戸を掘り過ぎたせいだろう。心の真実が聞いて呆れる。その心の真実である井戸水なんて、所詮その場限りの慰めであって、その時だけ、さも温かいような気持ちになれても、むしろそれは地表全体を少しずつ冷やしていたんだ。まあ、そういうのが分からん奴の事を馬鹿って言うんだがな。

　だけどそれにしても、お前だけどうしてそう、ピンピンしてるんだ。

　少しも自分の井戸を掘らなかったからさ。俺の大地の表面は、今もまだ、生まれたばかりのようにツルツルさ。他の奴らは、井戸を掘り過ぎて、地下水を汲み上げ過ぎて、辺り一面、陽の当たらない陥没だらけのびしょ濡れだ。ちょっとの冷たい風でも、もう動けなくなって、ひとたまりもない。

　本当は最初から俺を見習って、何が起きても、ただ表面の汚れを洗い流すだけで済むような、硬い大地に磨きを掛けておくべきだったんだ。常日頃から、

そう心掛けなきゃ。そこにわざわざ穴を開けるなんて、およそ、まともじゃないぜ。
そうは言っても大抵の人間は、自分の足の下を掘って、そこから何かを取り出そうとせずにはいられないんじゃないか。ただ地面がツルツルなだけでは、そのまま自分もツルツルにすり減って、消えてしまうように思えて、耐えられなくなるのが普通だ。
そうだろう。今までお前は、他人の井戸ばかり掘っていられたから、ツルツルにすり減りそうな自分をほったらかしにしておけたんだ。だけどもうそんな訳にはいかないぞ。これからどうする。
なぁに、スケート靴は用意してたさ。他の奴らはもうすっかり、消えていなくなった。誰にも邪魔されず、思う存分この上で回転技を決めて独りで楽しむさ。この日が来るのを待ってたようなもんだ。これこそ本当の幸せってやつかな。いや、そうじゃないな。まあやっと、幸せがどうのって、ろくでもない事を言わなくて済むようになったって事だ。
ああ幸せ。おっとまた口が滑った。幸せが口癖になっちゃったな。まあ、じきに治るでしょう。ツルツルだけに口も滑る、なんて、つまんなかったかな。どうせ笑うのは俺独りなんだから、別に構わんだろ。
そうだな。確かにお前は、お前独りだ。お前がそう思ってる限り、これほど

確かなことはない。だけどお前みたいな奴は、実は何処にでも居るんだ。ただ、お前が言う回転技を何処でどう決めても、絶対ぶつからないようになってるだけだ。

　ほう、それがどうした？

　別にどうもしないさ、ただそれだけの事だ。

　目障りな奴だ、何でお前がここにいるんだ。ここは俺独りだけだぞ。二度と姿を見せるんじゃない。おい、こいつをおっぽり出せ。

　奴には忠実な犬が一匹いるようだ。早速そいつがすっ飛んできた。すらりとして、手足も顔も長く、姿も人間そっくりだ。目つきは犬だ。すらすらと言葉を話す。

「ここの人間でもないのに、そこに入らないように。自分のことだけ済ませたらとっとと帰るように。それから二度とここに来ないように。」（二〇〇一年二月九日）

*　　*　　*

結婚

その汚れた螺旋階段を上りきると、広間の中央の大きな丸い舞台の、そのまま中央の丸い穴に出ると聞かされている。まだ行ったことはない。その螺旋階段に、一日の内、或る時間だけ、大勢の連中が腰を下ろして、煙草をふかす。煙は綺麗に、遥か上に見上げられる丸い穴へと吸い上げられてゆく。

私は急いで螺旋階段を駆け下りていて、誰かが脱ぎ忘れた、バナナの皮のような、よれよれの湿った靴を踏んでよろけた。私は高いヒールの靴を履いていたが、それが却ってよかった。速く駆け下りようにも、勢いは付けられないからだ。直ぐに体勢を立て直して階段を下まで降りると、四、五メートル先のソファーに、痩せた男が腰を下ろして静かに泣いていた。

それを見て私は、とっさに、その手前のドアを開けて中に入った。そこはカウンターで、いかつい筋肉質の女がコーヒーを入れている。私はその女に言われるまま、テーブルの灰皿の中を片付けて、濡れたタオルでテーブルを拭いていった。泣いていた痩せた男が、いつの間にか直ぐ横に来ていた。女の匂いが私の鼻をかすめた。男の服を着ているが、間近に顔を見ると、肌のきめから女だと分かった。

男装の痩せた女は、コーヒーを不味そうに啜っている男と、しなくてもいいような何か些細な交渉事を始めた。私はカウンターの奥にまわり、そこのドアから、転がるようにして隣の部屋に入った。汚い身なりの小柄な男達が十人ほ

ど、黙って食事をしている。いや、余りに身なりが汚いので、気の荒い男どものように見えたが、誰も口の周りに髭を剃った跡がなく、皆、女なのだった。

　少し奥まった所の壁に、仕事の予定表が張ってあり、痩せた女がその直ぐ前にいた。素早く私にすり寄ると、私に話しかけてきた。話しかけられてみて、やっと知った顔だと分かった。と言っても、よくすれ違うので知っているだけだった。痩せた女は私に、泣く訳を説明したいようだった。しかし私は、細長い荷物を何本か、直ぐに広間に届けるように言われていて、女の話など聴く暇はない。次のドアを開けた。そこは直ぐ螺旋階段で、荷物を小脇に抱え、階段を駆け上った。

　すっかり磨り減った顔に、下手な自画像を描き込んだ女が、階段の途中で荷物を受け取った。私は渋々戻るしかなかった。階段を降りきると、また痩せた女が、男そっくりに、ソファーに腰を下ろして泣いていた。その手前のドアから、汚いなりをした男がナイフを持って出てきて、私とすれ違い、女のような忍び足で階段を登っていった。私の届けた荷物の中の細長いものを切り裂くのが、彼の仕事に違いなかった。

　痩せた女が、何時の間にか私の直ぐ横に立って、誰かにそっと手を振っている。そちらを見ると、エレベータの前の金髪のなで肩の小さな女が、それに応えていた。同じように、胸の前に掌を拡げて、軽く振っている。いや、なで肩

ではあるが、そのぎらぎらした目つきは、幾ら穏やかそうな笑顔を作ろうと、若い男のものだった。

痩せた女は、悲しげではあったが、もう泣いていなかった。改めて見直すと、彼女だけ実に綺麗な身なりをしている。そして、その指も額も首筋も、皺一つなかった。だからと言って、決してもう若くはなさそうだった。女であれば、間違いなく歳相応に崩れてゆくが、幾つになっても綺麗な男というのは、たまにいる。それで彼女が、男に見えてしまうのかも知れない。

私はまた、何度か言い付けられるままに、螺旋階段を途中まで行ったり来たりした。痩せた女は何時の間にかいなくなっていた。

それからしばらく経って、汚いなりで働いている女達の一人から、痩せた女が大量に血を吐いたと聞かされた。

ただ少し話が逸れるが、それを私に知らせたのは、実は女ではなく、男のようだった。彼は小太りの体型をいい事に、髪を束ね、口紅を引いて、女達に混じっていたのだった。女達にそれとなく聞くと、男であるのは知られていて、昔、女を何人も泣かせたそうだ。

さて、痩せた女はそれで別に死んだ訳ではなく、却って少しだけ元気になって、何時も同じ所にしゃがみ込んで、地べたに色々に小石を並べ替えては、小銭を稼いでいた。そこは、通行人が一日中絶える事がなく、彼女は一切眠らな

かった。
しかしそんな事が何時まで続くだろう。小石を並べ替えるのも、次第に手詰まりになった。ゼロの日が何日も続いたりするのだった。
思いきって私は、稼ぎも、結婚したばかりの彼と連れ立って、その痩せた女を見に行く事にした。物陰から覗くと、その細い顔は前と少しも変わっていない。多分彼女は、歳を取ろうにも、歳の取り方を知らないのだ。
それに比べて私の彼は、まだまだ若いが、毎日ちゃんと少しずつ目に見えて歳を取ってゆく。老け込むのでなく、日に日にたくましく頼りがいが増す。私はすっかり安心して、彼の腕にしがみついた。彼は、何処かの店の看板に気を取られているようだ。そのごつごつした横顔が、また素敵に見えた。
それからまただいぶ経って、私はあの痩せた女がやっと死んだと知らされた。しかし或る日、私が彼と一緒に買い物をしていると、死んだ筈のその女が、相変わらず男の恰好で、軽い足取りで、買い物かごを抱えて歩いて来るではないか。
「あれ、死んだんじゃないの」
と、言ってしまってから、目の前で生きてる人間に向かって、そんな事を聞くのも変だと思った。
彼女の顔は相変わらず皺一つなく、体付きも、学生街でよく見掛けるガリガ

リの若者と同じままだった。彼女は、私の彼の顔をしばらく横目で見て、笑顔を作って、私に一言何か、聞き取れない挨拶をして、それからまた彼の姿をじっと見て、羽根でも生えているように、あっという間に去っていった。
しかし、二、三日後、その痩せた女は、私の毎日の行き帰りの道で、私に近付いてきて、あの日、螺旋階段の下のソファーに腰を下ろして、静かに泣いていた訳を、また説明しようとするのだった。（二〇〇一年二月十一日）

＊　　＊　　＊

島

楽師がリュートを奏でている。それは、南の小さな島で作られたが、金に換えられて、港町まで運ばれた。その音色は次第に評判を呼び、遂に王の耳まで届き、王がそれを所望したのだった。王宮の大広間には、王族とその膨大な数の親戚筋が居並ぶ。
しかしよく見ると、リュートの底に小さな穴が開いていて、そこを、彫りの深い顔付きの黒い仔犬が一匹、忙しそうに出入りを繰り返しているではないか。ただそれを見付けたのは、王の一番遠い親戚の、ボサボサ頭の全くぱっとしな

い男だけだった。他の者は皆、いかつい守衛達までもが、我こそは風雅を解するのだと、楽の音に聞き惚れて、うっとりとした表情を競い合っていた。
男は、誰にも気付かれずに、壁際をそっと這って行って、遂に楽師の足元まで辿り着いた。黒い仔犬を脇に退け、身を縮められるだけ縮めて、その穴から楽器に入り込んで行く。
「おやどうした、音が変だぞ。」
男は、役目を忘れていた守衛どもに、たちまち取り押さえられ、直ぐに、その場で殴り殺された。死体は、川縁のゴミ捨て場に投げ捨てられた。
雨季が来て、川の水嵩が増すと、死体は海に出て、ずっと沖まで運ばれ、魚の群に骨まで食われた。それを、漁師が一網打尽にして、その魚から、仄かに赤い脂が取られた。どんな楽器でもその脂を塗って奏でると、耳を切り取られそうな程の、澄んだ音がするのだった。
さて、リュートは穴を塞いで修繕されたが、元の響きは戻らず、やはり川縁に捨てられた。何処かの捨てられた仔犬が、そこに住み着いた。白い犬だった。リュートの穴に出入りしていた黒い仔犬は、誰の目にも留まらずに、何時の間にか王宮から姿を消していた。
私は、仕事の行き帰りに、ゴミの中で少しずつ朽ちてゆくそのリュートの脇を、必ず通る。初め、気まぐれに餌をやっていたが、その内に習慣になってし

まった。仔犬は少しずつ灰色になって、そのリュートの内側と同じにまで大きくなったところで、成長を止め、やがて年老いて死んだ。犬の死体は、リュートの中で少しずつ干涸らび、内臓は雨に洗い流され、リュートの内側に、その犬の革がぴったり張られたようになった。穴を塞いでいたものが、独りでに取れ、革も、ちょうどそこがお尻の穴で、そこだけ拡がって、また、リュートはそこに穴を開けた。

二番目の雨季が迫っていた。少し迷ったが、私は大枚をはたいて、赤い脂を一瓶買った。それで綺麗にリュートの汚れを取った。私は、別に音楽の素養はないが、それを抱えて鳴らすと、まだ少し臭いが、なかなかいい音がする。ふと目を上げると、何時の間にか、人が集まっていて、私はリュートの名人にされていた。それで人に言われるまま、あちこち巡る事になって、そんな事をしている内に、私は、えらい評判を取ってしまった。

何日か経った日の夜、私はリュートを盗まれた。盗んでゆく奴の顔を見た。知った奴だった。まあ別にどうって事ない。私はさっさと自分の仕事に戻った。

暫くして、評判の名人が、また、王宮でリュートを演奏するという。私は、日頃から仕事に励んでいたお陰で、一番後ろの壁際だったが、それに招かれた。見ると、リュートの名人はあの盗人で、リュートの底の小さな穴に、黒い仔犬が、すばしっこく出入りを繰り返している。

私は、這って近付いて、仔犬を脇に退けた。しかし、どうしてまた、そんなことをしてしまったんだろう。守衛達も二度目なら、私が穴に入ろうとする前に気付く。私は、寄ってたかって取り押さえられた。名人になっている盗人と目が合った。奴は、恐ろしくなったのか、リュートを投げ捨てて逃げた。私はその場で殴り殺され、川縁に捨てられた。

それから王が、自らリュートを拾い上げた。黒い仔犬にも気付いた。試しに弦を指で弾くと、名人と同じ、澄んだ音がする。黒い仔犬が穴を出入りする姿も、そこに居合わせた人達の目に可愛らしく映って、大いに喜ばれた。それは、王の宝となった。黒い仔犬は、何時まで経っても成長しない。

年が変わって、また雨季が来て、川の水嵩が増し、私の体は、海に流れていった。今年は早めに、漁師が、魚をみんな獲ってしまったので、私はただ沖へ沖へと流れて行くばかりだった。

そうして私の体は、長い時間掛かって、リュートのふるさとである南の島に辿り着いた。死んだ筈なのに、何を間違えたか、起き上がると、島民は、私を、ちょうど空席になっていた王に迎えた。

島は、青い樹と赤い樹で、びっしり覆われていた。青い樹には、青い楽師の実がなった。赤い樹には、赤いリュートの実がなった。それらを、島民達が総出で、一斉にもぐと、その島の至る所で、昼夜を問わず、リュートの演奏が行

われた。
　しかし直に実は腐る。島はその腐った臭いで息も出来ない。島民は、小舟で島を出て、水平線の直ぐ向こう側で、一ヶ月間、過ごすのが、毎年の習慣だった。ただ王だけは残らなければならないのだった。それが王の王たる所以だった。
　さて、島では、白と黒の二匹の犬が、腐った実を、静かに食っていた。二匹は、みるみる成長して、すっかり大人の骨格を身に付けた。
　私は、季節はずれの赤い実を見付けた。青い樹の方から登って、その実をもごうとしたが、島民達のようには巧くいかない。手が滑ってばかりで、その実が手に付かないのだ。そうしている内に、私は、私自身が、季節はずれの青い実になっているのに、気付いた。一度死んでいるのだから、その私の体が、木の実になっていたところで、今更、大して慌てる事もない。そうして私は、楽師になった。
　さて、そうして、腐った木の実でまだジトジトした下の地面を見下ろすと、白と黒の犬が交わっていた。そして、冷たい風が葉を落として、犬共の上に降り掛かる内、その体は、絡み合う人間の男と女の姿に変わって行くのだった。
　それは何時も、必ず、私の真下で行われた。
　木の実に瞼が付いている訳はない。私は、毎回、木の葉のフカフカベットの

上で行われる、その一部始終を見ていなければならなかった。更に冷たい強い風が吹いて、やっと私の体は、季節はずれの赤い実の側まで辿り着けた。早速私は、そのリュートを抱き抱えて、楽の音を奏でたが、私達はもう萎び掛けていて、萎びた音しか出なかった。それが、自分達の事で頭が一杯の、下の者達の耳に、届く筈もない。（二〇〇一年二月十三日）

＊　　＊　　＊

遠巻き

すり切れた蛇革をテカテカと光らせた、みすぼらしいなりの女を、腕まくりした数人の男達が、切迫した呻き声すら上げながら、力ずくで取り押さえていた。周りを、何処から湧いて出たのか、数十人もの女達が、体をぴったり寄せ合って取り囲み、怯えた表情で成り行きを見守っていた。
女がナイフで、自分の顔を傷付けようとしていたのだ。やっとの事で男達は、女から血の付いたナイフを取り上げた。女は左頬の傷口を隠しもせず、諦めたようにゆっくり立ち上がった。私は、直ぐ側でそれを見ていて、笑ってしまった。男達の荒い息遣いだけで、誰も口を利かないので、私のかん高い笑い声は

辺りに響き渡り、私は勝ち誇ったような気分だった。
　さて、私の目の前は、狭く長く薄汚れた階段だった。私は、そこを上り切った先の部屋に用があったのだ。そこは小さな事務所で、私はそこに、私の有り金が全部で幾らになるか、計算を頼んでおいたのだ。
　階段を上り始めると、階段は直ぐに終わって、廊下でも部屋でもない何もない所に私は立っていた。建物を間違えた。長い階段を、アルミ製のゆるんだ滑り止めをガチャガチャ言わせて上り、その先に、開けるとチンコロ小さな鈴の鳴る、ささくれた表面に白いペンキを塗りたくった木のドアがある筈だった。
　私は直ぐ引き返そうとしたが、物々しい額縁に嵌まった一枚の絵が目に留まった。見ると、その大きな正方形の絵には、画面いっぱいに角張った女の顔が描かれていて、その女の顔は傷だらけだった。古傷から新しい傷まで様々に走っていて、その顔が、長い間にわたって、傷付けられているのを物語っていた。そしてそれは、どう見ても私の顔にそっくりで、額縁の下の白い壁に「自画像」と、下手糞な字で書かれた紙が、テープで貼ってある。
　私は直ぐにそれを破り取った。随分ひどい事をされたもんだ、と思った。私は階段を降りて外に出たつもりだった。しかしそこは文房具屋の中だった。
　いらいらして、私は髪を掻き上げようとした。その瞬間、私の前に、天井まで背の届いた恐ろしく痩せた猫背の女が現われて、その棒のような細い腕を、

ひねるように中途半端に振り上げた。そうして、髪を掻き上げようとする私の手の指の間に、何かを挟み込んだようだった。
　行き成り数人の男達が、まるでそれまで息を潜めて隠れていたかのように、文房具の棚を飛び越えて、四方から私に襲い掛かってきた。私は骨が折れそうになるほど、泥で汚れた床に強く押さえ付けられ、私の手からナイフが取り上げられた。
　先程と全く同じ女達が、早速この立ち回りを遠巻きにしている。押さえられた女は、顔を床に擦り付けられ、その悔しそうな歪んだ顔から血が流れて、泥と混じり合っていた。私は無傷で、直ぐ側に立って、じっとそれを見下ろしていた。
　そして、男達全員に私の方を向かせ、首を上下左右にゆっくり振って、私の綺麗な顔をよく見せて、なぜ私を取り押さえたりするのか、私の顔を傷付けるとしたら、それはお前達だ、と彼らをなじった。
　それでも収まらず、私はスカートを捲って、それで下っ腹の前に袋を作り、棚に並べてあるカッターナイフを、ガチャガチャとそこに落とし込んでいった。そしてそれを、黙って取り囲んでいる女達に、優しく微笑みかけながら、一つずつ配っていった。
　女達は、おずおずとそれを受け取って、しばらくその刃先をじっと見詰め、

おもむろに、それを頬や額や唇に当てて、自分の顔を傷付けだした。しかしナイフはどれも錆び付いていて、ちゃんと傷付けるには、それなりの力を込めなければならないようだ。呻き声だか、唸り声だか、叫び声だか、いろんな変な声があちこちから起こった。

　私はまた笑ってしまった。しか今度は、私が笑うと、女達もそれに負けず、痛みに恐れおののく声をしぼり出すのだった。私の笑い声は、それらの声に掻き消されてしまう。私は本気を出して、脳天を突き破るような高い鋭い声で、あらん限りの力を込めて笑ってやった。しかしまるで駄目だ。私自らにさえ、私の声は、がさがさと何処かの端っこで、物が擦れ合う音のようにしか聞こえない。

　私は腹を立て、女達の手から順々にナイフを取り上げて回った。しかし女達はそれを力一杯に握り締めていたので、取り上げるために、私は先ず、女達の顔にナイフを押し付けて、一人では出来なかった深い傷を負わせ、その痛みに怯んだ隙に、無理矢理彼女達の指を開いて、それを奪っていった。

　ただ、私が取り上げたのは、ナイフだけではなかった。私は、女達の顔から、女達が負った傷をも取り上げていたのだった。そしてその取り上げた傷は、全て私の顔に張り付けられていった。全ての女達からナイフを取り上げた時、私の顔は、かなり深手の数十の傷で、目も鼻も口も分からなくなっていたに違い

ない。

それでも私は、まだ普通に目が見えていて、ナイフを取り上げられた女達は、負け犬のような悲しそうな目をして、一人一人バラバラに去っていった。もちろん顔には、傷一つなかった。

私は、床に散らばったナイフを一つ一つ拾い上げ、その泥の着いたままの刃先を自らの顔のあちこちに当てては、どの傷がどのナイフで付けられたか、調べていった。私が女達の顔にナイフを押し付けて出来た傷ばかりなので、私は案外たやすく傷とナイフを一致させていった。

そして、その傷付けたナイフで、私はその傷口をもう一度深く傷付けた。するとと逆に、その傷口は塞がるのだった。時間の掛かる作業だったが、私は根気よく続けた。

そしてやっと、全ての傷を塞いで鏡を見ると、私の顔はすっかり綺麗だった。しかしその綺麗な顔を鏡に確かめた瞬間、二度まで傷付けられた深手の、その数十のたまらない痛みが、私の顔に一斉に襲い掛かってきた。その痛みは、何時まで経っても決して引かず、私はそこで、ずっと転げ回っていなければならなかった。（二〇〇二年二月十五日）

*

*

*

手品

世の中には本当にのんきな人がいる。あなたなんか、そんなのんきな人の典型だ。
そのあなたが、この前、生まれて初めて、病気らしい病気をやった。長ったらしい病名なんて始めから憶えるつもりはない。病気を治すのは医者であって、あなたは医者の仕事に興味はない。
私も含めた、あなたの友人達による全快祝いは、心和むとてもよい会だった。こんな幸せは、誰でも手に入るものではない。あなたはのんきだから、みんなに慕われるのだ。よい家族と、沢山の友人と、遣り甲斐のある楽しい仕事に恵まれて、今は何一つ心悩ますものもない。あなたが、ほんの一握りの、選ばれた人間であるのは間違いない。それは、あなたの一点の曇りもない、明るい表情から、誰の目にも明らかだ。
さて、そんなあなたが、ある朝、目を覚まして、顔を洗って、爽やかに晴れ渡った、キラキラした朝の景色を、窓から眺めながら、歯を磨いていると、何だか知らないが、急に苦しくなった。体から来るものでないのだけは、はっきり分かる。あなたは、苦しくて悲しくて切ないのだった。何が、と問えば、そ

うして歯を磨いている事が、という答えしか返ってこない。とにかく、あなたは、決してそれまでのように、何の悩みもなく、歯を磨いていてはいけないと、思い知るのだった。

苦しいのは、あなたが、全く幸せだからだ。そのような幸せなあなたではない、もっと別の何ものかになるために、あなたはあなたであるべきではないか。それなのにあなたは、そちらに少しも目を向けず、全く見当違いのあなたに向かって、あなた自らを用いてきた。今日まであなたのしてきた事は、何だったのか。

あなたはその場に蹲り、苦しくて涙を流す。口の中の歯磨き粉も、みんな飲み込んでしまった。これ程苦しい思いをしてまで、どうして生きていなければならないのか。こんな、すっかり人生を間違えてしまった者など、生きていても仕方がないではないか。

あなたは、もっと早くあなたを導いたに違いない、掛け替えのないものに、きっともう何度も、出会っていたのだ。しかし、それが目に入らなかったか、入っても、ただ何か少し変な感じがしただけで、それを侮るようにしてきたのだ。生活の中で、そうする癖が付いてしまっていたようだ。目を背けてさえいれば、幸せをじっくり噛みしめ、幸せである事への感謝の気持ちも、日々忘れずにいられたので、そういう自分に、すっかり押し流されていたのだ。

それであなたは、それまで手に取った事もない、心の苦しみに関する本を、手当たり次第、読み漁った。心に沁み通る多くの言葉が、あなたの心を慰める。書かれた言葉に、これ程人を慰め、救う力があるのに驚き、また感謝もした。あなたは何とか立ち直れそうだった。すると、その何とか立ち直れそうになっているのが、途轍もなく苦しいのだった。

あなたは堪らず、伝手を頼って、有名な精神科医に診てもらう。さすが有名な先生だけはある。先生はあなたの過去を解き明かし、あなた独りでは決して知り得なかった、あなたの苦しみの元凶を突き止めた。あなたの苦しみは取り除かれた。あなたは晴れ晴れとした気分で、先生に感謝の言葉を述べて、病院を後にした。すると、その晴れ晴れした気分でいるのが、途轍もなく苦しいのだった。

どうしていいか、全く分からなくなった。友人に相談しても、彼らが接するのは、何時も幸せなあなたでしかない。幾ら深刻な表情を作って、苦しみを伝えようとしても、全快祝いの時と同じように、彼らはあなたに会って話が出来て、幸せを分けて貰ったような気分で、嬉しそうに帰ってゆくのだった。

どうやってそこに辿り着いたのか、あなたはいつの間にか、神様にお祈りをしていた。あなたは、そこで、あなたと全く同じ苦しみを抱えた人達が、沢山いるのに驚いた。こんな悩みは、独りだけのものと思っていたのに、仲間がい

るだけで大いに慰められた。そして、坊さんの話は、毎回心に沁み、その度に心洗われ、涙を流して神様に感謝するのだった。しかしそうして、遥か高みを見上げて、神様の御恵みに心震わせている時、そうしていられる事が、突然、あなたに、途轍もない苦しみに変わってしまうのだった。

　あなたはもう、死ぬしかなかった。自殺した者は、地獄に堕ちると言うが、実際やってみなければ分からない。あなたは、自分が天国に行けるように、ひたすら念じ、必ず天国に行けるように思えた瞬間、身を投げた。甲斐あって、あなたは死んで天国にいた。

　そこはもう、地上のどんな苦しみも届かない。ひたすら清らかな、心の底からの深い喜びの尽きない所だった。死ぬのがこんなに素晴らしい事なら、もっと早く死ねばよかった。遂にあなたは、あなたの心の奥の奥の奥深くに巣くう苦しみを、取り除いた。

　そうしてあなたは、あなたが、もう殆どあなたでなくなって、何処か更に高い所に、引き上げられてゆくのを感じた。無上の喜びだけが、内にも外にも満ち満ちた。しかし、そうした喜びに包まれているのが、あなたに言い知れぬ苦しみを齎すのだった。

　どうすればいいのか。もう死ぬ事も、何処へ行く事も出来ないなら、ここは、あなたを苦しめるだけの牢獄であり、地獄でさえある。天国の喜びに、苦しみ

続けるしかない地獄。かつて地上の人間によって、このような天国の地獄が、知られた事があったろうか。少なくとも、あなたの知り得た、天国と地獄の知識の中にはなかった。そうしてあなたは、ずっとずっと苦しみ続けるのだった。

夢だった。あなたは目を覚ましていた。ああ、何というひどい夢だったろう。暫くして、やっと落ち着いて起きあがり、恐る恐る歯を磨く。特に何が苦しいという事はない。しかし、特に何が苦しいという事がないのが、あなたを、途轍もなくひどく苦しめ出す。

いや、これは全て何かのまやかしだ。苦しみなんて、きっと、手品のようなもので、そのタネが分からないだけなのだ。そんな風に思い付いただけで、綺麗に謎が解けたような気もする。しかし、まやかしだとすると、そんなまやかしに躓いて、立ち上がる事も出来ずにいる訳だ。それが実に耐え難く、また身を焦がす程に、あなたを苦しめる。

つまり、あなたは本当にのんきな人のままで、私なんか全く羨ましい限りなのだ。

そのあなたが居なくなって、もう一月くらい経つだろうか。私宛に、絵はがきが届いた。馬鹿でかい字で、富士の樹海がどうとか書いてある。文字のインクが、水で濡れてぼやけてしまって、読めないのだ。

それはしかし、先程、木の葉に溜まった水滴が、雫となって、はがきに落ち

たものだ。周りには、誰も居なかった。あなたなんて、初めから何処にも存在しなかった。ただ、私独りだった。一体、私は、或いは、あなただった私は、何を苦しんだのか。それを知ろうと思っても、どういう訳か、その苦しみそのものが、頭に浮かんでこない。

　私は、苦しみから見離されて、何をどうしていいか、分からない。あなたとなって苦しめたなら、私はまだ、生き延びられただろうか。あなたさえ失った苦しみに、私は、耐えられるか。意識が薄れてゆくようだった。

　鳥の声で目が覚めた。今までで、最も深い眠りを眠った。隣であなたの体が、すっかり冷たくなっていた。私は立ち上がり、暫くぼんやり歩いていると、車の通る道に出た。

　高速バスに乗ってまた眠り、目を覚ますと、あなたの奥さんが隣に座っていて、私に、水筒の水を飲ませた。彼女は、あなたの事をしつこく聞いた。私が、あなたの死体を見た事を話すと、いきなり私に結婚を迫ってきた。残念ながら、あなたの奥さんは、別に醜くはないのだろうが、全く私のタイプではない。彼女からそう言う事を言われて、私は身の毛がよだった。

　それを見た彼女は、みるみる真っ赤な怒りの形相になって、私の首を絞めた。彼女の力は意外と弱く、バスも揺れていて、なかなか首が絞まらない。目の前が赤くなって、その中に黄色いぼんやりした丸が、明るく浮かんだまま、ずっ

と私は、気持ちがいいままでいられた。こんなに気持ちいいのは、さすがのあなたも味わえなかったに違いない。あなたとあなたの奥さんは、何時も仲が良かったのだから。

身の毛がよだつ程、嫌いな女に、じわじわ首を絞められて死ぬのが、どれ程の快感か、世の男達に是非知って貰いたいものだ。

しかし、バスは終点に着いて、もう降りなければならない。あなたの奥さんは、警察に引き渡された。

次の次ぎの日、スーパーで買い物をしていると、生き返ったあなたが、私の娘であり、私の婚約者でもあった女と、夫婦気取りで、買い物をしているのに、バッタリ出くわした。私は、富士の樹海に向かって走り出した。もちろん、自分の足だけで行き着ける筈もなく、途中の何処かで、私は、倒れて死んだ。あなたは、私をだますために、苦しい振りをしただけだった。(二〇〇一年二月十七日)

＊　＊　＊

指先

若い女の右手の中指に嵌められた、何の飾りもないつるりとした金の指輪の表面から、小さな目が生えてくる。表面が涙で潤っていて、決して作り物ではなく、生き物の目だ。その女と差し向かいの、真っ赤な服を着た四角い箱のような体型の女が、それを見付けて、別の女の話を始める。その三十過ぎの女は、休みの日になると電車を幾つも乗り継いで、何処やらの宝飾店に独りで出掛けていっては、指輪やら何やらを、買い込んでくるそうだ。

息を切らした連中が、汚い足を踏み鳴らして入っている。どいつも、腐った油のような息を吐く。話は中断する。しばらく騒いで、臭い息を吐くだけ吐いて、それで満足したのか、奴らは一斉に引き揚げた。

別の女の話になっている。忙しい時に限って、勝手に休みを取るんだよ。それで何処に行ってると思う？　パチンコ屋に入り浸ってるんだよ。そんなの、前からずっとそうよ。しかしその女の話をしてるのは、赤い四角い箱ではなく、その後ろの席で並んでお茶を啜っている別の二人の女だ。

若い女は、テーブルに両肘を突いて、少し猫背で顎を突き出し、ちびちびと、黙って握り飯を食っている。一口小さく囓り付いては、こぼれそうになるご飯粒や削り節を、指輪をした手で何気なく突っついては、握り飯の形が、それ以上崩れないようにしている。指輪の目はじっと、その握り飯の、女の食らい付いた跡を見詰めている。その目に見詰められると、海苔が左右に裂けて白茶け

た中身を覗かせる握り飯は、パックリと傷口をさらけ出す、無残な姿に見えて来る。

いや最近は、パチンコだけじゃ物足りなくて、＊＊（聞き取り不能）にも通ってるっていうじゃない、あの女は。

若い女は、食い付いたご飯を、口を小さく開け閉めして、ゆっくりゆっくり口の奥の方に取り入れてゆく。だからといって、じっくり噛みしめている訳ではない。顎は殆ど動かない。薄く開いたままの唇が、微妙に伸び縮みするだけだ。舌でしばらく転がして、そのまま呑み込んでしまうようだ。赤く四角い女は、言う事がなくなって、行ってしまった。

その陰に隠れていた、痩せた女ばかりの三人組が、待ってましたとばかり、若い女と差し向かった。あの男はどうなった。最近見掛けないけど。まだやって来るの？　最近見ないって。さっきそこを通りかかったじゃないの。あらそうだっけ。そうだっけって、あなたも見たでしょう。見てないわよ。見たわよ。そうだっけ。あれは別の男でしょ。いやあの男よ。どの男？

指輪の目には、涙がいっぱい溜まっている。握り飯の哀れな傷口を、ずっと間近で見せられていれば、誰だって悲しくなる。指輪は狭い。しかも硬い。それほど多くの涙は溜められない。目は、自ら溢れさせた涙に流されて、あっけなく、指輪からポトリと落ちた。長テーブルの、女の握り飯からこぼれたご飯

粒の脇に落ちた。どちらも蛍光灯の明かりに同じように光って、区別が付かなくなった。
　やがて誰もいなくなった。ずっと見ていた私は、ちゃんとそれを見分け、自らを濡らす涙に浮かんだままの小さな目を、注意深く指先にすくい取った。
しかしこの目は、何を見ようとして生えてきたのか。別に何を見たいでもなく、ただ生えるしかなくて生えてきたのか。それならこの目に、今何が見えるのか。しかし目だけでは、ただのレンズと同じではないか。目を生やした指輪が、その目を通して何かを見るのだ。では、どうして指輪に目が生えたのか。指輪は何かを見たかったのか。それともただ、生えてしまうものを、生えるに任せただけか。だから少し涙が溜まったくらいで、直ぐにそれは流れ落ちてしまうのか。
　私は、目を乗せた指を真っ直ぐに立てたまま、それから目を離さずに、そろりそろりと、若い女を探して歩き回った。女は、作業机に向かって、大きな鋏で、大雑把な手付きで、紙をざくざくと切っていた。大きな紙を同じ形の四つにして、それを重ねて二つに折って、その向かい合う二つの角を落としてゆく。机の上に二つ折りの三角の小さな切り屑が落ちるままになっている。もちろん指には同じ指輪が見える。ここの方が蛍光灯の数が多いので、ますますそのつるりとした光沢が、白っぽく冴える。

鋏を握った手は、絶えず動いている。どうしたら私は、目を指輪に戻してやれるだろうか。指輪は目を失って、悲しくてぼんやりしているようにも見える。私もつられて、悲しい気分になる。
　何とか女の手を休めさせようと、私は色々手を尽くす。しかし女は乗ってこない。私に気付いているのかさえ、おぼつかなくなってくる。
　私は私の指先を見た。もう涙は涸れていて、目はすっかり、私の指先の指紋の溝の中に切れ長に入り込んで、すっかりそこに馴染んでいるようではないか。私の指先もまた、何かを見たいのだろうか。それともただ、そこに目が乗っているからには、そこに目が生えているようにしておくしかないのだろうか。
　これでは、たとえ女が、指輪を抜いて私に手渡したとしても、元に戻せそうにない。もっとも私に、女の指から指輪を抜き取らせたりなど、決して出来そうにない。それなら私は、狙いを定めて、私の指先をフッと吹いて、女の指までその目を飛ばそうか。
　そうして、また指先を見ると、目はきれいに消えていて、女の方を見直すと、目は女の嵌めた指輪からちゃんと生えている。もう涙も流れず、金色に干涸らびて、いかにも硬そうに、そこにぴったり収まっていた。いや、それはただの光沢で、もう目ではないようだった。
　すると私も消えていた。私はその目だった。（二〇〇一年二月十九日）

＊　＊　＊

養分

私は、ここからずっと遠い所で、腰を屈めて走り回らされていた。小さな建物の中の、上にも下にも右にも左にも、頻繁に折れ曲がる狭い通路だけが、私の居場所だった。ある日私は、そこから姿を消した。

　どれ程か時が過ぎた。薄汚れた大きな建物の、一階の暗い廊下のすり切れた青い絨毯の上を、冷たい空気が這うように流れる。それが私だった。誰にも知られていない。しかし人がそこを忙しく行き過ぎるなら、彼らのきたない足で蹴散らされるより先に、私は退散する。

　人が通らない時間。私はその廊下いっぱいに膨れて、窓枠や天井の照明さえガタガタ揺らして、そこを一気に吹き抜ける大きな風になる。私はもう、こんな汚い建物の中にはいられない。

　そうして私は、森の中の剥き出しの地面の上を、くねくねと進む風だった。森はとても深くて、昼間でも陽が差さない。何時もひんやりして乾いている。生温かく汗臭い湿った風も、直ぐに乾いて冷たくなる。森は奥へ奥へ、何処ま

でも続くようだった。
しかしそこは、緩やかに膨らむ、殆ど平坦な岩場だった。私は仰向けに横たえられていた。そこは、周りから、森にじりじりと侵され、みるみる狭くなってゆく。私は、細い木の枝や蔓に手足の自由を奪われ、堪らずに、白く輝いて震えだした。そうして悶えながらも、私は森から、絶え間なく限りなく、養分を吸い上げていた。しばらくすると、森はすっかり枯れ果てて、もう森でなくなり、ただ暗いだけになった。
それでも輝いて悶えるために、その暗いだけの所からも、私は養分を取り続けなければならなかった。やめたくても、自由が利かないのだから仕方ない。そうして私はもう、周りの暗さと釣り合いが取れない程に、白く輝き過ぎて、その暗さから見れば、ただ全く透き通っただけの空白になった。
私の方からも、その暗いだけの筈のそこは、底なしの闇のようではなく、何処までも透き通って、暗くも明るくもない、そのどちらか分からない事によってだけ、闇のようだった。
そうなってでも私は、そこから養分を吸い取るのをやめられないのだった。しかし、一体何処に養分が残っているのか。私は、白く輝くまま身を起こす。闇を見て取ろうにも、何処までも透き通ってゆくばかりだ。その拡がりの喉元目掛け、牙を剥いてかぶりつく。

しかし何処が喉元なのか。何処もかしこも喉元のようではないか。私は動けない。拡がりをたぐり寄せては、のべつ幕なしに、かぶりつける所を、かぶりついてゆくしかない。拡がりの方も、決してそれを拒まない。私の飢えた口に、その柔らかい喉元を、差し出すのをやめないのだった。何とも、けなげな奴ではないか。

　ガチガチいう音が聞こえる。私の牙が、空中で空振りする音だ。私と、その闇である筈の拡がりは、ゆっくりとではあっても、間違いなく、どうしようもなく離れ離れになり始めていた。どちらからともなく二つは、同じように丸くなって、付かず離れず、浮き上がったようなまま、互いに牽制し合って、いたずらに時を過ごすしかない。

　ハタから見れば、区別の付かない、ただの透明な塊二つだった。何かが決定的に足らないのだ。空気か、水か、熱っぽさか、硬く真っ直ぐな筋金か、それとも汚れか、べたべたした塵芥か、獣の吐く臭い息か。それらを全て混ぜ合わせ、更に何でもいい、埋め合わせの利くものが、どっさり要るに違いない。私が養分を取り始めた時から、それら諸々は、ここからどんどん、奪い去られていたのだ。

　私とそれは、浮き上がったようなままではいられず、二つ並んで、落ちてゆくしかなかった。空気か、水か、その他の汚いあれこれのように、形をなくし

て。しかし直ぐに、私もそれも、私達が二つのままではいられないと知った。一つ分の空きしかない。

私とそれは、形のないまま、だからどちらがどちらか自分でも分からないまま、生き残りを懸けて激しく争った。その争いによって、私とそれは、白い輝きと、闇にふさわしい暗さを取り戻せたようだった。

そうなるともう、私とそれは、争いたくても、争う術がない。互いを打ち倒せないのを呪いながら、争いは収まるしかなかった。私もそれも、もう触れ合える筈もなく、離れ離れでありながら、互いしか見えない所で、互いを憎むしかなかった。自らを脅かす唯一のものとだけ、ずっと向き合っていなければならないのだった。

私は埃っぽいコンクリートを懐かしんだ。私の敵は何を懐かしんでいるだろう。コンクリートよりずっと古い何かに違いない。それなら、私が身を引けば済むだろうか。

私は、私の輝きを牙に見立て、私の白い喉元を食いちぎった。あらゆる養分が、それに向かって、ギラギラと降り掛かってゆく。ギラギラしたままでは、闇に相応しい暗さが、引き裂かれてゆくばかりのようだった。(二〇〇一年二月二十三日)

* * *

箱

冷たい日がずっと続いた後の雨の夜。誰にも等しく、時間はたっぷりある。そんな夜に私は、家で独りで、金の計算をしている。伝票が溜まっていて、数字もちっとも合わない。とっくに済んだ事を正しくなぞるだけだ。そんな事も、碌に出来ないのか。冬の夜の雨音は、部屋に居る者をじっとさせておかない。彼らは必ず連れ立って、出掛けているだろう。

　その彼らの世界は、窓ガラス一枚隔てた直ぐそこにまで続いている筈だ。靴を履いて、出てみようか。直に耳に入る雨音の、忙しく生き生きした感じに、たじろぐだけだ。行く先のない私には、薄い壁や窓ガラスが慰めなのだと、思い知らされるだけだ。

　私はここに居るのだろうか。何度やり直しても計算が合わなければ、居ないのと同じだ。キーを打ち直す手が止まり、ただ真っ暗な窓に目をやる。そのまま、何をどうしたらいいか、分からなくなる。雨音の先にある、私だけが居ない彼らの世界が私を苛なむ。しかしそうしてやっと、ここに居るしかないとも思えてくる。

次の夜も、ぐずぐずと冷たい雨で、同じ順に、何度も何度もキーを打ち直すだけだった。
次の日も、昼間は雨で、日暮れて間もなく、やっとやむようだった。私は家に帰る途中だった。坂道の降り初めの、捩れた狭い石段の所で、男が声を掛けてきた。
「今日も月は出てませんね」
聞き覚えがある。昨日もその前の日も、雨の前から、この辺りでこの男は、そんな事を言っていた。独り言だと思って聞き流していた。
「新聞の月齢欄によると、月は出てなくちゃいけないんですよ。私しか気が付いてないなんて。だけど、星は出てますよ。まだ雨がやんだ訳じゃないのに。おお、いっぱい出てる。計算が前に進まなくて大変ですね」
「何の事でしょう」
「お金の計算ですよ、何度やっても、何処が間違ってるか見付からないんですよね」男はずっと空を見上げたままだった。目の前には、窓一つない大きな箱のような建物があった。
「何で、知ってるんですか」
「さあ。ここ、私のウチなんですよ。寄ってきま…」男は行き成り抱きついてきた。物凄い力で、私は胸を圧迫され…

気が付くと、私は建物の中に居た。本当に何もない。壁も全て鉄骨が剥き出しだ。真ん中にぽつんと男が居て、側に板が何枚か重ねて置かれてある。全くそれだけだった。男は、板を組み合わせて、箱を作っている。私はそれを見下ろしていた。

男が私を見上げた。私は素っ裸にされ、鎖に繋がれ、壁の高い所で大の字にされていた。

「あなたは月ですよ」

思わず私は、私の体を見た。私は人の体をしていた。

「空から月を取ってきたんですよ。ほら、輝いてますよ」

もう一度、私の体を見た。輝いているようには見えない。しかし、建物の中は、照明一つ見当たらないのに、随分と明るい。そうしてその隅々までを、私の体から出る月そっくりの光が、照らしているようだった。特に床はびしょ濡れで、白く光っていた。中に一つだけ、ゆらゆら動くものに目がゆく。色鮮やかで、長くて、太っていて、熱帯の海蛇のようだった。

男は二度と私を見なかった。箱は、大きいのと小さいのと二つ出来た。小さい方に入って、居心地を確かめているようだ。身動きが取れない程ではないが、男の体が一つ入って蓋をすれば、もう余り空きはなさそうだ。男はすっかり小さな箱に入り、中からそれをガタガタ揺らして、大きな箱の中へといざって行

った。更に大きな箱までガタガタいわせ、その側面の、はね上げられていた蓋がばたんと閉まって、やっと収まった。

　建物の中は、恐ろしく静まりかえった。私の直ぐ足元の海蛇と、目があった。何時の間に壁を這い上ったのか。海の中のように空中を泳いで、行き成りそこに張り付いたようでもある。しかしそいつはそこで、静けさに凍り付いたようになってしまった。

　しばらくすると、箱の中の箱の中から、キーを打つ音が微かに聞こえてくる。聞いている内に、同じ順に何度も何度も打ち直されているのが、一連なりのリズムのように、聞き分けられた。聞き覚えがある。私が家で、何度も何度も、合わない数字を弾き出していたキーの音だ。その数字の初めから終わりまでを、私はすっかり反復できた。そして遂に分かった。計算間違いを見付けた。

　男が私に何をしたいのかも、全て分かった。男の望む通り、私は男に、間違いを伝えなければならない。私のためでもある。それで全て済む。海蛇の奴が、私の左足の脹ら脛から太腿から臍の上へと、這い上ってきた。まどろっこしい。力が満ち満ちた。

　私は鎖を引きちぎった。私は、糸を引く蜘蛛のように、大の字の姿勢のまま、ゆっくりと床に落ちていった。そこから、踊り場も手摺りもない、ただ真っ直ぐな鉄の階段が天井まで続いていた。私はそこを、三段おきに一気に駆け上り、

建物の屋上に出た。

その月の光に輝くびしょ濡れの真ん中に、鎖を巻き付けられ、殆ど８の字にされた海蛇がのたうっていた。私は、ますます込み上げる力のやり場を求め、堪らずに身を投げ出した。同じように身をくねらせ、そいつに夢中で絡み付いた。喜びが走った。私はそいつの一番くねった辺りを股に挟んで、体を激しく擦り付けた。

しかし耳だけは澄ましていた。下からキーを打つ音が伝わってくる。計算はもう、先に進んでいた。私はやり遂げた。正しく伝わったのだ。

計算はどんどん進んで、遂に仕舞いまでやり遂げられた。しかし、そうなると男にはもう、出来る事がなかった。何も見えず、何も聞こえないからだ。箱からも出られず、ただうろたえるしかない。

私はやっと数字から解き放たれ、夜が明けるまで、海蛇と交わるつもりだった。彼もすっかりその気だ。私の体のあちこちに歯を立てて、白い肌を細かく波打たせている。お返しに私も、いっぱい輝いて、いっぱい彼に噛み付いてやろう。男の頭に、その私と彼の姿だけが思い浮かぶ。男は、箱の中の箱の中で、無理な姿勢で、じたばたするだけじたばたし、体中の骨を折るだけ折って裂いて砕いて、グニャグニャになって死んだ。（二〇〇一年二月二十五日）

＊　＊　＊

説明

　古木に囲まれた古い神社がある。昔は沼に面していたそうだ。ただ古いようでも、何度も立て替えられ、あちこち場所を移され、名前も何度か変えられてしまったそうで、ここに移された時の事を覚えている老人がまだ何人か健在だから、今の社はまだ百年も経っていないのだろう。

「ここには自分が祀られているのだ」と言って譲らない男がいる。「そんな訳はない」と女が反論する。

　昔、沼を挟んで、男神を祀った神社と女神を祀った神社があって、大水のたびに男神を祀った神社ばかりが壊れ、その再建に土地の人間は苦しめられたので、男神の神社は憎まれるようになった。それで誰かの悪知恵で、秋の雨季を前に男神の神社に火が掛けられ、跡に女神の神社が移された。女神の神社跡には、その側にあった子供の神を祀る神社が移された。

　すると今度は、建てたばかりのその子神の神社が大水に流され、土地の人間も随分死んだ。それでその悪知恵を出した男は叩き殺され、女神の神社はまた元に戻された。

その頃から灌漑の技術も進み、水は出なくなった。元々男神の祀られていた所には、灌漑事業を押し進めた土地の実力者が祀られた。しかし過信は禁物で、また大水が出て、今度はどちらの神社も殆ど跡形もなく壊された。これ程の被害は今までになかった。すると今度は、悪知恵を出して叩き殺された男を祀る事になった。

どうしてか。その男の正しさが認められたのか、それとも逆で、毒を以て毒を制す、という事か。恐らくは親子三人の神が一纏めに悪い事にされて、ほかに祀るものもなく、その殺された男にお鉢が回ってきただけではないか。

沼地は次々に埋められ、真っ直ぐな道路が引かれ、家が建っていった。見渡す限りの沼地だったのに、もう神社の前に擂り鉢型の小さな池があるだけだ。だからと言って、その辺りの住人たちが水の恐ろしさを忘れていられた訳ではない。子供がよくその池に落ちて死ぬからだ。子供の死体は滅多に揚がらない。池の主の亀が、子供を食ってしまうからだ。それならいっそ、その亀を祀ったらどうか。

その亀こそ、真っ先に祀るにふさわしいものだったのだ。今までずっと、見当はずれのものを祀ってきた。そうして亀の機嫌を損ねてきたから、死ななくて済んだ者らが随分死んだのだ。神社は模様替えされ、亀尽くしの亀神社になった。亀の長寿にあやかろうと人気が出て、長生きにしか興味のない強突張り

共が、せっせと金を運んできた。土産物屋も大繁盛で、その土地は初めて大いに潤った。
そこへある日、密猟者の一団がやって来て、白昼堂々、池の大亀をクレーンで吊り上げ、トラックに乗せて持ち去った。土産物屋の主人達は、それをぼんやり見物していた。大事な亀が病気になって、有名な獣医に診せるのだと思った、と言うのがその弁解だが、後で考えただけのものだろう。
亀は、どこかの外国の金持ちに売り飛ばされた。池の主を失って、何しろ何人もの子供を呑み込んだのだから、元々陰気な雰囲気の池は、ますます陰気に見えた。参拝客はぷっつり途絶え、池は直に干上がった。
空気の乾いた風の強い或る日、土産物屋から火が出て、彼らの建てた亀御殿から何から全て焼けた。もう神社など建てなくていいじゃないか。いや神社の一つもなければよそ者に馬鹿にされるぞ。しかしもう、祀るものもない。ではいっそ祀るものを公募してはどうか。その役場の職員の意見が通り、結局そこは、子供の頃から神社が大好きだった不動産屋の女社長が祀られることになり、その祀られる当人が再建の金を出した。
「それが私なのよ、生き神様の女社長で売ってるのに、あんた、でたらめ言うと、ひどい目に遭うわよ」
「確かにお前は選ばれた。だけどそれは、誰もこの神社の由来を知らんから

だ。ここは元々、この土地がまだ誰にも知られてなかった頃、ここで野垂れ死にした男が祀られてたんだ。それが私だ」
　木に登っている子供が聞いた。「どうして分かる？」子供は値の張りそうな服を着ている。
「ただ分かるから分かる、それだけが本当だ。説明できてしまう事なんて、嘘と嘘の組み合わせでしかない」子供は呆れていなくなった。
　女の姿もいつの間にか消えていた。男はうずくまり、腹を空かして動く事もできない。
「ところで、誰も知らない所で野垂れ死んだのなら、そのまま骨になって終わりなのに、どうして祀られる事になったのかな」と私は聞いてみた。
「男に逃げられた何処かの女が、子供を連れて、闇雲に男を追っ掛けてたんだな。それで間違ってこんな所にやって来て、たまたま俺の死体を見付けて、急に目が覚めて、男を追っ掛けるのをやめたんだ。で、女は自分が、この肥えた土地と、ここに通じる道を見付けた事に気付いた。そうして後から来る奴らに順々に土地を分けて、金持ちになって、俺に感謝でもする気になったか、俺を祀ることにしたようだ」
「女神と子神はどうなのかな」「ずっと後になって、誰かそんなもんも欲しくなったんだろ」

しかし男は、思い出してしゃべってる。それはもう、昔の何かの説明でしかない。男の言い分では、嘘と嘘の組み合わせだ。思い出せない事だけが本当なのではないか。（二〇〇一年二月二十七日）

＊　　＊　　＊

景色

とにかく私は鉄が嫌いだ。近付くと、必ず何か語りかけてくる。型に嵌められ、ひどく重い物を背負い込まされ、散々火に掛けられ、石を砕かされ、事あるごとに何かにぶち当てられ、それで少しも報われない。だからひどく虚しいと泣き言を繰り出す。

ちっちゃな日用品や、大きくても、どっかに据え付けられてるならまだいい。問題は、手足があって勝手に動き回る鉄野郎だ。そいつは、日が暮れかかる頃から二、三時間だけ活動する。ただ残念ながら、私もその時間、そいつがうろうろする辺りで働かなければならない。ずっと走り回っていられればいいが、たまに待ち時間も出来る。そんな時、すかさずやって来て、ぼそぼそやりだす。

「オレは全く眠れない。お前だけがスヤスヤ眠る。オレは磨り減るだけだ。

少しずつ少しずつただ磨り減る。オレの苦しみが分かるか。お前は眠るたびにいい夢を見て、その中で気に入ったものだけ選んで、それを追っ掛けられる。そうしてお前が、毎日好きにしているのを思い浮かべては、何も出来ないオレは、ただただ苦しみ続けている。」

「そんな事、私に言われても困る」

「いや、お前はオレの話が通じる。他の誰とも違う。お前のようなのは初めてだ。決して逃がさない。せめて、オレがどれだけお前を当てにしてるかだけでも、分かって欲しい。オレはお前に、オレの苦しみを通じさせたいんだ。お前の心は柔らかい。オレの心は、オレだけでは永久に硬い。そのオレの心の苦しみが少しでもお前に通じれば、そのお前の心の中で、オレの心も柔らかくなれるんだ。」

「そんなの…、私とあんたじゃ土台モノが違うんだから無理だよ」

「お前はオレが嫌いか。」

「しつこいじゃん」

「しつこくなければいいのか。しつこくでもしなければ、お前はオレの事なんか絶対考えない。」

オレはずっと、誰かにオレの話が通じるなんて思ってもいなかった。ただ硬いだけで、心も何もなかった。だけどふと見ると、お前がオレの方を見て、眉

をひそめてるじゃないか。オレはそこで初めて何かを見たんだ。それまでのオレには心なんてなかった。だから何も見えなかった。だけどお前の事が見えて、それでオレには心があるって分かったんだ。

それだけじゃない。こいつは眉をひそめてる。こいつはきっと硬いものが嫌いだ。その通りだった。お前は硬いものが嫌いだ。そのお前の気持ちまで、オレはそこで見て取れたんだ。そこでオレには心があるって、確かに思えたんだ。オレと違う心にまで入り込めて、オレを嫌いなお前の気持ちまで知れたんだからな。

それからオレは、夢中であちこち走り回って、試してみた。だけどオレには何も見えなかった。もちろん、オレが入り込めるような、オレ以外の心の持ち主なんて見付からない。オレは硬いだけだった。」

「ああそう、嫌いなのが分かってんなら、もう消えてよ」

「じゃあ、お前は何が好きだ？　いや、分かってる。あいつだ。だからオレが幾ら苦しんでも、お前に少しも通じないんだ。だけどほんとにあんなのが好きなのか。」

「好きだから一緒にいるんだよ」

「向こうはどうなんだ。好きじゃないかも知れないぞ。」

「好きなんじゃないの、一緒にいるんだから」

「だけどそいつは何時か、お前を裏切るぞ。お前がそいつを好きでも、オレに比べたら、そいつはお前の事なんか、ろくに考えてもいない。直に飽きてお前と別れて、直ぐまた他のを見付けるさ。お前はオレみたいに硬くない。傷ついて、それっきりかも知れん。」

「いいよ、別にあんたみたいに長持ちしなくても」

「そうだ、オレの弱みは長持ちする事だ。全く眠らずに、どうしたらオレの心がお前に通じるかだけ考えて、どうしていいかまるで分からず、ただただ悶え苦しんでいる。それで、病気になれる訳でも、気が狂える訳でも、弱って死ねる訳でもない。何一つ忘れられず、苦しみ続けるだけだ。

オレを本当に苦しめるのは、お前がいそいそとあんな奴の所に上がり込んで、オレの苦しみなんかすっかり忘れて、夢見心地になってる事だ。昨日も、今日これからだって、お前は嬉しそうに尻を振って、あいつに会いに行くんだ。オレがお前に求める千万分の一も、あいつはお前の事なんか必要としてないのに。」

「何で分かる？　必要としてるかも知れないじゃん」

「いや、あいつは女を忘れられる。オレは絶対変わらない。お前がいなくなったら、たった独りで、苦しんで苦しみ抜いて、何処までもお前を探し回るしかない。それで、誰も行かない地の果てで、錆びて動けなくなって、絶対お前の現れない同じ景色だけ見続けて、来る日も来る日も、お前が他の男

にぶら下がってるところしか思い浮かばず、悲しくて胸に穴が開いて、それでもまだ、ただ悲しくて悲しくて悲しいだけでも、オレはその全てを受け入れる。オレは鉄の意志でオレを貫くんだから、後悔はしない。最後まで苦しむ。だからって、そんなの少しも慰めにはならん。お前に嫌われて、お前がいなくて、苦しむんだからな。

ところでオレの事だが、だいぶ知れ渡ってるようだ。笑いもんか晒しもんだ。苦しむのを見て笑うような奴らは、そうさせておくさ。オレはお前だけで、後はどうでもいい。ただ邪魔をされて、お前と話せなくなるのは辛い。」

さて、私は結構かわいい。そうか、知れ渡ってるんなら、ちょうどいい。私を守ろうと正義の味方ヅラするおっちょこちょいは、何人もいる。

直に、腐った鉄野郎は、二度と口が利けないように、修理工場に送られた。今はもう見掛けない。(二〇〇一年三月一日)

＊　　＊　　＊

星

地平線が弓なりに見えるほど、狭い星に私はいる。海も川もない。小さな黄

色い太陽が幾つも照っていて、夜もなかった。地表は何処も、異性の肉体だけが、たっぷりした肉付きの丸裸で、隙間なしに犇めいている。肌と肌の熱く擦れ合う、無数の音が、一つに溶けてゆるゆると立ち上り、空一面を覆って、何処までも響き渡ってゆく。それらを異性と呼ぶしかないのは、その星の性は、男女とも雄雌とも違う形の、両性だからだ。さて、その数限りない彼らからすれば、たった一人の異性である私は、三日月のように反り返った、幅の広い抜き身の太刀を強く握り締め、手近なものから順に、力の限り斬り付けてゆく。一太刀で、その黒ずんだ湯気を立てる胴体の、上と下を真っ二つにすると、すぐまた次ぎの一人を、同じように斬り殺す力が湧いてくる。まずもって、星中の全ての異性を斬り殺さない内は、私の気は収まらないようだった。私の体や太刀はもちろん、星ごと、血で真っ赤に塗られてゆく。どれ程の時と労力が要った事か。地表は全て、何時まで経っても噴き上がる血の止まらない、生々しい死体で覆われた。そしていよいよ残り一人だけが、直ぐそこに、白い体を斜め後ろに向け、折り重なった死体の上に、黙って立ち尽くしている。それは、偶偶最後に残ったのか、それとも、予め私が目を付けておいたのか。私には分からない。立ち尽くす姿は、ほっそりして見えた。手には、もう太刀はなかった。虚空のみを強く握り締めていた。その手をかざして、私はその最後の異性に飛び掛かり、いきなり激しく交わった。初め、その体は冷たかった。しかし

直に熱くなった。力が尽きる事はなく、その力の限りを込めて、私達は続けた。二人で一つのその体は、星の表面にびっしり敷き詰められた血まみれの肉の上を、ぬるぬると何処までも何処までも滑って進み、いたる所を行きつ戻りつして、決して終わる事なく、動き回っているのだった。（二〇〇一年三月三日）

＊　　＊　　＊

源流

久し振りに表を歩いている。真っ白な分厚い大きな雲が、幾つも幾つも、すごい速さで、少しくすんだ青い空を、我が物顔に過ぎてゆく。私の体は、澄み切った真空の中を進むように、しなやかで柔らかだった。私は若い女だった。それが何だ。若さなど何の役にも立たない。若さのせいで、私はただ、何処だか知らない所に運ばれてゆくばかりだ。それで他に何も出来ない。居心地もすごく悪い。私は、ちゃんと私でいる事が出来ているのか。確かめようと、私の姿を追ってみても、運ばれてゆくのが速すぎて、その姿は見えない。

私は家を出て、多分仕事をしにゆくのだ。

今しがた川が氾濫して、動く筈のないような大きな丸い石が、空き缶のようにころころと転がって、道を塞いでいるのだった。よれよれの服を着た、痩せて皺くちゃな小柄な男が、打ち上げられた海藻のように、その石の側面に張り付いて、直ぐ前の建物の窓を覗き込もうとしている。窓からは、老若男女の不揃いな下手糞な、うーうー呻くだけのような合唱の声が小さく漏れてくる。男はひどくやつれて見える。何時死んでもおかしくない。頬はこけ、ぎょろりと目を剥いて、犬のように精一杯上体だけを起こして、窓に顔を近付けようとしている。下半身など、何の厚みもない、二股のただの筋だった。

巨石といえども、転がってきたばかりで、まだ収まりが悪い。上体を起こしすぎて、ぐらぐらする。その度に、私の鼻先に吐かれる男の息が、臭くて堪らない。私は知らない内に、後ろから石を押さえていた。しかし私の手が滑って、男を乗せたまま、石は前にごろりと裏返ってしまった。男は若返った。いや違う。それは私だった。男はすっかり石の下敷きになって、外から見る限り、全く消えてなくなっていた。

私は窓を叩いた。叩いてみて直ぐ、割れなかったのが不思議なくらい、そのガラスが薄いのに驚いた。強くは叩けない。指先でトントンやるくらいだ。誰か一人でも気付いてくれないだろうか。しかしガラスはひどく煤けていた。後ろから声がして振り返る。

「何日も何日も、あなたはここで中を覗いていましたね。私達の同胞であれば、決してそのような事はしません。さあ、中へどうぞ。」

男のようにピンと真っ直ぐな体付きで、女のようにのっぺりした顔をして、男のように太く嗄れた声を出し、女のようにくねくね流れるような身のこなしで、男のように大股で、委細構わずずんずん先に進んでゆき、それでも時々、女のように気まぐれに、よそ見して立ち止まり、思い付いた事をぶつぶつ口にするような奴だった。

私は後に付いて、陽の差さない冷え冷えとした湿った地面を進んだ。入り組んだ建物の壁際をぐるりと回って、正面に来た。正面からだと、その建物は、陽が当たって高い塔のようにほっそり見えた。

半球形の大きな鋲が幾つも打たれた、物々しい扉が開けられた。中に入ると年嵩の者ばかりだった。私は晴れやかな気分になった。彼らは皆恐ろしく多弁で、身振り手振りを交え、熱っぽく未来の夢を語り出す。しかしその内容が、男女を問わず、誰か頼りになる人に、或いは人でなくても、それに代わる何か頼りになるものに、子供のように全てを任せて甘えたい、そのためなら自分はどんな苦労も厭わない、というものばかりだった。

私の若さが物珍しかったのか、初めの内は、順番待ちで私の相手をしてくれて、私にも夢を語ってほしいようだったが、私は別に子供になりたいとも、大

人になりたいとも、今のままが続くのがいいとも、何とも思っていなくて、語るべき言葉がなかった。直に私は誰からも相手にされなくなった。一日中陽の当たらない隅っこに追いやられ、すっかり忘れられ、そのまま年を取った。

　手を見ると、指は節くれ立って皺皺だった。私はやっと、私でいられる私の姿を、ちゃんと見て取れたようだった。それで私は、直ぐにもここを出たくなった。

　分厚い扉は、ずっと閉まったまま閂が掛かっている。私は壁際を辿って、あのガラス窓を探した。それは見付からなかった。長い時が経ったのだ。私の記憶違いで、窓など初めからなかったようにも思えてくる。

　閂の外される音がして、急に明るくなった。若い男が、例の奴に伴われて入ってきた。奴は黒い頭巾を被っていて、ちらりと覗いた顔は、随分老けたようでもあり、私を連れてきた時も、同じくらい老けていたようでもあった。どこか芝居じみた感じは変わらない。

　男はここの仲間に加わった。私以来ではないだろうか。男は、しゃべりたがりどもを振り切って、真っ直ぐ私に近付いてくる。私は目を背け、強ばった指で壁を撫でながら、尚も窓を探そうとした。彼は陽の匂いを携えていた。

　彼は直ぐに窓を見付け、その下の誰も知らなかった非常口を蹴破った。緑に振り返りもせずに、素早く彼の左手は、全く正確に私の右手を取った。外に出

て、私はそのまま川岸まで連れていかれた。途中振り返る彼は笑顔で、私はそれを、そっくり映し取る鏡のように真似る事が出来た。初めてだ。嬉しくて次には、自分から笑えているように思えた。

天気は良かった。その割に川の水嵩がすごくて、私は気圧された。私達は、それを眼下に見下ろせる、突き出た岩の上に立った。私は彼にしがみついた。そのまま落ちて、二人一緒に、川底に沈んだままになりたかった。彼は軽々と身をかわし、私一人が落ちた。川底寸前で、私の体は向きを変え、勢いよく水面へと浮き上がった。私は更にミサイルのように飛び上がり、彼の腕に抱きとめられなかったろうか。そうして、そのまま二人は、川の源流を目指し、二度と帰って来なかったのではなかったか。

川が氾濫し、建物を全て流し去った。しかしそのずっと前に、建物の中の者達は、一人残らず老衰で死んでいて、折り重なって腐り果てた死体もまた、何処かへ流されていった。せめてその建物のあった辺りにだけは、肥えた土が、少しは運ばれてきたろうか。後は、馬鹿でかい石ころばかりだ。（二〇〇一年三月五日）

＊　＊　＊

お喋り

一人の娘と、二人連れの娘が、道ですれ違った。一人の方は、五月の或る日の夕方の、まだ明るい中を、だらだらと恐ろしく長い、細い坂を登った先の、バス停に向かって、ゆっくりゆっくりゆっくり不機嫌そうに歩いてゆく。二人連れの方は、二月の雨の夜を、噴水のある円形の広場の方に、肩を寄せ合って楽しげに、何か夢中で会話を交わしながら、大股で歩いてゆく。広場の脇には、暗く高い崖が切り立って濡れていた。その向こうには、川が流れていた。

それらを、喫茶室から眺めながら、私は、偶然行き会った旧知の弁護士と、死について議論していた。

「…へえ、そうなの、私も一度、死刑囚と話してみたいな。だけど、おかしくない？　そんな彼が、神様なんか信じて、清らかな心持ちで、死を迎えるんでしょ。たとえば私なんか、大して悪い事もしてないのに、誰にも助けてもらえず、独りぼっちの真っ暗闇に取り残されて、怯えながら、どんな希望からも見放されて、死んでゆくに決まってるのよ。善良な市民がそんな死に方で、何人も人を殺した死刑囚が、何でそんな、いい目に遭って死ぬ訳？

彼なんかには、徹底的に死の恐怖を植え付けて、その恐怖が頂点に達して、今にも気が触れそうになった時に、刑を執行すべきでしょ。それで初めて、悪

い事しなきゃ良かったって、思い知るのよ。」
「そりゃ、死刑に拷問を加えたようなもんだな。」
「いや、死刑そのものが、そうあるべきなのよ。裏切られて殺された方は、恐怖の真っ只中で、何だかよく分からないまま、ただただ悔しい思いで死んでいったのよ。その子達の霊が、そんな麗しい死刑執行を見てたら、どう思うかな。私なら絶対許せない。法律は、死者の霊魂なんて無視なのね。」
「君は、想像でモノを言ってるな。死刑を言い渡された者の苦しみは、当人にしか分からんのじゃないか。清らかな心持ちであるようでも、それは、ぎりぎりの上っ面だけで、やっぱり死ぬのは怖いし、何時、その日が来るか待つだけなのは、かなりな苦痛だろう。」
「それだって想像でしょ。大体、死の恐怖って、やっぱり個人差があるでしょ。歳にもよるし。若い頃は、身近な人が死んでも、やっぱり自分の死になると、まだよく分かんなくて、その分かんない事が怖いのよね。それが、歳取って、見当が付いてくると、それだけ死が迫ってるんだから、若い頃より怖い筈が、それ程でもなくなったりするでしょ。例えば、早くお迎えが来て欲しい、とか、会う人ごとに言ってる年寄り。私には理解出来ないけどね。そんなのを死刑にしたって、しかも、坊さんがタダでやって来て、安らかに死んでゆけるのよ。そしていつの幸せに、協力してるようなもんでしょ。金払ってでも、そうして欲しい

人だっているよ、きっと。」

「いたとしたら、インチキ宗教家のカモになるだけだな。しかし、君は、死と死刑を混同してないか。死の苦しみと死刑の苦しみは、違うんじゃないか。それに、早く楽になりたいなんて言ってるのは、当分死にそうにないって、自分で安心してるんだよ。そんな人達は、自ら望んで、死を選ばないよ。それでもやっぱり死にたいんなら、何とか自分の気持ちと折り合い付けて、心安らかに自殺すればいい。」

「心安らかな自殺…。うーん、自殺した事ないんで分かんないけど、自殺する人って、やっぱり生きたいのよ。だけど、それがどうしても出来ないとか、そう出来るかも知れなくても、それが死ぬほど苦しいとかで、死んじゃうんでしょ。人並みに生きてりゃどうにかなる、なんて人は、自殺なんか考えないだろうし、もし考えても、自分よりもっと不幸な人を見付けて来て、それで大体、思い留まるのよね。心安らかな自殺なんて、多分絵空事よ。それでも死刑の方が、自殺よりずっと苦しいってのが、あなたの意見なの?」

「いや、まあ比べようはないだろうが、そういう事もあるんじゃないか。」

「ところで、信じてた男に、行き成り、絞め殺される女の苦しみって、どんなものかしら。私って、ちょっと変かな。これも、お気楽な想像の内かも知れないけど、その殺される瞬間って、案外、何でもないような気もするな。その

ほんの直前まで、男への物凄い怒りとか憎しみが噴き出して、それが猛スピードで、頭の中を渦巻いていたとしてもね。どっかでそれを、突き抜けてしまえるような。ああ、こういう事だったのか、私はこういう終わり方をする事になってたのかって、それが分かって、妙にホッとするような…。
だから私に限って言えば、私は誰かに、あっという間に殺されればいいんだわ。それも恋人とか知ってる人とかじゃ、色々感情的に面倒くさいから、その人殺しの顔とか姿とかも見ないまま、パッと済まして貰えれば、すごく楽かも。
それもどうせなら、もっと早くそうなりたかったな。何でも楽しかった若い頃、だけどこんなに楽しいのも、直に楽しくなくなっちゃうのかなって、初めて感じた時、そのままずーっと、死んでしまえてたら。そんな風に死ねた人がいたら、すごく羨ましいと思う。だから、事故死でもいいんけどね。」
「君の話は、早くお迎えがきて欲しい、なんて言ってる婆さんと余り変わらないな。」
「だけど、それから大分生きちゃったから、もうダメよね。生きてく苦しみも、死ぬのがすごく怖いのも分かって来ちゃったから、もし今、誰かが私を殺しに来ても、その生きて苦しんだ分だけ、元を取らずに死ねるかって、こんなままで死ぬもんかって、ジタバタするに決まってる。馬鹿みたい。いや、でも、まだまだ遅くない。この先もっと苦しんで、挙げ句に自殺するよりずっといい

わ。殺し屋の知り合いとかいないの。紹介してよ。」
「フン。」
「じゃあ、逆に私が殺し屋になって、他の誰かを、生きる苦しみと死ぬ苦しみから救ってあげる、ってのはどう？」
「苦しかろうとどうだろうと、人には生きる権利がある。誰かがそれを一方的に奪って良いという、どんな理由も存在しない。」
「ハッハッハッ」
自殺の決断に至る程、生きて散々苦しんで、その苦しみも、結局、ただ虚しかっただけだと、思い知らされる苦しみまで背負って、それで自殺するくらいなら、今直ぐにでも、殺されたい。ただ、そう待ち望んだところで、何も起こらない。現実は甘くない。何一つ、私にしてくれない。
それなら私は、あの噴水の前ではしゃいでる娘の内の一人でも、殺してやろうか。今が一番楽しい時だ。この先、いろいろ苦しむだけなら、今、殺されるのが、彼女にとって最高の死に方だろう。しかも手回し良く、弁護士まで立ち会ってる。私は直ぐ捕まって、巧く坊さんに丸め込まれて、ムダに生きた私の罪を全て認め、何もかもすっかり悔い改めて、心清らかに絞首台に立てるだろう。あの娘の幸せと私の幸せと、二つまでも今、私の手の中にあるのだ。それを使わない手はない。

　ところであの、五月の夕方の中を、のろのろと不機嫌そうに、坂を登り始めた娘は誰だったろう。そうだ、思い出した。今と似たような気分になって、二年ほど前に、私が殺した娘だ。
　だけど、どうもそれは、ムダ死にならぬ、ムダ殺しだった。どんなに、人を丸め込むのが巧い坊さんが、相手をしてくれても、悔い改める事なんて、とても出来そうにない。ああ、どうしたら、初めから何もなかったように、すっと、死ねるんだろ！
　このまじゃ何も変わらない。やっぱり、もう一人殺してみよう。
私は、傘も差さず、暗い中を、噴水まで走った。娘は、一人しか居なかった。私は、素早く後ろに近寄って、その細い首に手を掛けた。視野の端に、もう一人の娘が走って行くのが見えた。その後ろを、ずんぐりした男の影が追っていた。私は娘の上半身を、噴水の丸い池の中に沈めた。
　終わった。顔を上げると、反対側の池の縁で、私と同じ事をしている男が居た。弁護士だった。薄くなった髪が濡れて、頭にぺったりと張り付いている。
彼も私を見ていた。
　相手の姿をじっと見つめ合ったまま、私達はどちらからともなく、池の縁に沿って近付いた。男の小さな目が釣り上がっている。
「でも、どうしてあなたが？」

「殺すしかない。この子が毎日楽しく生きてる限り、オレだけが惨めで、苦しくて生きていけないんだ。だけど、独りでは怖くて死ねない、この子を殺してしまえば、自分も直ぐ死ねる。」
「じゃあ、ついでに私も殺してよ。」
「言われなくてもそうするさ、お喋りが。」
全てを済ませた弁護士は、最後に、川に身を投げた。
坂の上の娘は、川を流れて行く四つの死体を、やはり不機嫌そうに見下ろすだけだった。実は、この娘だけが、まだ生きているのかも知れない。大分、日が長い。今は五月ではないのか。（二〇〇一年三月七日）

＊　　　＊　　　＊

行き先

自分を見失う、という言い方があって、しばしば用いられる。それなら私が、見失った自分を探しに行こうとしても、そんなにおかしな事でもなさそうだ。
しかも、何処で見失ったか、ちゃんと分かっているのだから、事は早い。
早速私は、いや見失われているのだから、これからそこへ探しに行くのは誰

だろう。私ではない誰かだろうか。しかし私以外、誰も私の自分を見失う事が出来ないなら、見失っているのも、私であるよりなさそうだ。自分をなくして、すっかり中身がなくなっている私、取り敢えず、そんな私が探しに行く事にしておこう。

探しに行く前から、やれ、その探しに行くのが誰か、なんて言い出したら切りがない。何時、出掛けられるか分からない。何処に行けばいいか分かってるなら、さっさとそこで自分を取り戻すのが、一番手っ取り早い。

さて、それがいいのか悪いのか、その見失った所へは、大体毎日、顔を出す事になっている。直ぐにもまた、そこで自分を探したいが、来る日も来る日も、手ぶらで帰るばかりでは、気が滅入る。ややもすると、行くのがためらわれたりもする。しかし行かずにいれば、見失われた自分の事で頭の中がこんがらがって、苦しいだけなので、やはり出掛ける方がましだ、という事になる。

何処で見失ったか分かっているだけではない。私は見失ったままのその姿を、ちゃんと思い浮かべさえ出来る。だからそこで、たまたまにでも、その姿を見掛ければ、私はもう見失ったものを見出したのだ。それ以上見出しようがない程に見出して、私はすっかり、元通りの自分を取り戻した筈だ。違うか。

しかし私が、その姿に近付いて、声を掛けようとでもしようものなら、それに気付いたその姿は、一瞬だけ動きを止め、その面持ちを冷たく凍り付かせ、

虚ろな目線を何処か暗い彼方に放って、私から遠ざかって行く。もちろん私も直ぐ後を追う。行き先は大体決まっている。それは私の行き先だ。しかも精々、その日にもよるが、二カ所か、三カ所だ。いや、それは私の行き先だ。しかも精々、その日にもよるが、二カ所か、三カ所だ。いや、その日にもよるが、二カ所か、三カ所だ。そこに行ってみて、見当たらなければ、先ず諦めるしかない。そして、もしそこに、その姿を見付けたとしても、必ず他の誰かが、間に挟まっている。そうなると、その姿に声を掛けるのは、恐ろしく難しい。

だってそうだろう。他人の目の前で、どうして、見失った自分に話し掛けたり出来るのか。「すいませんが、見失った自分に話があるので、ちょっと、そこをどいて貰えませんか」なんて言えるだろうか。しかも他人といっても、その見失われた自分の姿とは、もう知り合いになっていて、大抵の事は話せる仲なのだ。あっという間に噂が広まり、頭のいかれた私は、その噂との格闘に身を磨り減らし、見失われた自分は、いよいよ遠ざかってしまう。

見失われた自分は、ちゃんとその辺を分かっているのだ。私もまた、そんな愚かな真似は出来なかった。いやそうではない。私は他人の前で、話し掛けこそしなかったが、とても大事な用件を抱え込んだような素振りを丸出しにして、今にも話し掛けようとしていたのだ。それも一度や二度ではない。無理もない。そう何時までも自分を見失ったまま、それを追い掛けてばかりもいられない。いい加減、ケリを付けたいのだ。

ただそうして、たまたまにでも、その姿を見掛けて、追い掛けられたなら上々なのだ。一度ちらっと見掛けて、直ぐ見失うのも、まだいい方だ。何日も何日も、全く影も形もないままだったりすると、何処かよそへ行ってしまったのかと心配になる。

　もちろん、声が届く直ぐそこまで近付けたのに、結局何の収穫もなければ、他にどうしていいか分からなくなって、それでもどうにかしなければならないと、焦るばかりなのも辛い。しかしやはり、会えなくて、会うにはどうしたらいいか、あれこれ考えてしまうのは、もっと辛い。実際、会える会えないは、殆ど運なのだから。しかも、もう二度と巡り会えないのではないか、という悪い考えを、その度に打ち消していかなければならない。打ち消せる根拠など何もなくてだ。

　なぜ、こうなってしまったのか。普通、自分を見失っても、その間は何だか分からなくなるが、直ぐにまた何とか元に戻るものではないか。恐らく、その見失われた自分は、ずっと自分の中にあって、ただ見えなくなっただけなのだ。もし何処か遠い所に行ってしまったようでも、それは、醒めてしまえばそれっきりの、おかしな夢のようなものだろう。

　その自分の姿が、他人と入り交じって、確かに見て取れて、しかも会うのもままならないとなれば、自分が丸ごと取り出されてしまっているのは、疑いよ

うがない。それを探しに行く私の中に、自分はない。つまり、それはもう私ではなく、精々私の抜け殻なのだ。その抜け殻が、幾ら元の中身を探しに行っても、そこで自分を探そうとすれば、その見出せるのは、抜け殻であるままの自分しかないのではないか。

　見失われた私の姿と見えたものも、実は私ではなく、いやそれは確かに私なのだ。ただ、それを探しに行く方が、私でなくなっていては、その私でないものからすれば、その私の姿は、もう自分ではない。自分があるとすれば、その姿を自分であるとしか見えないままに、せっせと追い掛けている、そんな自分だけだ。

　だから、そこへ行けば見失った自分に出会えると分かって、で実際そこで、お目当てのものを見付けたりもして、それでもう、その私の抜け殻は、自分をすっかり見出し、それ以上何も見出しようがない。

　そんな考えが、頭から離れなくなる。夜も眠れない。もっとも自分を見失ってからは、その見失われた自分は、今頃何をしていて、何を考えているんだろうと、四六時中、思い巡らすばかりなので、考え事が一つ増えただけだが。

　出来る事はもう、何もない。何かを探すためには、それがなくなっていなければならない。なくしたからこそ、探す事も出来る。当たり前だ。しかし自分をなくしてしまったときだけは、それは当てはまらない。それなのに、どうし

てもそれを、当てはまるように思い込んでしまう。

私はもう、私の抜け殻だ。その抜け殻の私なら、もう自分をちゃんと見出している。だからもう、何も探さなくていいのだ、と割り切るべきか。

とんでもない。見失った自分を、自分で探さなくて誰が探すのか。それはそうだ。しかしその肝腎の探す自分が見失われていて、残っているのが抜け殻だけでは、為す術はないではないか。

それでも私は、と言っても抜け殻の私だが、見失った私を取り戻しに行かずにはおれない。その度に、どうにもそれを取り戻せない場所で、抜け殻の私が、抜け殻の自分を見出すばかりであってもだ。

ただ余り、時間がない。抜け殻だけでは、直に干涸らびてボロボロになって塵と一緒に風に舞う、殻を脱いだ自分の行く末を、一切見届けられずに。（二〇〇一年三月九日）

* * *

上っ面

仏像の研究をしている。思えば物心付いた頃から、他の事には目もくれず、

明けても暮れても仏像ばかりだった。今ではもう、私より目の利く者はいなくなってしまった。それでも学会では、まだ私が一番若い。

子供の頃から、そんなに人間が嫌いだったのか。それとも、人間を知る事が耐え難い重荷に思えて、人間を飛び越えて、仏像の世界に逃げ込んだだけか。しかしこれはまた、何というありきたりな悔恨だろう。私は、ただ何となく生きてきて、お定まりの反省コースを辿っているだけではないか。

それで、誰でも思い付くように、生身の誰かに恋をしにゆくか。今更、仏像との関係を越える何が、そこに見出せるだろう。私はその動き回る恋人を、結局は仏像のようにしか扱えないだろう。とは言っても、仏像は、私にとってただの研究対象ではない。

特に何体かの仏像については、私はその内に宿る、決してこの世のものではない魂に取り憑かれ、それに恋い焦がれ、全く眠る事を忘れ、日も夜も、その思い描きうる形を隅々まで愛撫しては、どうしても愛撫しおおせず、そのどうにも埋まらない溝に、越えられない隔たりに、どれだけ血の涙を滴らせてきたか。そうして辛い目に遭えば遭う程、彼らへの思いは、ますます狂おしく掻き立てられる。今だってそうで、私の心はズタズタに裂かれてゆくままだ。ただそうでありながら、何年かに一度、何ものにも代え難い強烈な喜びが、何の前触れもなく不意に私を襲う。私はそれを、骨の髄まで味わった。

それに勝る愛を、生身の人間に向けてであれ何であれ、注ぎ込めるだろうか。仮に間違って、その仏像達を越える魅力を、新しい恋人に見出したとしても、私の愛する能力の方が、それに届かないのではないか。そのぎりぎりまでを、私はもう試した筈だから。

それでも、もしそのような魅力がこの世にあるものなら、もちろん知ってみたい。それで、仏像との関係が、全くつまらない、干涸らびたものになっても悔いはない。しかしそうなれば、私はもう何も愛せないだろう。愛したくても、私の力では、どうにも愛しようのないものを知ってしまったからには、何もかもが、虚しく味気ないだけだろう。たまに何か、愛らしい輝きに目が眩んでも、曖昧な微笑みを返して立ち去るのが、精一杯だろう。

それとも、そういう事でないとすれば、それは仏像を越える魅力ではなく、仏像と比べようのない、別の魅力に気付かされる事だろう。そうなれば私は、まるで違う愛し方を求められるに違いない。何も限界ばかりを試して、その高さだか深さだかを満喫するだけが能ではない。

しかし、それはただの、ないものねだりで、虚しい夢想でしかないのかも知れない。

いや、もし本気でそのような別の形を望むにしても、その相手がどうして仏像であってはいけないのか。仏像へは、曲がりなりにも一つの愛し方を極めた

のだ。更に別の愛し方を求めるのに、同じ仏像こそ、それに相応しい相手ではないか。他に私に何があるのか。他に何かある筈だと、その辺をうろつき回ってみたところで、そんな思い込みが空回して惨めになるだけではないか。

　もちろん何かの偶然か必然で、決して仏像には見出せなかったものを、生身の誰かの中に見出すかも知れない。その先は賭だ。判断材料は何もない。それでも私はそれに懸けるだろう。それを後で、つまらない思い込みだったと感じてしまうかも知れない。気が付けば、何の希望もなくして、独りぼっちで何処かに投げ出されているかも知れない。しかしそんな予感など、間違いなく振り払える。

　いや、そこまでが、ないものねだりであり、虚しい夢想なのだ。つまり愛に破れて、独り虚しく取り残される所まで行ってみたいという、そういう情熱に駆られた、これは夢なのだ。

　ではつまるところ、私は愛を失いたいのか、或いは、愛を使い果たしたい、と言った方がぴったりきそうだ。それを使い果たしたと思えれば、幾らその後に、望みを全て絶たれても、何かしらの満ち足りた思いがやってくるようなのか。

　それもまた、虚しい夢想だろうか。そうかも知れない。ただ、そう割り切ろうにも、今のままでは、もうどうにもダメだ。やはり、仏像との関係だけで、

終わる訳にはいかない。もっとずっと苦しい目に遭うとしても、他にどうしようもないではないか。
「仏像が相手でも、愛を極めたんだから、まだいいじゃないですか。確かそんな風に言いましたよね。私なんか、とてもそんな事、言えませんよ。ただ訳も分からず熱中しただけで、まあ相手は初めから皆、生身の人間でしたが、もし愛したとすれば、その熱中が、私の中でずっと続いてゆくのを愛しただけでしたね。その単なる熱中が終わって、そう気付いて、いきなり何もなくなって、独りぼっちで、今は全く身動き取れません。」
「羨ましい。」
「羨ましい訳ないじゃないですか。私こそあなたが羨ましい。」
「仏像との事が邪魔なんです、私には。」
「私だって、あの、まるで単純で、ただそうしてれば良かったからそうしてただけの、ただそれっきりの、一皮めくれば何もない馬鹿げた熱中の記憶は邪魔、まあ邪魔と言うより、毎日それに責め苛まれるのです。いや違うな。ただもうその忌まわしさが、私をぼーっとさせるだけなのです。私はそれをどうにも出来ないんです。」
「それはあなたが、きっとやりおおせたからですよ。」
「とんでもない。私は何もせずに、もうすっかり終わってしまったのです。

初め私は、私に近付く人間を次々に愛しました。彼らの方もよく分かっていて、引きも切らず、私に愛されようとやって来て、彼らも私を愛しました。しかし夢から覚めるみたいに、それは一時の熱中に過ぎなかったのです。人間が愛するに足るものであるかどうかは分かりません。しかし後には何も残りません。」

「いや、あなたは生身の人間を愛したからこそ、そのような美しさを得たのです。人を愛する事の出来た数少ないものだけに魂が宿り、人を愛せないままだった大多数は、ただの木っ端です。」

「ええ、愛せるとしたら、私には人間しかないでしょう。まさか仏像を愛する訳にもいきません。確かに魂は宿りました。しかしそれは今となっては、幾ら人を愛したつもりになっても、愛した事にならず、むしろ、どうにもならない隔たりを知らされるしかなく、その苦しみを、虚しく繰り返すためだけの魂です。そうして、恐ろしく長い時間が、私に与えられました。

もちろん今でも、その虚しさの上っ面を、美しいなどと言って、私を愛してくれる人はいます。しかし何にもなりません。隔たりは隔たりのままです。」

そう言ったきり、その仏像は黙り込んだ。（二〇〇一年三月十一日）

*

*

*

十年

不注意でボールペンを折った。芯を替えては、長いこと使っていたもので、汚れ具合も気に入っていた。左右を、ぴかぴかに磨き立てたガラスで仕切られた通路を進み、白っぽい服の細身の女の立っているカウンターの横を通り過ぎて、筆記具売り場に辿り着いた。

予想通り、同じものはもうなかった。出来るだけ似たのにしようと探すのだが、なかなか決められない。段々と焦ってきた。刺々しい透明の中に閉じ込められた赤や黒や青が、目の前でデタラメに入り混じって、モノを手に取る事も出来なくなり、右へ二、三歩、左へ二、三歩、ウロウロするばかりだった。

三十歳くらいの女が、触れ合うばかりの直ぐ横に来て、ボールペンを物色しだした。彼女も、二、三それらを手に取っては戻し、迷っているらしかった。そこに十歳くらいの子供が、ビニールに入った赤と金の平べったい物を手に、そっと近寄ってきて、彼女にぼそぼそ声を掛けた。二人は親子に違いない。

女が応えた。低い落ち着いた声だ。二人は身を寄せ合って、ねっとりした言葉を絡め合わせながら、私から少しだけ離れた。私は、二、三メートルの距離から、二人を眺めた。その母親は、さっきカウンターにいた白っぽい服の細身の女の十年後の姿だった。低い声に被さるように、若い女のかん高い声が、私

の耳の中で鳴った。

するとその声は、さっき見掛けた、乳製品売り場の前を大股で通り過ぎた、やはり若い女の声に違いなかった。ただ遠くからちらりと見ただけなのに、なぜそう思えるのか。すると私は、その女を見た少し後、果物売り場の前で俯いて歩いていて、いきなり若い女とぶつかりそうになり、一瞬間近で目と目を合わせて、身をかわして行き過ぎた事を思い出した。

その女は、ちょうど二週間前、乾物売り場の前にいて、いきなり声を掛けてきて、私の心臓を飛び上がらせた女だ。あれは、一体誰に声を掛けたのか。私はその声の方を見て、立ち止まりもせず、直ぐに行き過ぎたのだが、その時一瞬、私は彼女を見て、目と目が合って、確かに一つこっくり頷いたような気がする。知った女に違いなかった。

私は若い男だった。私はその女を、付き合っていた男と別れさせ、一緒に住んで、子供を産ませ、その子供がちょうど十歳くらいだった。私は仕事が終わって、ここで買い物をして、それから家に帰るのだが、彼女も夕餉の支度の買い物がてら、ボールペンを見に来たのだった。

彼女の子供であり、彼女の男は私なのだから、私の子供でもある、その十歳の男の子も一緒に来ていて、母親から付かず離れず、隣のおもちゃ売り場やスポーツ用品売り場を見て回っているのだった。

だから私はそこにいなかった。なぜなら、もしそこにいるなら、私は今より十歳、歳を取っていなければならない筈だからだ。私は、その母子が話しているのを、そこに居ない父親の姿と共に見て取った。もちろん父親は私だ。そして直に家に帰って、三人で晩ご飯を食べるのだ。三人は特に何の問題もなく、ごく落ち着いた毎日を送っているようだった。

　すると子供はそのままなのに、母親だけ、十歳、いや十歳ともう少し若返った。若さ特有のしなやかな身のこなしで、腰を落とし、男の子を両腕で挟み込むようにして捕まえた。若さ特有の抜けるような弾む高い声が、他に誰もいない筆記具売り場に響いた。その声は鋭すぎて、私は、キリキリと胸を突き上げられるようだった。

　私は何処に居るのか。何処にも居ないのか。若い男であるかどうかも怪しい。彼女は付き合っていた男と別れていなかった。いや別れたかも知れないが、とすれば、また違う男と付き合って、そいつと一緒に住んで、男の子を産んで、十年経って、ここに買い物に来ているのだ。

　私は、わざと、前のと少しも似ていないボールペンをつかみ取って、急いでレジに向かった。レジには客は一人も居なかった。いつもなら、レジの前は特設売り場で、訳の分からないものがごちゃごちゃ積み上がっているのだが、ちょうど入れ替えの時期で、そこには棚も台も全く何もなく、傷だらけの白い床

が剥き出しで、がらんとしていた。
　レジの若い女は、名札を見ると見習いで、まだ誰にも似ていなかった。なりはでかいが、まだこれからのほんの子供だった。その不自然にハキハキした対応が、私にひどく疲れを覚えさせた。私は自分が、もう取り返しが付かない程、歳を取ってしまったような気がした。中肉中背の、何度見ても忘れてしまいような女だったが、体重だけは優に百キロはあって、お釣りを貰うには、私はその女を持ち上げていなければならないような気にさせられるのだった。そしてこの先、もう何処へ行っても、こんなような女としか出会えないような気にさせられるのだった。
　駐車場はすいていて、入ってきた時も一台しか止まっていなくて、私は、その一台の直ぐ横に止めた。建物の入り口に近かったからだ。今はそこには、私の車だけで、後一台だけ、物凄く遠い端っこに止めてあるのが見える。なぜわざわざあんな遠い所に止めるのか。それを考えると、息苦しくなった。私は震えながら車に乗って、そこを出て、しばらく走った所にある店の、筆記具売り場に飛び込んだ。本当に、水の中に飛び込むように。
　いや、そこはたまたま筆記具も並べてあるだけで、私はその店に注文しておいた別の何かを取りに来て、真っ直ぐレジに向かっているのだ。一月経っても連絡がないので、確かめに来たのだ。モノはもう、一ヶ月前に入っていて、そ

の時私に連絡したと、太った女のレジ係は胸を張って、自信満々に言うのだった。

　注文したモノは幾つもあって、思いの外、嵩張った。レジ係の女がそれらを束ねて、無理矢理、紙の袋に入れると、袋の下の方が少し破れた。私はそれを慎重に抱えて、彼女は別に胸を張ったのではなく、元々鳩胸なのだ、などと思いながら、そこを出ようとした。

　すると、書籍売り場で、一人ぽつんと漫画雑誌を立ち読みしている、まだほんの子供のようでもある、若い女の姿が目に留まった。白っぽい服を着た細身の女で、本を顔に近付けていて顔は見えなかった。短いスカートを穿いて、脚をぴったり閉じていた。

　私は真っ直ぐ近付いた。近付く程に、惹き寄せられた。不自然なまでに近付いて、何とか彼女の顔を見て取ろうと、覗き込むようにして、彼女の後ろを、摺り足で素早く半周した。気付いた彼女が顔を上げ、私と目を合わせた。目だけが、本当にその目付きだけが、私の子供を連れて、私と一緒に住んだかも知れない女の十年前とまるで違っていた。（二〇〇一年三月十三日）

＊　＊　＊

一日

私は道に迷った。いや、道の上を歩いているなら、道には迷っていない。ただ何処か知らない所を、前に進んでいるだけだ。
何処までも続く森に違いなかった。森は深く、凶暴なまでに、植物以外のものを一切受け付けないようだった。虫一匹まで追い払われ、石ころ一つ、見当たらない。
ずっと奥から、石を切り出すような音がする。どれ程の覚悟を決した森といえども、花崗岩の岩盤までは取り除けまい。そこに、採石場があっても不思議はない。
森の中の道を、なぜ私は進めるのか。道があるからだ。では、どうして道は取り除かれないのか。その道が、採石場に続いているからだ。森を通り抜けるだけだったら、森は一ミリたりとも、道など受け入れないだろう。
いや、岩盤までは仕方ないにしても、そこから石を採ろうとする人間どもなど、あっさり追い払われてしかるべきだ。虫一匹まで拒む森が、そんな奴らに道を切り開かせる筈がない。
進む内に、分かってきた。石を切り出す音を聞いた私が、その石を、ゴクリと一呑みに出来るように思えたからだ。もちろん、口に入る大きさでなければ

ならない。口にさえ入れれば、その石はどれも、極めてまろやかな喉ごしで、そのまま胃の中へ、ポトリと落ちて行ってくれそうだった。どうしても私は、それを呑みたい。だからこうして進んで行ける。道も恐らく、私にしか見えないのだ。

道が終わった。屈強な男が、もろ肌脱いで、電動鋸を掲げ持ち、大木を切り倒そうとしていた。その濡れた木肌の下は、恐ろしく固いようで、唸るばかりの回転刃は、少しも動かない。男は私に気付くと、直ぐ何処かに行ってしまった。鋸は置いていった。

その横に、板が立て掛けられていて、「電動鋸　貸出始めました　一回＊０円」と読み取れる。上には、木の板を張った屋根が出ていた。金を入れる容器は見当たらない。申し訳程度に、後ろに板壁も張られ、朽ちかけた棚板も一枚渡されてある。

私はその鋸を持ち上げた。重くて熱かった。その熱さに促され、足元をふらつかせながらも、男の付けた木肌の傷口に、何とか刃を当てて作動させた。殆ど、背伸びしなければならない程だったが、刃が回り出すと、その鉄の塊は少しも重くなくなり、私の体を浮き上がらせるようにさえした。細かな木屑が舞って、少しずつでも、回転刃は奥へ入っていった。

初めての事で、あちらこちらから切り付けて、無残な切り口でいっぱいにな

った。しかし遂に大木はゆっくり傾いて、なぜかそっと眠りに就くように、音もなく横になっていった。直ぐ次ぎに取り掛かった。途中、鋸が動かなくなると、何処からか、先程の大男がやって来て、何度でも直してくれた。

まだ空までは見えないが、空間が拓けてゆく。しかし、少し根を詰め過ぎた。夜が待ち遠しくなる。手を休めて待った。静かな寝息を立てている何本もの大木を眺める内、私は眠ってしまった。

目を覚ますと、周りは同じ明るさだった。森は、昼も夜も受け付けないのだ。ただ心なしか、切り拓いた筈の拡がりが、狭まっているようではないか。また仕事に掛かった。そして眠くなると眠った。そんな事を繰り返した。

段々と慣れてきて、起きてから眠るまでの間に切り倒せる木の数も、増えていった。しかし目を覚ますと、拓いた土地はそれ程でもない。僅かに拡がっただけだ。私の眠る間に、森は明らかに盛り返していた。倒れた大木は、順にもう土に還っているようで、幾ら切り倒しても、積み上がってゆく事はなかった。

そしてまた目を覚ました。拡がるどころか、狭まったいる。森の奥から、底知れぬ怒りが感じ取れた。途端に能率が落ちた。鋸を動かしている間も、森はじりじりじり私に迫った。直に疲れてしまって、もう起きていられなくなるのだった。

目を覚ますと、切り株は一つもなくなり、無人店舗の屋根も壁も粉々に崩れ、

そこに、ごつごつした真っ赤な太い幹が、捻れて迫り出していた。握り締めたままの電動鋸は、おもちゃのように軽くなっていた。

森は拡がり続け、海岸まで迫った。砂浜を侵し、海に入った。森の木々は水陸両棲だった。海の中を森はどんどん進み、遂にこの星の地表と海底とを覆い尽くした。

別に木を伐りたかったのではない。石を呑みたくて森に入ったのだ。それが今や、どこもかしこも森で、その森からは石ころ一つまで、取り除かれている。石が呑みたい。直ぐにも石が呑めないなら、もう生きてはいけない。体がバラバラになって、飛び散ってしまいそうだ。

私の中には、見掛けは大した事ないが、ものを幾らでも呑み込む穴が開いていて、私は全く、その穴の定める通りに従って、生きてきた。穴は私に、石を呑む事を求めた。私は一日五回、起きた時、昼間、暮れ方、夜、日の変わり目、夜中と、石を呑んできた。しかし森に入ってからは、すっかりそれをやめていた。一日がなくなっていたからだろう。そして今も私は、昼も夜もない森の何処かにいる筈だ。しかしどうしても、石を呑まずにはいられない。

私の目にこそ見えないが、或いは、森がこの星を全て覆ってしまえば、森は、この星の昼と夜を、そっくり受け入れるしかないのかも知れない。私の中の穴は、呑み込むものを激しく求めていた。

何も手に出来ない私は、せめて私の体を呑み込んで、少しでも穴を埋めるしかなかった。私は私を呑み込んだ。良く噛んだぬるい水を、ひりひりする喉に一気に流し込むような喉ごしだった。そして、穴の中に落ちていった。先ず目がゆくのは、それまでに私が呑んだ全ての石だった。それは、一蹴りで丸ごと崩れ去る程の、ほんの一盛りに過ぎなかった。

　穴には色も形もなく、何処までがどのように穴であるか、まるで分からない。だから中に居たのでは、ここは穴ではない。外から見て、私の中に、石を呑んででも、埋めなければならない場所があると思えてしまうから、穴なのだ。

一歩踏み出すと、途端に足を取られた。どこもかしこも、石が転がっているに違いなかった。森から取り除かれた、この星の全ての石が、ここにあるのだ。私が呑んだ石など、全く取るに足らない訳だ。

　欲しかった石が、無尽蔵にある。私は早速、その一つを拾い上げて呑んだ。締め付け、引き裂き、絞り上げるような喉ごしは全くひどいものだが、何時もこんなだ。久し振りのそれに、私は、石のように固まったまま、身を捩るしかなかった。そして石は、私の腹に収まるのでなく、森の中の何処かに届くようだった。とすれば、直にそれはまた、森から弾き出され、ここら辺に落ちてくるだろう。

　しかし、この星の全ての石を集めても、穴は少しも埋まらないのだ。同じよ

うな石ころが転がっている星は、ここからどれだけ隔たった所にあるのだろう。そんな星が見付かっても、どうやってその石を、この星に持って来られるだろう。（二〇〇一年三月十五日）

*　　*　　*

ゲーム

髪の長い男だった。癖だろうが、腰を下ろしている時など、必ずじっと俯いている。右の頬と耳くらいしか見えない。顔を晒したくないかのようだ。

確かに、男の眼は何時も充血していて、眼の下には、誰にでも分かる、濃い紫色の隈が、三日月型にくっきり浮き出ている。どうでもいい相手に、一々それを指摘されたり、顔を覗き込まれたりするのが、邪魔くさいのかも知れない。

しかしひとたび立ち上がると、大柄でがっしりしていて、仕事場を、黒く波打つ髪を揺らしながら、大股で歩き回る姿は、まるで彼がここ全体の支配者であるかのようだ。

彼とは馬が合うつもりだ。仕事でも、別に彼とチームを組んでいる訳ではないが、よく一緒になって、ほぼ必ず、すらすらと事が運ぶ。向こうがどう思っ

ているかは知らない。互いに、仕事の事しか話さない。
　さて、別の男に追い回されている。そいつが近寄って来るのが目に入っただけで、直ぐに目を背けるので、そいつの顔や背格好すら禄に思い出せない。その日も、それとなく近付いてきた。早速私は、逃げ出す。手が空いていても、何かやりかけの仕事を、無理にでも思い付く。
　その日は、髪の長い男が居合わせた。柱の陰の隅っこに、隠れるようにして、小さな椅子に腰掛けていた。やはり俯いて、カタツムリのように背中を丸め、どうでもいいような資料を読み返している。真っ黒な髪がだらりと掛かって、顔は全く見えない。首が少しだけぶれて、尖った右目が現われた。それは真っ直ぐに、こちらを見ているには違いなかった。
　しかし彼には、誰かが誰かを、追い回したり追い回されたりするのが、ただの気晴らしのゲームのように見えているのだろう。他人同志の気晴らしなど、全く係わりたくもなさそうだった。冷たい目は、じっと動かなかった。
　確かに、追っ掛けられていると、つい表情が緩んでしまう。いや、わざとそうしているのだ。嫌そうな顔を見せれば、ますます奴のやる気を刺激しそうだからだ。逆に、ニコニコした顔を、見せ付けてやるようにして逃げ回れば、少しは奴の頭を混乱させ、神経を参らせる事にもなるんじゃないか。ざまあみろって気分にも、少しはなれる。

すっと歩調をゆるめ、何事もないかのように、髪の長い男の後ろに回り込んだ。そこは全く柱の陰で、隠れんぼをしてて、格好の隠れ場所を見付けたようなものだ。何か助けても欲しかったが、何もしてくれなくても、彼がそこに居るだけで、効果はある。追ってきた方も、彼の尖った冷たい目と向き合わされて、やはり何事もないかのように、すっと向きを変えて、取り敢えずは、立ち去るような振りでもするしかないだろう。

いきなり背中に衝撃を感じた。その柱の陰には、確かにドアがあった。誰も滅多に出入りしない。去年の途中から入った、私より二つ上の同僚の女の子の、のんびりした甘ったるい、馬鹿でかい叫び声が、頭の直ぐ後ろから聞こえた。

「ああ、びっくりしたあ…」

と、そこまでは憶えている。前につんのめって、柱の角に、したたかおでこをぶつけたに違いなかった。

気が付くと、正方形の天井の、薄暗い部屋の床に寝かされていた。脇に、髪の長い男が俯いて腰掛けていた。ずっと黙っている。後は誰もいない。ぐらぐらする頭で起き上がり掛けると、彼の声が静かに聞こえてきた。

「もうお前に仕事はない。みんなおれが引き継いだ。」

彼は、丸めていた背中を反り返らせ、垂れていた髪を、後ろに投げ捨てるように振り払って、何処か高い所を見上げた。そんな角度の、しかもすっかり露

わな、彼の顔を見るのは、初めてだった。思いの外、ふっくらと肉が付いていて、何時ものシャープな感じとは、まるで違った。いや、それはただその形だけで、そこから受ける感じは、シャープ過ぎて、それを突き抜け、ギラギラしたものだった。

「お前、おれの兄貴を、散々、苦しめてくれたな。ここんとこ、もうずっと、奴は何も食ってない。夜はずっと外をほっつき歩いてて、殆ど横になってない。水だけで生きてる。しかもその水に、おれが栄養剤を、色々混ぜ込んでやってるから、ああやって、ずっと歩いてられる。

仕事だって、お前の顔が見たくて、出てくる事は出てくるが、段取りから何から、すっかり忘れてる。まるで使いもんにならん。全部おれが、しょってる。お陰でこっちまで、寝る間がなくなった。どうせしょい込むついでだ、お前の分も、しょってやる。どうって事ない。

だけどおれは、お前の体を兄貴に渡そうとは思わん。おれは兄貴みたいに、アホみたいに女に惚れ込んで、苦しんだりはしない。女は目障りだ。もっとも兄貴も実は、お前が目障りなんだがな。その辺は似てる。だけど、兄貴はそれで、苦しまなくちゃいけない。奴は、はなから、そうやって身を焦がすように出来てるんだから、しょうがない。

おれは違う。目障りな程、どんどん醒めてく。女の事だけじゃない。そんな

の、どうだっていい。だけど女のせいで、おれのものが、おれの世界そのものが醒めてくんだ。クソつまらん話だ。」
言ってる事が分からないが、その夜、私の体は、髪の長い男に好きなようにされた。頭がぼんやりしたままでは、幾ら乱暴にされても、どうしようもなかった。
次の日、仕事場に行くと、なるほど仕事は綺麗さっぱりなくなっていた。誰かを手伝おうとしても、誰も自分の仕事を他人に分け与えるようなお人好しは、ここには居なかった。仕事がないのは、髪の長い男が兄貴と呼んだ男との二人きりで、結局二人は、一日中、仕事場である筈の場所で、追っかけっこをする羽目になった。幾ら追い回されても、昨日までなら逃げ込めた仕事がないのだ。誰の邪魔にもならず、何の差し障りもなく、もう奴は何一つ気に掛けず、心ゆくまで追っかけるのだ。髪の長い男は見向きもしなかった。
笑顔を見せ付ける余裕などなく、まなじりを決して、全速力で走り続ける。そのさぞかし必死の形相を、同僚達は、時々盗み見るだけで、余り興味もなさそうだった。水に混ぜる栄養剤とやらを、分けて欲しいくらいだ。食いもせず、眠りもせず、何処からこんなエネルギーが出てくるのか。兄貴って奴は、全く疲れ知らずだ。
しかしなぜか、奴にすっかり捕まってしまう事がないのだった。必ず間一髪

で、奴の脇を擦り抜け、また膝をがくがくさせながらでも、走り出せてしまう。いっそ、押し倒されてしまった方が、楽じゃないか。と思いながらも、足が動くからには、止まる訳にもいかないのだった。

みんなの一日の仕事が引ける頃、訳が分からなくなって、気を失うようだった。

目が覚めると、昨日と全く同じで、髪の長い男の何もない部屋の床に、私の体は横たわっていた。体中が痛くて、殆ど動きが取れない。それを見ても、男は一言も口を利かなかった。ようやく近付いてきて、後は、なすがままだった。

次の日、仕事場に行くと、また同じ事が待っていた。なぜ出てきたのか。それが分からないのだ。気が付くと、制服を着ていて、後ろを振り返っては、兄貴との距離を測りながら、もう走り出している。そうか、ひょっとして、兄貴と同じように、髪の長い男から、栄養剤入りの水を飲まされたに違いない。だからまた、こうして走り出せるのだ。

しかも、栄養剤の加減については、髪の長い男は、もうそれを熟知しているのだ。ちょうど一日の仕事が終わる頃、その効き目が切れて、二人一緒にぶっ倒れるようにされているのだ。

後は想像だが、多分髪の長い男は、二人を仕事場から担ぎ出し、先ず私の体を自分の部屋に投げ込み、次ぎに兄貴の体を、近所の公園にでも持っていって、

目を醒まさせ、決まった量の栄養剤入りの水を飲ませて、長い夜の散歩に送り出すに違いないのだ。（二〇〇一年三月十七日）

＊　　＊　　＊

小説

形のない広いプールで、立ち泳ぎをしていた。何処かへ泳いで行くのは、危なすぎる。何があるか、分かったものではない。確かに、そこそこ見晴らしは利く。だからと言って、うっかり、その見えている直ぐそこへ一掻きでも泳いでしまったら、そこはもう全くプールでないのかも知れない。

水面など見せ掛けに過ぎない。もしそこが岩場なら、岩の中に閉じ込められてしまう。猛獣の檻なら、食い殺されてしまう。そこが古い腕時計なら、その僅かな隙間の中で、時を刻む音を気が狂うまで聞かされる。もしそこが一枚の紙なら、インクのシミのようなものになるしかない。しかし、水にすっかり体の熱を奪われる前に、何とかしなければならない。

見上げる直ぐ目の前に、人の顔の笑い皺のような波をぼんやり描いた、暗く光る水面がある。もう首まですっかり水の中なのだ。ただ前を見ると、先はず

っと、何処まで進んでも、ただ水ばかりであるようだった。しかし幾ら体を前に傾けようにも、体はすっかり強ばって、立ち泳ぎ以外の体勢は作れそうにない。

もう諦めて、この場で水から上がってしまおう。誰か手を貸してくれるだろう。生温かい水が来た。時計と反対回りに、上半身がぐるりと大きく回って、揃えた脚が持ち上がり、腰がどのようにか捻り回されて、体が逆さまになった。そしてそのまますっかり水の中で、水面の裏側に足を付けて、一歩一歩、歩いて行けそうだった。歩き始めると直ぐに、逆さまなのは、この体ではなく、水と空気だと分かった。

途端に、周りの水が一斉に滝のように落ちた。水面の裏側に打ち込まれた鉄の杭のように、この体だけは動かなかった。水だった所に真下から空気が噴き上がり、空気だった所に水が満ちた。やがて落ち着いて、水面の裏側は、水面の表になった。

そこは、垂直に切り立つ崖に周りをすっかり囲まれた、膨れて丸くなりかけた十文字のような形の池だった。私はその水面にではなく、その池が遥か下に見下ろせる、巨大な穴の縁に居た。

誰かに呼び掛けられたような気がして、後ろを振り返った。青々とした草原の中を道が延びていた。舗装はされていないが、白くつるつるに踏み固められ

ている。左右が高く、真ん中ほどU字に窪んでいる。ただ人が歩くだけにしては、随分と幅が広い。

しばらく行くと、道はそこだけ左右に大きく脹れる。しかしそこは十字路ではない。交叉する道のように拡がり掛けて、左右とも直ぐに途切れる。そしてそこを、土産物屋がびっしり取り囲んでいる。しかし、更にその向こうはと言うと、左側は、何処までも剥き出しの砂地だし、右側は、尖った高い草が生え放題の下り斜面でしかなく、人を惹き付ける景観などは、まるで見られない。

どうしたものか、しばらく立ち止まって見ていると、その左右の脹らみまで足を伸ばす者はなく、その見せ掛けだけの十字路に差し掛かると、誰もが俯き加減で、急いで通り過ぎようとする。彼らは皆、自分の用だけをさっさと済ませたがっていた。彼らに倣って自分の用を思い出そうとしたが、何も出て来ない。

店を見て回ると直ぐ分かるが、土産物は滝尽くしだった。両腕をいっぱいに拡げたくらいの、滝とその周りの岩場を象った模型が目に付く。滝の絵も多い。ナイアガラのような大瀑布から細長いものまで様々で、まるで滝の見本市だ。なぜ滝なのか。立派な立て看板にちゃんと書いてある。

この国最古の文献資料に拠ると、「嘗てここからは、雄大な滝が非常に形よく見えたらしい。道を行く人が皆ここで立ち止まって、休息がてら、それを眺

めてゆくので、何時の間にか、ここだけ道が拡がってしまった。その滝はもう見られない。名残を惜しむかのように、ただ道の脹らみだけが残った」とある。つまりその資料が書かれた時点で既に、滝は幻の滝だったのだ。千年以上前の資料だそうだ。

　滝は一体何処に見えたのか。右も左も、何処までも平地ばかりで、滝が出来そうな所などない。しかし地質調査によって、ここに嘗て、道を横切って、物凄い段差があった事は知られている。突然地面の色が変わるのだから、昔の人も気付いていたのかも知れない。更に最近、涸れた川の跡が発見された。そればかりか、その下を、大変な地下水脈が、大河のように流れている事も分かってきた。

　研究が進めば、滝のあった時代の川幅から水量まで分かって、土産物の滝の姿も、統一されるだろうか。

　しかし既にその千年前の資料にも、「もう滝が見られなくなって久しいのに、道の脹らみだけが何時までも残るのは、奇異な事である」とも書かれてある。その奇異な感じが、そこを名所にして、その奇異な感じが失われるのが惜しいので、今日までも、道の形が保存されてきたに違いないのだ。

　とするなら、滝の土産物ばかりなのは少しおかしい。例えば、失われた滝をぼんやり見上げる人の姿の土産物だって、あっていいのではないか。ただ確か

に、何もない所に、滝の土産物ばかりが、これでもかこれでもかと並べられているのは、十分に奇異ではあり、それでいいのかもしれない。

しかしただそんなものを奇異と感じただけで立ち去るのは物足りない。古い時代の人達にすら想像するしかなかった、滝の姿を想像し、その滝の音を耳に響かせ、水煙の立ち方まで見て取ってみよう。なるほど、そういう気になって土産物を見て回ると、その稚拙な作りが却って、足らないところを補って、色々に滝の姿を思い浮かべさせてくれそうだ。

更に立て看板には、その脹らみが、飛行機の翼のように左右対称なのは何故か、についても触れてある。二百年くらい前、滝は実は、左右に二つあって、片方が片方に惚れて、滝が身を捩らせたり、それが男女の姿になってどうだこうだ、とか言う小説が評判を取って、それで両側に脹らませてしまったそうだ。二百年前の観光客には受けたんだろう。別の説では、また少し古い時代に、この道を挟んだ左右二つの村が互いに譲らず、結局、きっちり同じ大きさに測って、両側に脹らませてしまったのだそうだ。

そんなものを読んでいる内に、段々馬鹿らしくなってくる。滝など初めからなかったのだ。最古の資料に書かれた言い伝えにしたって、作り話ではないか。千年だかの昔、たまたまそこだけ草の生えにくい所に、道が引かれたに過ぎない。今更、地下水脈が何だと言うのか。

しかしそうしてまた、ふと遠い空に目をやると、そこに高々と滝の姿があった。想像を膨らませただけの滝など、比べものにならない。決してありはしなかったと思えて初めて見えてくる滝であればこそ、その姿は、恐ろしくくっきりと、私の前に立ち現れた。求めていたものだ。この滝の中へこそ、身を投げたかった。（二〇〇一年三月十九日）

＊　　＊　　＊

幸福

グラグラ揺れる壺を三つ並べて、その前に座っていた。恐らく私は、下手くそな蛇使いだった。この仕事を選んだのは、蛇に噛まれて死にたかったからかも知れない。昔の事で、思い出せない。

窓からは真っ昼間の強い日差しが、波を打って射し込む。走っている大きなバスの二階だった。私の前には、三十歳くらいの女が独り、長く白い脚を突き立てるように組んで、豹柄のふかふかの椅子に腰を沈め、紅茶を啜っている。バスはずっと、その女の庭を猛スピードで走っている。女はかなりな資産家なのだ。

笛を吹いても、息を吐く音がスースーと抜けてゆくだけだった。真ん中の壺の蓋を開けると、コブラが出てくる筈だが出てこない。覗くと空だった。私は慌てて、小さな鈴をポケットから取り出して振った。そうしながら右の壺の蓋を開けた。サソリが出てくる筈だったが、もぬけの殻だった。左の壺を開けた。毒蜘蛛はいなくなっていた。

死んだようなままの女の目付きに耐えきれず、私は窓を開け、大きく身を乗り出した。窓枠を掴んで腕を突っ張った。背筋を伸ばし、足を揃えて床を蹴った。体はやっと、逆さまに窓から落ちた。私は、砂地を激しく転がった。

コブラとサソリと毒蜘蛛は、私の知らぬ間に、抜き取られていた。私が居なくなると、バスの冷蔵庫の中から、給仕がそれを取りだしてきて、女の前で手際よくさばき、一皿に盛って、女に差し出した。女は、自分の右の指で、輪切りのレモンを折り畳んだ。その搾り出た汁を不器用に振り掛け、その生の細かなり切り身を、左の指で摘んでは、しゃぶり付いた。

庭と言っても、この辺りはもう、ただの山野だった。何処をどう探してよいものか、私はただ、前へ前へ進んでゆくしかなかった。周りを山が取り囲む、盆地の真ん中だろうか。山々の尾根が続く。その見渡せる手前の、ぽつんと投げ出されたような小さな山を、登っていった。濃い緑の葉の木々がびっしり生い繁る。しかし小山と見えたのは初めだけで、木々の間もスカスカになり、登

れど登れど、更に高いその先が見えてきて、切りがない。振り返ると、遠くに小さく、剥き出しの白っぽい地面を、砂埃を上げて走るバスが見えた。それは一度きりで、後、何度見下ろしても、バスを見付ける事は出来なかった。

灌木がぽつりぽつり生えるだけの、見晴らしのいい所に出た。乾いた風が熱を孕む。笛の音が聞こえてきた。蛇使いだった。山のこんな高い所なら、滅多に邪魔も入るまい。頭には何も被っていない。独りで練習しているようだ。難しい技を身に付けようと、すっかり集中している。私は手頃な石を拾い上げ、後ろから近付いて、奴の脳天目掛けて打ち下ろした。死体から素早く笛を取り上げて吹いたが、やはり満足な音は出なかった。

篭の中のコブラが、開いた口を真っ赤な菱形に突き立てた。サソリと毒蜘蛛が、のっそり篭を出た。距離を取って向き直り、私に挑み掛かるようだった。私は笛を捨て、頭を抱えてしゃがみ込んだ。ここで死ぬ運命か。どうせなら、あの女の見ている前で死にたかった。首筋から、体の熱が逃げてゆく。

しかしここも、女の土地には違いない。死んで骨になって、誰にも見付からずに、ここに居られるなら、それもいいかも知れない。

何も起きない。目を上げると、奴らは死んだ主人に食い付いて、血を吸っている。しばらくして動かなくなった。拾った木の枝を使って、簡単に奴らを篭に戻す事が出来た。私は元来たと思われる道を、ぐんぐん下っていった。陽は

だいぶ傾いて、盆地の底全体が、金色の逆光の下に埋もれるようだった。バスを見付けた時は、もう真っ暗だった。高い焚き火を先ず見付けたのだった。その脇で、バスの片面が、闇に浮き出ていた。

女は、ぴかぴかに磨かれたマホガニーの揺り椅子に腰を下ろし、ワイングラスを両手で持って、腹の上に乗せていた。給仕が側に立っていた。運転手は、黒い蜘蛛のようにバスの側面にへばり付いて、そこをゴシゴシと磨いていた。

給仕は私を見付けると、素早く寄ってきた。そして直ぐ私の持っている篭を見咎めた。これは＊＊さんの篭だ。どうしてお前が持っているのか。

「知らない。これは私が骨董屋で見付けて、ちゃんと金を払って、手に入れたものだ。」

給仕は片方の頬を引きつらせて、笑い顔を作った。これは、名うての蛇使いである＊＊さんが、何時も持ってた篭だ。下手な言い訳はするな。確か、篭の底に＊＊さんの名前が書き込んである。見せてみろ。

私は何も言い返せず、そっと篭の底を覗き込んだ。そこには、書いた覚えのない私の名前が書かれてあった。

「これで分かったか。これはオレの篭だ。」

言葉の勢いに任せて、咄嗟に掴み掛かり、多分、たっぷり二、三分は掛けて、給仕を殴り殺した。その間ずっと、運転手が、給仕を羽交い締めにしていなか

ったろうか。気のせいか。どうでもいい。私は、息が上がっていた。とにかく、ぐずぐずしていたくなかった。

早速女の前で、芸を披露する事にした。上半身裸になると、汗くさい埃まみれのシャツ一枚が、軽く掌に収まってしまう。それを火に投げた手を篭に突っ込み、コブラを引っ張り出して腹に乗せた。直ぐまたサソリと毒蜘蛛も掴み取り、左右の頬に貼り付けた。片手で鈴を鳴らした。笛はなかったので、即興で訳の分からない歌を歌った。歌のつもりだった。目を閉じてそれを聞く内、妙に自分が幸福なような気がするのだった。こんなのは、生まれて一度もない。

しかし何時まで経っても、噛み付いて来ない。目を開けると、血塗れでぐちゃぐちゃの給仕の顔に食らい付いていた。血を吸いたいだけ吸ったのだ、サソリと毒蜘蛛はパンパンに脹れて、身動きも取れず、もがいていた。蛇は、飛び出た目玉を二つとも呑み込み、更に、なくなった目の奥へ首を突っ込んだりしている。しばらくして、奴らは打ち揃って篭に戻り、静かなところをみると、寝てしまったようだった。

為す術もなかった。その間、女は一言も口を利かず、ただ眉を顰めたり、その顰めた眉を、ゆっくりゆっくりゆっくりと元に戻したりしていた。私は、腰を落とした体の、冷えてゆくに任せるしかなかった。皺もたるみもない、しなやかそうな白い体だった。

直に女は、椅子をその場に残し、バスへ引き揚げた。運転手も後に続き、しばらくして中の灯りが消えた。焚き火も燻るだけだった。私は、そこでそのまま夜を明かした。

全くの曇り空だった。それがすっかり明るくなって、やっとバスの中に、ゴソゴソ動く気配がする。ふと見ると、給仕の死体の脇腹の下に、笛が見えた。折れているようだった。私は這って行って手に取り、吹いてみた。ピーと綺麗な音が出た。早速篭の中が、がさごそと動いた。私は素早く蓋を払い除け、思い切り笛を吹いた。

奴らはひどく興奮して、或いは動揺して、或いはもっと別の、奴らだけの感覚に駆り立てられてか、私に襲い掛かってきた。首筋に直ぐ、深く小さな鋭い痛みが走った。それは直ぐに、痺れるように暖かく拡がった。私の意識は薄れているに違いない。笛の音色が、耳の中で、何処か掴み所のない、つるつるした虚ろなものになっている。

二人は外に居た。運転手は背中を見せ、女の体は少し斜めだが、私の方を向いていた。静まり返った朝の空気の中で、笛の音はかなり耳障りな筈だ。しかし女は、禄にこちらを見もしない。運転手に色々な指示を出しているのだ。二人分の仕事をこなさなければならない運転手は、一々メモを取っていた。一瞬、女は私と目を合わせた。今、女がしゃべっているのは、私の始末についてだろ

うか。
　直ぐ側で、ただ見られてばかりいるより、少し離れて、私の方から、女の全身を眺めるのも悪くない。彼女の体の柔らかそうな肉付きを、好きなだけ目に焼き付けようと出来る。余り近くではこうはいかない。（二〇〇一年三月二十三日）

＊　　　　＊　　　　＊

ゴミ出し

　卵を買いに出て、不意のその短く高い声に振り向いてしまった時から、私は金色に、或いは、金色そっくりの濃い緑色にでも、輝き出していたのだろうか。聞き覚えのある声だった。
　いや、その声を上げた白い体を認めて、輝くより先ず、私は溶け出していた。いや、それも違う。私は、もう前から疾っくに溶けていて、ただそれを、今はっきり知らされただけだ。そして、決してもう元に戻らないのを、すっかり溶けたまま、どうしようもなく、直ぐに、受け入れなければならないのだった。
　いや私は、そう知らされ受け入れた時には、私とはまるで別の、ドロドロに

溶けたような形のまま、隅から隅まで固まっていた。ただ固まったにしては、空気のように軽く、透き通っていたに違いない。なぜなら、その溶けた形の中が、私の周りとすっかり同じ明るさに照らされてしまうのを、嫌でも見て取らなければならなかったのだから。

それでやっと私は、その声が、私への呼び掛けとして、そっくり私の耳に投げ込まれているのを理解した。全く、強いられるように、理解した。そして、そう私に理解させたものが、私の体を、或る一色に輝かせもしたのだ。

いや、輝いたのは私ではない。むしろ私が、輝かせたのだ。何を。見ると、私の周りの全てのものが、一色に輝くのだった。そして私の姿だけが、その輝きによって、消し去られたかのようだった。

私に声を投げた白い体は、私が振り返って、私の目に自らの姿が晒されたのを確かめて、意に適ったかのように笑みを湛えて、直ぐにその場を立ち去った。

いや、これも違う。居なくなったのは、私の方だ。白い体はその時、グリンピースの缶詰と一緒に、何だか分からない、もっと小さな缶詰の缶を、グリーンピースの缶を持った同じ手の指の間に挟んで、スーパーの黄色いかごに入れた。私はその小さな缶の中に、すっかり詰められていなかっただろうか。

私は、そうして持ち去られた。しかしはた目には、私は何の変わりもなかった。私は生身のまま、そこに突っ立っていた。

次の日から、生身の方の私は、その白い体に、影のように付き纏わないではいられなくなった。それが何処で何をしているか、全く知らない訳でもなかったが、そこへ出向いても、必ずそれに会える訳でもなく、大体は遠くにその姿を見て取れるくらいで、たまにすれ違っても、買い物の日とは打って変わって、それは挨拶も返さないのだった。

しかし生身の私と言ったところで、私はもう、すっかり持ち去られているのだ。生身でありながら、影でしかないような、何ものかであるしかない。眠る事も、食べる事も、しゃべる事も出来ない。何かに触れられはしても、触れられる事はない。影であるなら、自分からは動けない。動けたとしても、動きたくもない。

生身の私は、少しずつでも、その生身を削ぎ落として、自らを影に近付けてゆくしかない。或る、寒い筈の、熱くて汗の止まらなかった夜、私は遂に生身を削ぎ終えた。或いは、その生身を、私でなくした。

さて、それから何年かして、冷蔵庫の奥に、全く買った覚えのない、賞味期限の過ぎた缶詰が見付かる。こんな物の事で、同居人とごちゃごちゃ言い合う前に、さっさと捨ててしまおう。分別ゴミに出すので、中を開けなければならない。蓋を開けて中を覗くと、一瞬缶の中が、見慣れない色に輝いたかも知れない。確かにそう見えたようでもあるが、それは多分、最近悩まされている貧

血のせいだ。
いや、実際そこで貧血の症状を起こすのだから、貧血には違いない。その怪しいままの目で、缶の底をじっと見詰めてしまうと、粘り気のありそうな汚い水のようなものが、うっすらとこびり付いている。たとえゴム手袋をしてでも、そんな所に指を突っ込みたくない。自分がやらないにしても、誰かの指がそれを掻き出すのを思い浮かべるだけで、汚い感じがする。
分別ゴミの日、同居人が、他の空き缶と一緒にそれをポリ袋に入れようとして、その缶の底が妙に輝いているのを見付ける。変わったものを見付けると、しばらくそれを取っておく癖でもあったのか。それとも、中が洗ってなくて、もう今日は時間もないし、次のゴミの日までに洗う事にして、取り敢えずそれだけ除けて、他の缶だけ捨てる事にしたのか。
やる事が他にいっぱいある。そんなちっぽけな空き缶など、一々憶えていられない。そうして何時までも捨てられずに、ポリ容器の脇に、それはほったらかしにされる。目には入っているのだが、それをどうしようとは誰も思わない。埃を被り、泥を被り、ますます目立たなくなるが、目立たなくなる程、何故かそれは、そこになければならないようにも見えてしまう。
年末の、最終のゴミ出しの日、結局それは、洗われないまま、何時もより多い、綺麗に洗われたピカピカの他の空き缶に混ぜて、捨てられた。

それを境に、二人の仲が悪くなった、と私は思いたい。別れるところまでは、いかない。別れるのは、もっとずっと先だろうか。別れそうで、別れないのかも知れない。仕方のない事だ。

一方私だが、もう私さえ、私の事など忘れてしまいそうだが、缶の蓋が開けられて以来、少しずつ少しずつ空気の中に溶けていっていた。最初に溶け出た私など、もう風に乗って、地球の裏側を漂っているだろう。しかし、そこの景色を見られる訳ではない。かと言って、ゴミ処理場の景色が見えるのでもないなら、缶詰と一緒にいるのでもなさそうだ。すっかり溶けて出たのかも知れない。その後の二人がどうなったかも、まるで見えないし、見たいとも思わない。

私はもう、何処にもいないのだろうか。それとも、私に分からないだけで、私はもう他の何か、そこら辺に転がっている、尖った砂粒か何かだろうか。

いや、私は相変わらず、そこに居た。あの声を耳にした瞬間の中に、一つも変わらず、閉じ込められていた。何年も、缶の底にこびり付いて、冷やされていたのは、ただの汚れた水でしかなく、私ではない。敢えてこじつけるなら、缶の底に見て取れたものは、それを見た二人の、私についての記憶の残り滓だろうか。しかし、その妙な輝きが何であったかなど、彼らには死ぬまで分からず仕舞いだろう。

つまり、あの声は、ただ私だけのものなのだ。いや、あの声こそ、遂に私が

見出した、ずっと変わらない私そのものの姿ではないだろうか。その後に続いて起こった事柄は、この世界がつつがなく回ってゆくための、言わば後処理であって、そんなものを見せられても、私には余計な事だ。（二〇〇一年三月二十五日）

＊　＊　＊

砂遊び

今日の営業は一つも収穫がなかった。ダメそうな日は粘ったりせず、早めに切り上げて、家に帰る事にしている。

玄関の前で、落ち窪んだ点のような目を青っぽく輝かせた、上半身裸の屈強な男が、彼より背丈のある、棒のような長い胴体の白い鳥をきつく抱き抱え、その羽根を毟りながら、脇目も振らず、その肉を喰らっていた。鳥は苦しむどころか、恍惚の表情を浮かべ、若い女のような喜悦の声を、人のウチの前で、高らかに響かせている。

私は黙って素通りし、鍵を開けて、さっさとウチに入った。買ってきた食材を袋から出し、鍋に入れて、火を掛けた。油の匂いが鼻に付く。鍋の中を覗い

ただけで、私は胃袋ごと吐き出しそうになる。これは、私が食べるものではない。いや、そもそも私は、モノを食べたり食べられたりする世界から、遥か彼方に放り出されていた。

それでも腹には、胃だの腸だのが居座っている。それならまだ私は、その獰猛なケダモノの意地汚い要求の、言いなりになるままなのか。私はそのケダモノの飼育係か。飼育係と言っても、実際は、その奴隷のようなものだ。そんな真似は、もう沢山だ。

それとも、飼われているのは私の方だろうか。腹の中に籠もったままの、何一つ出来ない、愚鈍で無能な、グニャグニャの長いクダが、私の主人で、私は、それに飼い慣らされているペットだろうか。食い物は全て、そのご主人の要求のお陰で調達されているのであって、その仕込んだ食い物を、お情けで餌として貰って、大人しく生き延びているのが私なのか。

私はウチを飛び出た。外は真っ暗で、強風が、様々に向きを変えて吹きすさぶ、砂嵐のようだった。私はそれに逆らって暫く進み、どこだか知らないが、そこを狙い澄ましたかのように倒れ込み、ヒビの入った独楽のように転げ回った。穴という穴から砂が入ってきた。最後の息を吐くと、それが合図のように、膝を折った体が、真っ直ぐに立った。腹を張り裂くばかりの、腹一杯の砂が、口から吹き出した。ホースから水が激しく射出するようだった。

砂の破壊力。何でも削り取る。私の体は、上の方から、削れては飛び散った。胃も腸も粉々になった筈だ。

夢心地で私は、緩やかな水の流れの中に浸かっていた。腹の中のケダモノは、綺麗さっぱりなくなっていた。口すらも、尻の穴までも、なくなっていた。

上体を起こすと、水は消えるように引いて、空気は乾いていた。口の辺りに手をやると、穴が開いている。つまりは口ではないか。立ち上がって、尻の割れ目に指を這わすと、穴がある。つまりは尻の穴ではないか。しかし、それまでとは違う。二つの穴は、全くただの丸い穴で、同じ大きさだった。

立ち上がると、砂が一本の筋を引いて、尻から漏れてゆくのが分かった。腹がおもしろいように凹んでゆく。それが終わると、私は、開けっ放しの口の中に指を突っ込んだ。粘膜が、綺麗さっぱりなくなっているようだった。その手触りは、乾燥した皮膚と同じで、毛穴から毛が生えているのさえ分かった。そのまま口の中に手が入り、腕を押し込むと、腕もすんなり入っていった。喉も、その奥までも、粘膜は全て削り取られ、普通の皮膚で覆われているようだった。

口から一つ息を呑むと、その息が冷たいまま、胸の奥を降りていって、私の体温で少しずつ温められながら、真っ直ぐ尻の穴へと降りて、そこから、何の抵抗もなく出て行く。つまりは、私の体の中には、一本の真っ直ぐなクダが通っていて、その皮膚の表面からは、暑さ寒さまで感じ取れるのだった。

初めは、少しも腹が減らなかった。何か物を口にしようとも思わなかった。皮膚に食い物を擦り付けても、気持ち悪いだけだろう。

しかし、四、五日もすると、無性に何か腹の中に入れたくなるのだった。私は砂を呑む事にした。なぜ砂なのかは、分からない。新聞のチラシを四つに折って開き、そこに、近くの公園の砂場から拝借してきた砂を、よく洗ってから入れ、上を向いて、それを口に流し込んだ。

砂はおもしろいように、胸の奥を過ぎ、腹を過ぎ、シャーッと音を立てて、尻から流れ落ちた。子供の頃の砂遊びのようだ。次は、腹筋に力を入れ、尻の筋肉も絞って、出来るだけ勢いよく、一気に砂を流し込んだ。喉ごしというようなものはないが、それでも少しチクチクはする。今度は、しばらくは、中で持ち堪えた。もちろん、重力には逆らえない。チョロチョロと漏れて、直になくなってしまう。

そんな事で、体がもつ筈はない。みるみる痩せて、自分が一本の細長い筒のように感じられた。しかも、喉から胸の奥辺りがひりひりし出した。粘膜でなくても、やはり砂を擦り付けられていては、皮膚を傷める。色々考えて、砂からビー玉に替える事にした。歩くたびに、ぎしぎしと、ガラスとガラスの擦れ合う音がする。

或る日、鏡の前で口を開けると、赤みがさしている。皮膚が皮膚でなくなっ

て、元の粘膜に戻ろうとしているのか。お米は黴が生えていたが、久し振りにそれを炊いて、試しに少し呑み込んでみた。皮膚にねばねばのご飯がくっつくようで、嫌な感じだ。腹の中はまだ、普通の皮膚のままのようだった。

さて私は、料亭に食材を卸す業者だった。コンクリートで出来た、巨大なサイコロのような真四角の建物の、北側のたった一つの出入り口から、何時ものように、切り分けられた鳥と魚の生肉の入った箱を持ち込んだ。

建物の中は、やはり真四角に細かく仕切られていて、所狭しと、夥しい数の赤ら顔どもが、どれも臭い口を並べ立て、狂ったように、ものを飲み食いしていた。

帰り掛けに、トイレの鏡で、また口の中を覗いてみた。ますます赤くなっていて、喉の奥まで、さも粘膜っぽい、濡れてつるりとした艶が、見て取れるようだった。

何とか、くい止められないものか。幾ら痩せ衰えても、やはり、食い物に繋がれる生活には、絶対に戻りたくない。私は、その赤々とした小さな艶を呪った。腹の中でまた、あのケダモノが息を吹き返し、何時、食い物を要求し出すかと恐れた。ビー玉が次第に喉を通らなくなった。砂など全くダメだった。

そして遂に、恐れていた通りになった。私は打ちひしがれて、少しヤケを起こして、鳥の生肉をそのまま口に入れてやった。しかし、それを噛む気には全

くなれない。第一、歯がない。そのまま吐き出した。

　また色々考えて、替わりにキャベツと人参を絞って飲んでみた。その滋養分が、体の中に染み渡って行くのが分かった。そうして私は、腹の中から湧いて出る要求を、取り敢えずは、はぐらかす事が出来た。

　余所に先駆けて料金を下げたので、その料亭は今や大はやりなのだ。こちらも、単価を下げる要求をのんで、仕事の量は増える一方だった。

　これ幸いに、私は体が動かなくなるまで働いて、ぶっ倒れてそのまま死んだと思う。実際死んだかどうかは、誰も自分では分からない。何とかキャベツと人参のジュースだけで済んだ。（二〇〇一年三月二十七日）

*　　*　　*

孫

　真っ昼間の、改装されて間もないアーケード街の、それも駅に近い南側の端の方の、少しだけ奥まった所にあるだけなのに、直ぐには誰も気付かなかった。

　火は静かに、その家を包んでいた。周りが見物人でいっぱいになった頃には、もう手が付けられず、消防の何人かも、彼らが見ている前で、手持ち無沙汰で、

何となく間が悪そうだった。一軒だけ少し離れていて、類焼の危険も余りなかった。

電器屋の奥さんの古くからの友達の話では、そこには少し前まで、初老にさし掛かる母親と、まだ二十歳前かそこらの息子が住んでいたそうだが、今はどちらもそこを出て、空き家になっていたという事だ。名前を聞くと、その母親の方なら、何度かこの辺りで見掛けて、顔くらいは知っていた。息子は知らない。

さて次の日、空いた時間を見付けると、さっそく野次馬根性で、足はどうしてもそこへ向く。ロープが張ってあったが、端っこだけで、真ん中はすっかり弛んで、地面に付いて踏ん付けられていた。焼け跡にいるのはもう、警察や消防ではなく、話の中味からして、保険屋と電線屋とガス屋と商店街の世話役らしい男だった。

私は、さも私も、彼らの話に加わっているように、直ぐ側で暫く頷いたりしておいてから、布団や衣類など、水浸しで焼け残った家財が山になっている所へと、屋根の焼け具合を確かめたいような振りをして、ふらふらと近寄って行った。

そこに、それだけ少しも焼けていない、白いビニールの艶々した表紙の、小さなアルバムを見付けた。もう誰かが一度手に取って、それをまたそこに置い

ていったかのように、ぽつんとそれだけが目に付く。男達が、全くこちらに注意を払っていないのを確かめてから、私はそれとなく腰を折って、腕を垂らし、表紙をめくった。

いきなり、ベッドの白いシーツの上で、真っ裸ののっぺりした胴体の若い女が、顔を半分隠して、性器を剥き出して横たわっている写真が、出てきた。めくれどめくれど、同じベッドの上で、取り得る限りの様々なポーズの同じ裸の女が、写っている。

この間までここに居た息子が、自分の彼女を裸にして撮ったに違いない。最後の方に一枚、顔がすっかり分かる写真が出てきた。ほぼ真正面を向いて、レンズの方を見ている。それはどう見ても、その息子の母親の顔なのだった。裸の肉体は、せいぜいが二十歳過ぎくらいだ。その母親の顔も、見ようによっては、若く見えなくもない。それともストロボの光が強すぎて、皺を全て白くすっ飛ばしただけだろうか。それでも初老の顔と同じ顔付きで、誰が見ても、直ぐに彼女であると見分けられはするだろう。

しかし、女の顔を写真に撮ると大抵浮いて出るおしろいは、その顔に一切塗られていないようだ。頬は、張りのある若い素肌に輝いている。写真は全て、その母親の若い頃に撮られたものと考えるしかない。とすると、大まかに数えて、四十年くらいの時を遡らなければならない訳だ。写真の色が、鮮やかなま

ま、少しも褪せていないのは、どうした事だろう。

　山になっている焼け残りの家財は、どう見ても若い男用のものばかりだ。アルバムも息子が持っていて、この家に残していったものだろう。息子は、母親そっくりの娘を見付けてきて、モデルにしたのだろうか。

　それとも、別に私も、母親の顔を側でまじまじと観察した事がある訳でもなく、その頬は、今も若い娘のように輝くままで、その隠された肉体にしても、ずっと若いままなのかも知れない。そしてその裸を、自分の息子に撮らせたのだろうか。或いは別の誰かに撮らせて、それを見付けた息子が、こっそり持ち出したのだろうか。

　それとも、やはりそれは、ずっと昔の写真で、火事の熱によって、褪せた色が元に戻ってしまったのだろうか。それとも、そこには元々、見るからに六十歳の女の体が写っていて、火にあぶられて、その体が若返ってしまったのだろうか。いやいや、取り留めのない夢の中だったら、そんな事も易々と起こるだろうが。

　二人はハタからは親子に思われているが、実は恋人同士なのではないだろうか。それなら、夢でなくても大いにあり得そうだ。そして何かの事情で、女の方だけが、四十年後を生きる事になって、それでも二人は同居を続けられたので、世間へは親子という事で通しているのだろうか。ひょっとしたら、ただ同

じ家に住むだけでなく、二人は体を交わす事さえ出来るのかも知れない。ただそうしていても、その間には、四十年の隔たりが挟み込まれているのだ。

ではこの私は、二人の内、どちらと同じ時間を生きているのだろう。その母親、いやその女と共に、私も、今から四十年後を生きていないだろうか。

このアーケード街の直ぐ前は、砂浜である筈だ。夏の初めの頃、そこに誰かがテントを張って、ほんの二、三日キャンプをしていた。そこは別に、キャンプ場でも何でもない。私はそれを、遠くから眺めた。ぽつんと、焚き火の跡だけが黒く残った。

それが四十年も経てば、そこはすっかり埋め立てられて、分譲住宅が建ち並び、塗料だか接着剤だか化学建材だかの匂いのする、濁った汚い風が吹き抜け、極彩色の古代ギリシャの殿堂のようなパチンコ屋がそびえているだろう。線路は高架になり、駅ビルが建ち、ぽつぽつあった商店も、アーケード街に集められるだろう。

振り返ると、その家は焼けておらず、その両側には、同じような黒塗りの木の家が数軒、静かに並んでいる。真夏の夜の浜風を入れるために、いっぱいに開けられた窓から、裸の男女の姿が見える。壁際の狭いベッドの上で女がポーズを取り、まだ生まれていない息子の父親になる男が、クリーム色の一眼レフを構えている。傍らには、あのアルバムがあり、彼らは飽きもせず、二冊目に

取り掛かっているのだ。

　すると、その今から四十年後を生きているのは、ただ私独りであって、焼けた家の二人は、初めからその四十年後の住人であって、ごく当たり前の、何処にでもいる母親と息子なのだった。その家にしても、周りがすっかり変わる中で、たまたま取り壊されないで、残っていただけのものなのだ。ただ火事場のアルバムだけが、その四十年後に紛れ込んで来たのだ。

　それでその写真の新しさも、女の体の若々しさも納得がゆく。

　いや、四十年が経ったなら、その時はまだ生まれていないにしても、それから直に生まれたのなら、息子は四十歳近くでなければならない。

　それなら、その二十歳そこそこの若者は、初老にさし掛かる女の孫なのだろう。女は子供を産んで直に男に棄てられ、女にとっては息子、若者にとっては父親である男は、早死にしたか家出したかして、女は、その男の息子、つまり彼女の孫を引き取って、大人になるまで、女手一つで育てたのだ。

　私は独り、四十年後のアーケード街を抜けた。（二〇〇一年三月二十九日）

胎児、その他

著者　u_

© 2001 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published